

愛知県埋蔵文化財センター発掘調査報告書 第5集

すぎ やま
杉 山 遺 跡

1988

財団法人 愛知県埋蔵文化財センター

序

愛知県新城市は、「山の湊」といわれ、古くから豊川の舟運の起点として、また伊那街道の中継地、信州方面と東三河地方とを結ぶ交通の要衝としても栄えてきたところであります。こうしたことから、先人の遺産、足跡としての文化財や遺跡が数多く所在しております。

このたび、(財)愛知県埋蔵文化財センターでは、一般国道151号線新城バイパス建設工事にともなう事前調査として、新城市杉山地内の杉山遺跡の発掘調査を、愛知県の委託事業として実施しました。調査の結果、奈良時代の竪穴住居跡をはじめとして、鎌倉・室町時代の屋敷地等々、遺構や遺物が数多く検出され、当時の人々の生活・文化に関する貴重な知見を得ることができました。それらの調査結果をまとめ、ここに報告書を作成しました。

本書がひろく、歴史研究の資料として活用されるとともに、埋蔵文化財に対する御理解の一助ともなれば幸いと存じます。

最後になりましたが、調査の実施にあたりまして、地元住民の方々をはじめとする関係者の皆様に格別の御協力をいただきましたことに対し、深く感謝申し上げる次第であります。

昭和63年3月

財団法人愛知県埋蔵文化財センター

理事長 中根昭二

目 次

I 序 章

- 1. 調査の経緯 1
- 2. 遺跡の立地と環境 1

II 遺 構

- 1. 基本的層序 5
- 2. 遺 構 5

III 遺 物 15

IV 自然科学的分析

- 「中世の土器」の胎土分析（重鉍物） 43

V 考 察

- 1. 杉山遺跡出土の「中世土器」について 49
- 2. 遺構の時期別変遷 60
- 3. 結 語 64

挿図

	頁
第1図 位置図	2
第2図 調査区位置図	3
第3図 遺構配置図	4
第4図 土層図	5
第5図 S B 01実測図	7
第6図 S D 01断面図	8
第7図 S B O 02～04実測図	11
第8図 S B 05実測図	11
第9図 S B 06(上) S B 07(下)実測図	12
第10図 S K 3012(上) S K 3020(下)実測図	13
第11図 遺物実測図1(第Ⅰ期)	15
第12図 遺物実測図2(第Ⅱ期)	17
第13図 遺物実測図3(第Ⅱ期)	18
第14図 遺物実測図4(第Ⅱ期)	19
第15図 遺物実測図5(第Ⅱ期)	21
第16図 遺物実測図6(第Ⅱ期)	22
第17図 遺物実測図7(第Ⅱ期)	23
第18図 遺物実測図8(第Ⅱ期)	25
第19図 遺物実測図9(第Ⅱ期)	26
第20図 遺物実測図10(第Ⅲ期)	28
第21図 遺物実測図11(第Ⅲ期)	29
第22図 遺物実測図12(第Ⅲ期)	32
第23図 遺物実測図13(第Ⅲ期)	33
第24図 遺物実測図14(第Ⅲ期)	34
第25図 遺物実測図15(第Ⅲ期)	35
第26図 遺物実測図16(第Ⅲ期)	36
第27図 遺物実測図17(第Ⅲ期)	39
第28図 遺物実測図18(第Ⅲ期)	40
第29図 遺物実測図19(第Ⅲ期)	41
第30図 遺物実測図20	42
第31図 磁器・陶器類の分類(折込み)43の前	
第32図 土鍋A類	50
第33図 土鍋C類	52
第34図 土鍋E類	53
第35図 皿類	53
第36図 清洲城下町遺跡出土の土鍋類	57
第37図 遺構の時期別変遷図	63

表目次

第1表 調査期間等	1
第2表 遺構番号	6
第3表 胎土分析試料一覧	45
第4表 胎土重鉍物組成	46
第5表 胎土重鉍物組成(グラフ)	47
第6表 土鍋の伴出関係	54
第7表 土鍋の消長	55
第8表 遺構の時期別一覧	62

図版

図版1 遺構実測図1	図版6 61A区・62調査区全景
図版2 遺構実測図2	図版7 61B区・62調査区遺構1)
図版3 遺構実測図3	図版8 61B区・62調査区遺構2)
図版4 61A区全景	図版9 石器・縄紋土器
図版5 61A区遺構	

例 言

1. 本書は、愛知県新城市杉山地内に所在する杉山遺跡^{スギヤマ}の発掘調査報告である。
2. 発掘調査は、愛知県土木部がすすめている一般国道 151 号線新城バイパス建設工事に伴うもので、県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けた（財）愛知県埋蔵文化財センターが実施した。
3. 調査期間は、昭和61年 7 月～10月および同62年 4 月～5 月である。
4. 発掘調査は、竹内尚武（現県立国府高校）北村（旧姓浅井）和宏、菅沼良則（以上昭和61年度）、土屋利男、酒井俊彦、野口哲也（以上昭和62年度）が担当した。
5. 調査に際しては、次の関係機関の指導・協力を得た。
愛知県教育委員会文化財課、愛知県土木部、新城市教育委員会
6. 遺物の整理・製図等については次の方々の協力を得た。
石原智恵子、加藤とよ江、市川浩代、伊藤伸幸、坪井裕司、平岩圭子、吉田久子、
山田久美子、津坂貴美子（敬称略）
7. 調査区の座標は、建設省告示に定められた平面直角座標第Ⅶ系に準拠し、これを示した。
8. 本書の執筆・編集は、北村和宏が担当した。
9. 調査に関する資料は全て（財）愛知県埋蔵文化財センターで保管している。

I . 序 章

1. 調査の経緯

愛知県土木部では、昭和47年以来、新城市街地における一般国道 151 号線の交通量の緩和を目的として、国道 151 号線新城バイパスの建設工事を継続して行っている。

今回の^{スズヤマ}杉山遺跡(新城市杉山地内)の発掘調査は、このバイパス建設工事前の事前調査として愛知県土木部から愛知県教育委員会を通じて委託を受けて(財)愛知県埋蔵文化財センターが実施したものである。調査区・面積・調査期間等については第 1 表に示すとおりである。

調査に際しては、各調査区ともに旧耕土までを重機により除去した後、手掘りで掘り下げ、遺構の検出を行うという方法で行った。後述のように耕作土直下は黒ボク層であり、遺構の埋土も黒ボク土を基調としたもので、同層中での遺構の検出は困難をきわめた。結果的にはほとんどの遺構は黒ボク層下の黄褐色土(中位段丘、基盤)の上面で検出することとなった。そのため遺構の検出面を層位的にとらえることはできなかった。

第1表 調査期間等

調査区	期 間	面 積	担 当
ⅢSS61A	1986. 7 ～ 8	1,300㎡	竹内尚武、北村(旧姓浅井)和宏、菅沼良則
ⅢSS61B	1986. 9 ～ 10	1,200㎡	同 上
ⅢSS62	1987. 4 ～ 5	1,000㎡	土屋利男、酒井俊彦、野口哲也

※ ⅢSSは杉山遺跡の略称

2. 遺跡の立地と環境

杉山遺跡が所在する愛知県新城市は、県東部を中央構造線に沿って東北から西南に流れる^{トヨガワ}豊川が三河高原をぬけて豊橋平野(東三河平野)に入る地点に位置する。こうした立地がさいわいしてか、新城の町は古くから信州方向と東三河地方とを結ぶ交通の中継地、要衝として繁栄し「山の湊」と称せられてきたところである。

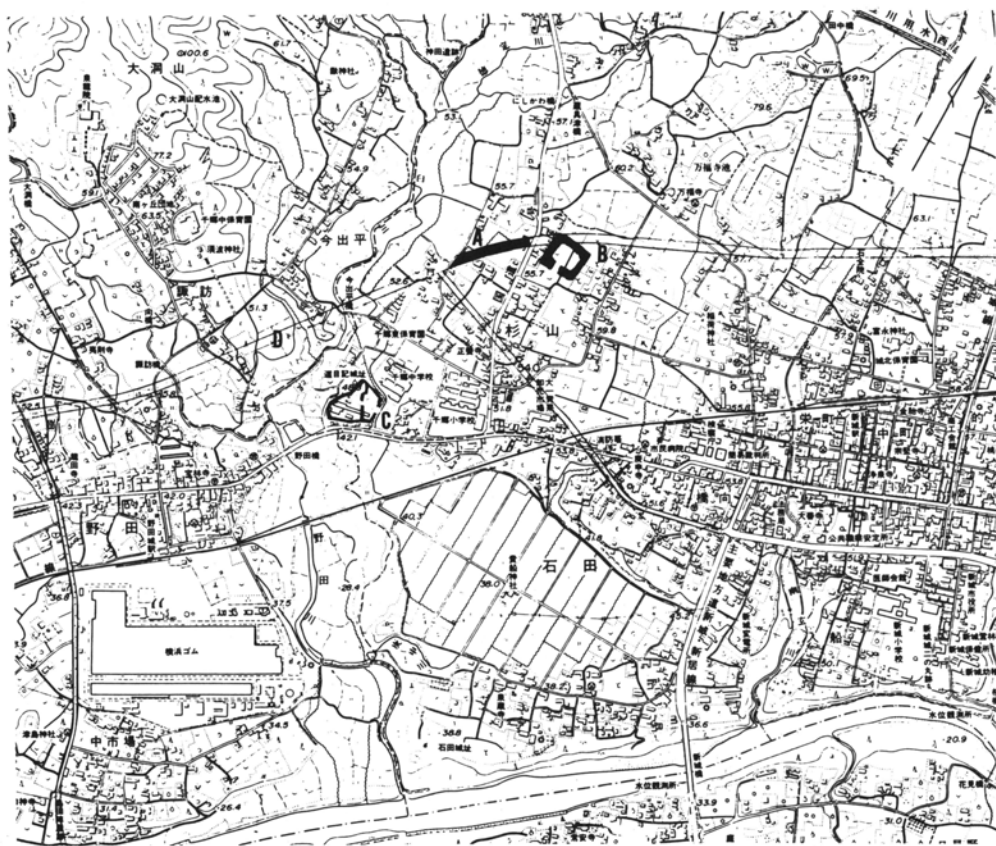
今回発掘調査を実施した杉山遺跡は、この新城市街地の南、愛知県新城市大字杉山字野仲地内を中心とする一帯に所在する。この地は、豊川右岸に展開する河岸段丘の中位面にあたり、この段丘崖から幾分内側に入ったところ、中位段丘面を南北に開析する^{ウスコ}臼子川を西にのぞむところである。標高は56.0m前後である。JR飯田線野田駅の北東、直線距離

にして約1.3km、新城市立千郷小学校の北側にあたる。

遺跡の現状は、畑地および農家の屋敷地となっているが、調査地の北端までは国道151号線バイパスの2車線分が完成をみている。

杉山遺跡を中心に周辺の遺跡を概観しておく。調査地の北端より東約0.5kmのところには杉山端城^ハが位置し、調査区の南約0.5kmのところには道目記城跡^{ドドメキ}が、同じく南西約2.5kmのところには歴史上著名な野田城跡(県史跡)が位置している。ことに、杉山端城は、一辺が50mほどの方形の敷地に土塁と堀がめぐる城(居館というべきか)である。城跡からは室町時代末(戦国時代)のみならず13世紀～16世紀にかけての時期の遺物がみられ、杉山遺跡の第Ⅱ期(鎌倉～室町時代一後述)と年代的に一致をみることから、両者を一連のものとしてとらえていく必要がある。さらに付言するならば、杉山端城の周辺には、端城の軸方位に沿った「道」が展開しており城を中心とした一種の方格地割の存在が予想される。

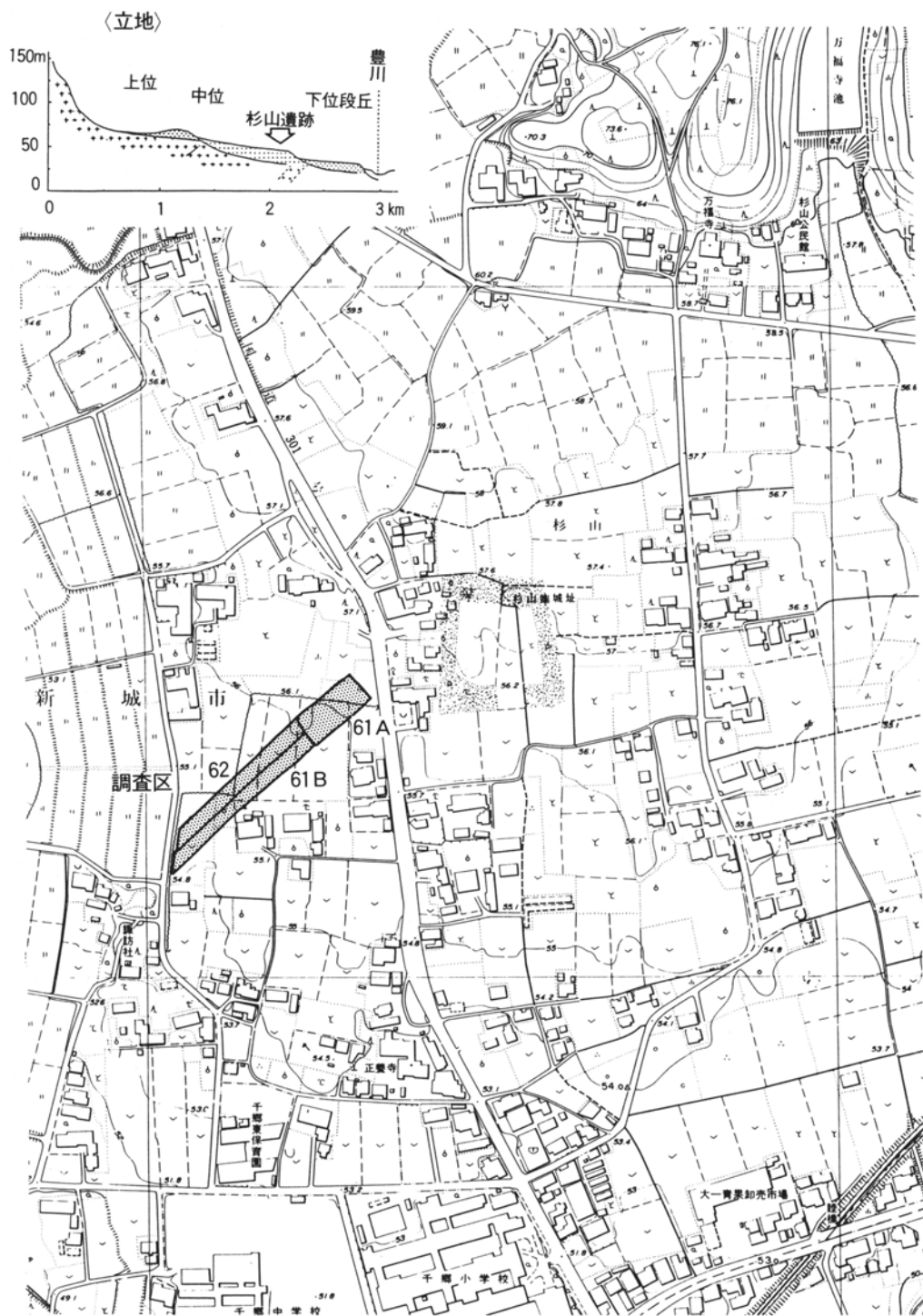
調査地の西、臼子川をはさんだ対岸には諏訪遺跡が所在する。弥生時代～平安時代にかけての時期の集落遺跡で、奈良時代の堅穴住居跡もみられ、位置的に近接することから、杉山遺跡の第Ⅰ期(奈良時代一後述)との関連が注目される。



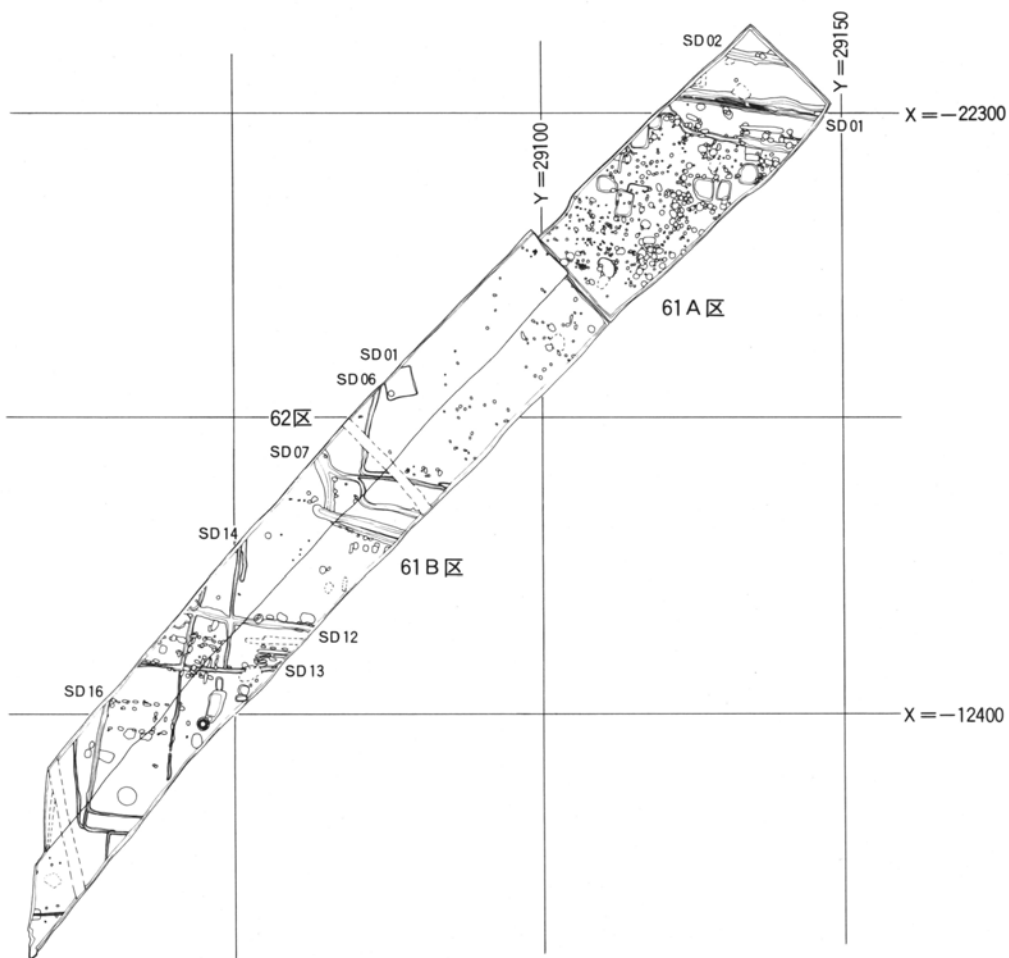
第1図 遺跡位置図

(1:20,000)

A 杉山遺跡(調査区) B 杉山端城跡 C 道目記城跡 D 諏訪遺跡



第2図 調査区位置図 (1:5000)



第3図 遺構配置図 (1:1250)

Ⅱ．遺 構

今回の調査地は、国道 151 号線新城バイパスとしての用地買収前は、宅地及び畑（調査区北半は桑畑、南半は宅地、菜畑）であったところであるが、調査時点では草生地化していた。地表面の標高は、調査区北端で56.1m、南端で54.8mをはかり、地形的には、前述の如くきわめてなだらかな豊川右岸の中位段丘面上に調査地は位置し、調査区南西端より西方は段丘崖となっている。

1. 基本的層序

調査地の層序は基本的に上から①耕土(畑0.3m)、②黒ボク土層(0.3～0.6m)、③黄褐色土(中位段丘面 基盤)の順である。遺構は、壁面での断面観察による限りではいずれも耕作土直下で検出され得るものであるが、黒ボク土層中で面的に遺構を捉えることは困難をきわめ、結果的に、遺構の検出は③の上面において行なわざるを得なかったものがほとんどである。

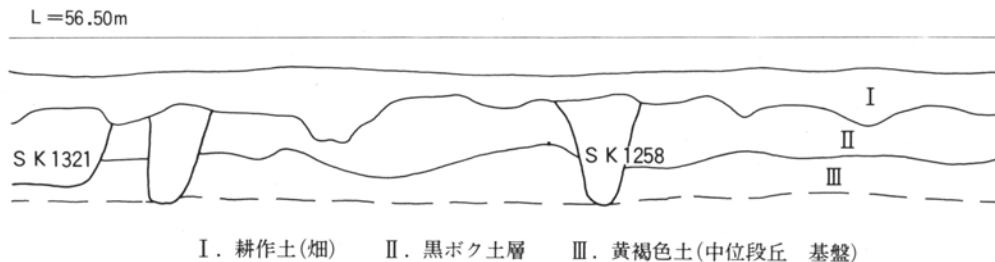
2. 遺 構

今回の発掘調査で検出した遺構は、竪穴住居跡(1)、掘立柱建物跡(7)、溝(22以上)、井戸(1)、土坑多数である。これらの遺構は、出土遺物および遺構の相互関係からみて、(1)奈良時代、(2)鎌倉～室町時代、(3)江戸時代末期の3時期に集中・大別される。

以下、ここでは各時期ごとに、各遺構を種類毎に説明し、時期別の配置・組合せおよびその変遷等については、後述することにする。

遺構番号について

今回の調査は、昭和61～62年度にかけて調査区を、61A区、61B区、62調査区の3つに分けて行った(第3図)。



第4図 土 層 図(調査区北部東壁)

(1:50)

検出遺構の番号については、各調査区毎に付与したため、同一遺構であるにもかかわらず、調査区により異なった遺構番号をもつことになった。そこで、本書では、以下のようにこれを整理しておく。

土坑については、次のとおりに区別する。

61A区を1000番台で表す。たとえば、

61A区のSK03は、SK1003、同じく

SK120をSK1120と表す。以下同様

に、61B区については2000番台で、

62調査区については3000番台で表す。

溝については、第2表のとおりに統一する。

遺構番号	調 査 区		
	61 A 区	61 B 区	62
S D 01	S D 01		
S D 02	S D 02		
S D 03	S D 03		
S D 04	S D 04		
S D 05	S D 05		
S D 06		S K 73	S D 01
S D 07		S D 04	S D 02
S D 08		S D 01	S D 02
S D 09		S D 02	S D 02
S D 10		S D 03	S D 03
S D 11			S D 04
S D 12		S D 05	S D 06
S D 13		S D 10	S D 09
S D 14		S D 12	S D 06
S D 15		S D 11	S D 08
S D 16		S D 15	S D 10
S D 17		S D 14	
S D 18		S D 16	S D 11
S D 19		S D 13	
S D 20		S D 17	
S D 21			S D 14
S D 22			S D 13
S K 3167			P - 167

第2表 遺 構 番 号

(1) 奈良時代の遺構

調査区の中央で竪穴式住居跡(SB 01)が1棟検出された。

SB01 (第5図) 北西隅の一角が調査区外となるが、1辺が5.0mの正方形プランの竪穴住居跡である。床面積は25㎡。床面からの遺存壁高は0.08m(セクションでの観察では0.3m)で、傾斜角はほぼ垂直。床面上には、南西隅に径1.0m、深さ0.3mの円形プランの土坑が1基存するほか、柱穴等の土坑および炉、カマド等は認められない。ただ炉、カマド等の施設については、埋土中より加熱をうけた棒状の粘土塊が出土しており、調査区外にカマド等の施設が遺存する可能性が高い。埋土は、黒ボク土を基調とする黒色土で、分層できない。床面上および土坑から、8世紀代の須恵器、土師器が出土した。

(2) 鎌倉～室町時代の遺構

鎌倉～室町時代の遺構は、調査区の北半に集中して検出された。

建 物

SB02 (第7図) 調査区の北部、東壁近くで検出された掘立柱建物跡。北西隅の東西、

南北各1間分を検出したにすぎず、棟方向等を特定し得ない。柱間は、南北3.0m、東西3.6m。柱掘形は径0.7mほどの円形プランで、深さは0.8m。埋土は、黒色土で柱痕を確認するにいたらなかった。

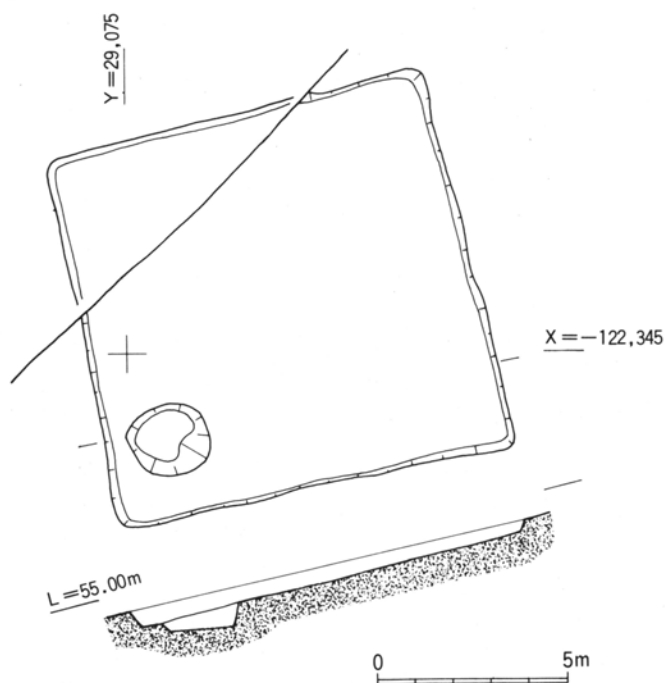
SB03 (第7図) SB02とほぼ同位置——ただし切合わない——で検出された掘立柱建物跡。SB02と同様に北西隅の東西、南北各1間分を検出したにすぎず、棟方向等を特定できない。柱間は南北4.2m・東西3.6mである。柱掘形は、南北方向に細長な径1.2mほどの不整形を呈し、深さは、0.5mをはかる。埋土は黒色土で、柱痕は未確認。柱掘形のSK1194より灰釉系陶器碗(山茶碗)が出土。

SB04 (第7図) 上記SB02、SB03の南で検出された掘立柱建物跡。北西隅の南北、東西を各1間分検出したにすぎず、棟方向等を特定するにはいらない。柱間は、東西3.9m・南北3.8mである。柱掘形は径0.9m前後の略円形プランのもので、深さ0.3~0.9mと幾分深淺がある。埋土は黒色土で、柱痕は確認できなかった。

SB05 (第7図) SB04とほぼ同位置で検出された掘立柱建物跡。北西隅を南北、東西各1間分を検出したにすぎず、棟方向等を特定できない。柱間は、北西隅より東西方向に2.7m、3.9m、南北方向に2.4m、2.7mと一定していない。柱掘形は径1.0~1.3mの円形プランのもので、深さ0.3mをはかる。埋土は黒色土で、柱痕については確認できなかった。

なお、ここで少し注意しておきたい点がある。それは上記SB04、SB05の周辺に、これらの柱掘形と同型同大の土坑が多々みられるという点である。ここでは、上述の2棟を考えたが、いずれも北西隅のみであることから、若干の問題が残る。今後、調査区の東側が発掘調査されることになれば、修正の可能性があるので記しておく。

SB06 (第8図) 上記SB04、SB05の西で、建物の根石と考えられる扁平な石が存する径0.5m前後の土坑がいくつか検出された。これらは直線的かつ等間隔(東西2.7~



第5図 SB01 実測図

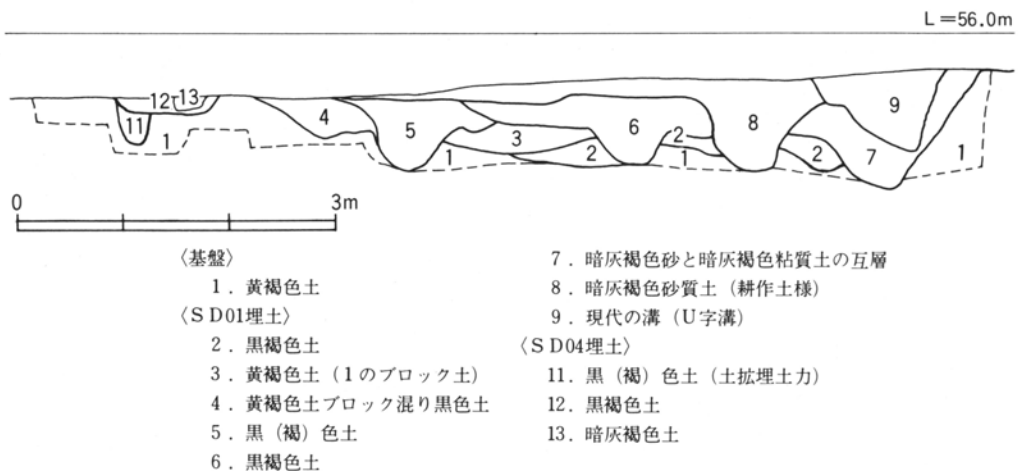
2.8m、南北0.9m) に並ぶという位置関係から、建物の根石と判断した。このほか石を欠くものの、上記の土坑との位置関係が、直線上でかつ柱間が同一ないしその倍数となる土坑を選択して示したのが第8図である。これより、東西方向に棟方向をもつ建物の可能性がある。なお、このSB06の柱掘形の一部は、13世紀の灰釉系陶器の碗、皿類が出土したSK1349を壊している。このことからすれば、SB06は柱掘形内より灰釉系陶器の碗類(13世紀)が出土するSB03、SB05より新しい時期の所産といえようか。

溝

SD01 (第6図) 調査区の北部で検出された5～7条の溝の総称。本来、これらの5～7条の溝は切合い関係にあり、区別しなければならないが、いずれも黒ボク土を基調とする黒褐色土であるため、その識別は困難をきわめた。断面で区別し得ても、平面的には部分的に区別し得るにすぎなかった。この点で問題を残した。結果的に、切合い関係にある溝の埋土を取除いたのが第38図に示す状況である。これらの切合う溝は、断面観察によれば、それぞれは巾2.5～1.0mほどで、おおむね走向方位はN-80°-Wを示すが、なかには蛇行するものもみられる。埋土は、一部に灰褐色土のものもみられるが、多くは黄褐色土(基盤)ブロックを混じえる黒(褐)色土である。

SD02 (第38図) 調査区の北端で検出された巾1.8m、深さ0.7mの溝。断面形は「V」字～逆梯形状を呈す。走向方位はN-82°-Wで、SD01とは5.0mほど間隔をあけて平行する。埋土は、大きく二分され、大規模な再掘削が行われた可能性がある。下層の埋土は黒色土で、灰釉系陶器の碗類(13世紀代)が多く出土し、上層の黒褐色土からは土鍋C・D類の出土をみる。

SD04 (第39図) SD01の南肩に沿った位置で検出された巾2.2m、深さ0.3mほどの溝。ただし西端部は北へ曲がり、SD01の下となる。



第6図 SD01 断面図 (トレンチ02西壁)

SD05 (第39図) SD01の埋土を取除いた段階で検出された、東西方向に7.0m、巾1.0m、深さ0.8mほどの溝。SD01の各溝に比べ、極端に黄褐色土ブロックの混入が多く、とりあえず、これをSD01から区別したが、SD01とした溝群の一つと解すべきものである。

SD06 (第39図) 調査区の中央部を「L」字形に走る巾0.8m、深さ0.2mの溝。東西方向に走る部分はSD08と重複、壊している。埋土は黒褐色土。

SD07 (第39図) 調査区の中央部で検出された巾1.5～2.5m、深さ0.5～0.8mほどの溝。断面形は「V」字形を呈す。埋土は黄褐色土混りの黒(褐)色土。平面形は西方向へ幾分開いた「L」字形を呈する。東西部分にSD10が重複し、壊されている。また屈曲部近くに東よりSD08・09の合流した溝が接続するが、新旧関係は認められない。

SD08・09 (第39図) SD08は、上記SD07の東西部の北8mほどのところを東西に走る溝。巾0.7m、深さ0.1mで埋土は黒褐色土。SD09は、このSD07・08の間を東西方向に走る巾1.0m、深さ0.3mの黒褐色土の埋土の溝で、東より11m地点で北へ折れ、SD08と合流しSD07へ接続する。SD08とSD09に新旧関係は認められない。

土 坑

土坑としてここに一括したもののなかには、その形状、埋土等からA・Bの2群に大別される。

A群 SK1060およびSK1132は、黒色土の埋土で、灰釉系陶器碗、皿類が出土。SK1175、SK1238、SK1277、SK1287、SK1349は、SB02～05の柱掘形付近に存するもので、黒色土の埋土、その形状とも柱掘形に酷似する。SK1097、SK1098、SK2005は、上記建物群とは位置を異にする(西～南方)が径1.3m、深さ0.3mほどの円形の土坑で、黒色土を埋土とし、その形状は大型の柱掘形と酷似する。SK1137は調査区の南端で検出された方形土坑(南北1.7m、東西1.5m、深さ0.3m)。黒色土の埋土で、SD20により壊されている。以上、いずれも安定した黒色土の埋土と灰釉系陶器を出土するという特徴をもつものである。このほか上記の特徴をもつものにSK1053、SK1120、SK1177、SK1178、SK1229、SK1238、SK1369、SK1444、SK1502がある。

B群 SK1003は、調査区の北部で検出された方形プランの土坑(東西3.0m、南北4.0m以上、深さ0.3m)で、床面に小土坑が3基みられる。埋土は黄褐色土混りの黒褐色土。SK1366は、SK1003によって壊される方形の土坑(南北2.8m、東西2.0m以上、深さ0.6m)で、黄褐色土混りの黒褐色土。SK1263はSD04に接する位置で検出された土坑。径3.5mほどの不整形で深さ0.3m。埋土は黒(褐)色土で比較的大形の破片の遺物が出土した。SK1325は、SK1263の南で検出された略方形の土坑(南北4.5m、東西3.5m、深さ0.6m)

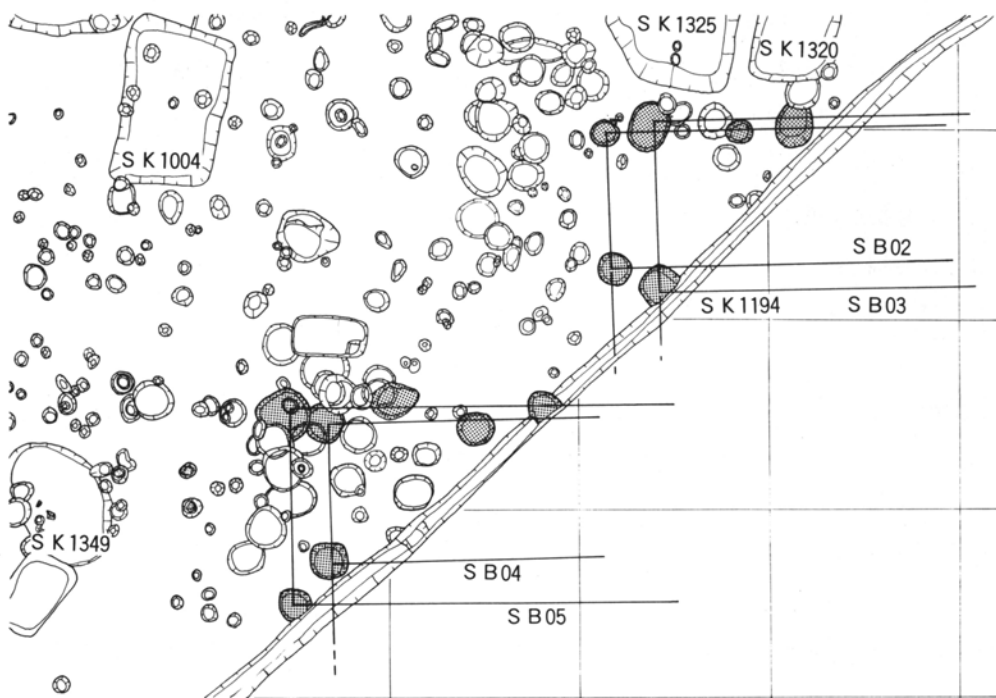
で、底面に小さな土坑が存するが、これは黄褐色混りの黒褐色土の埋土を除去した後に検出されたもの。S K 1326は、上記のS K 1325の東に接する位置にある略方形の土坑（南北4.5m、東西2.0m、深さ0.3m）で、南北長は、S K 1325と一致し、埋土も同様であることから、あたかも両者は「併設された」感がある。なお、これらS K 1325・1326の周辺には土坑が多くみられる。S K 1202は、S K 1326の北側に位置する径1.2m、深さ0.2mの不整形プランの土坑で、埋土は、黒褐色土。S K 1005は、上記S K 1003の南西6.0mのところ検出された径3.0m、深さ0.3mほどの不整形プランの土坑。埋土は黄褐色土混りの黒褐色土。S K 1004は、S K 1005の東側にある方形土坑（南北4.5m、東西2.5m、深さ0.3m）。埋土は黒褐色土で、底面の土坑はいずれも埋土の除去後に検出したもの。S K 1114はこのS K 1004の東肩部を壊す径0.4m、深さ0.5mの土坑。埋土は黄褐色土混りの黒（褐）色土。S K 1439は、S B 06の西端の柱掘形S K 1434の周辺に存する小土坑群の一つ。径0.4m、深さ0.7mの不整形プランの土坑。埋土は黒褐色土。S K 1008、S K 1009は、S D 04の西端を壊す土坑。S K 1008とS K 1009は、切合い関係にあり、S K 1009が新しい。ともに径1.0mほどで黒褐色土を埋土とする不整形プランの土坑。S K 1040は、S D 04とS K 1263との間に位置する長方形プラン（東西2.8m、南北1.0m、深さ0.4m）の土坑。S D 04の南突出部を壊している。埋土は黄褐色土ブロック（拳大）と黒ボク土があたかも充填された状況を呈している。S K 1041は、上記S B 04・05の北西隅近くに位置する長方形プランの土坑（東西2.0m、南北1.0m、深さ0.7m）で、底面の南西隅に0.3×0.3m、高さ0.05mほどの段がある。埋土は上記S K 1040と酷似する。S K 1089は、S K 1040の東2.0mのところに位置する不整形プラン（長径1.5m、短径0.8m）の土坑。土坑内の西部に河原石の集石がみられる。あるいは礎石の根石か。以上の土坑は、黒褐色土ないし黄褐色土混りの黒褐色土を埋土とし、後述する土鍋Cが伴うという特徴をもつものである。このほかに上記の特徴を有するものとして、S K 1031、S K 1027、S K 1033、S K 1080、S K 1119、S K 1139、S K 1157、S K 1206、S K 1220、S K 1366がある。

(3) 江戸時代末期の遺構

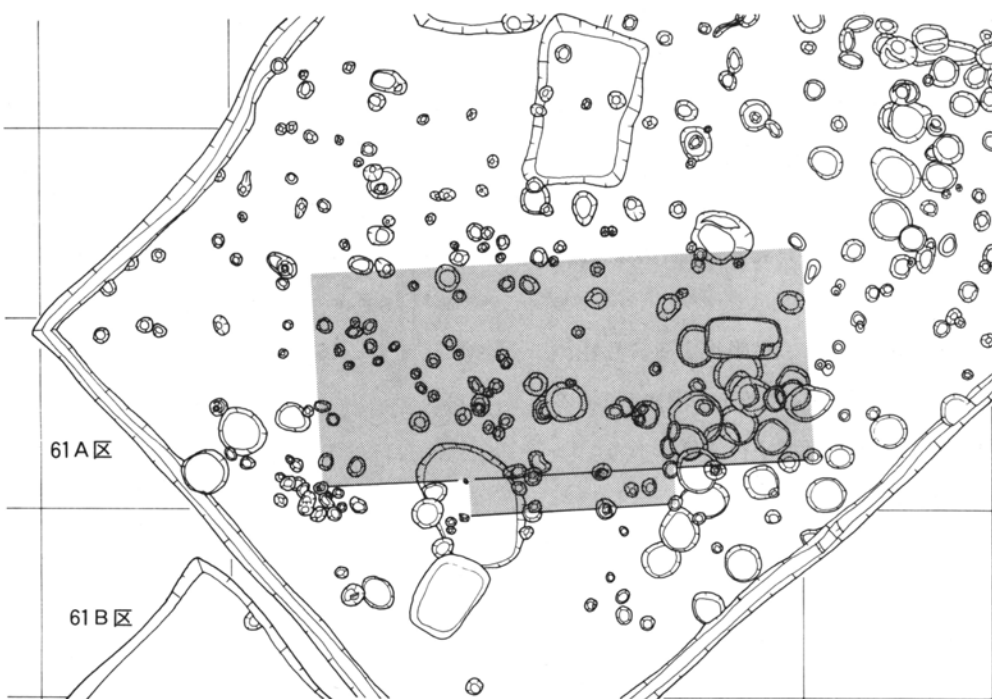
江戸時代末期(19世紀代)の遺構は、調査区の南半で集中して検出された。

建 物

SB07 (第9図) 調査区の南部で検出された東西棟の掘立柱建物跡。西側にS D 16、東側にS D 15が平行して走っている。柱掘形の配置は第9図に示すとおりで、桁行5間、梁行は東側で2間、西側では妻柱の位置に柱掘形が認められない。柱間は東西1.8m、南北(東側)で2.4m。東より1間のところに間仕切りのための柱掘形と考えられるものが存



第7図 S B 02～S B 04 実測図 (1:200)



第8図 S B 06 実測図 (1:200)

す。また、北西隅にも仕切りのためと考えられる柱掘形が存す。南側の柱掘形が一部 S K 2136により壊されている。なお柱掘形は、東西ないし南北方向に細長（直径1.0m前後）なものである。埋土は黄褐色土混りの黒（褐）色土。

SB08（第9図） S B07の北東7mのところに位置する掘立柱建物跡。第9図に示すように柱掘形の配置は複雑で、その対応関係が判然としない。総じて四角形の配置を示すことから掘立柱建物跡としたが、上述の意味で若干の問題がある。柱掘形は S D 16、S D 13を壊している。

溝

SD10（第39図） 上述の S D07の東西部の北側に重複し、これを壊して東西方向に走る溝。巾1.5m、深さ0.7mで断面形は「V」字形に近い逆梯形を呈す。埋土は黒（灰）褐色土。

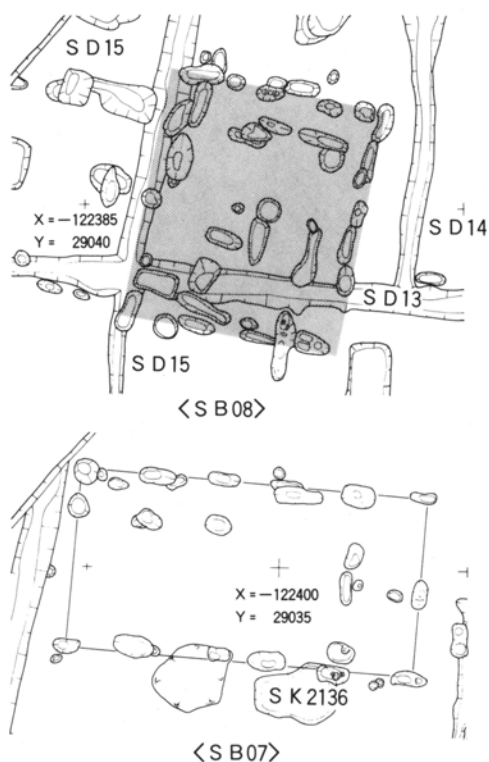
SD12（第39図） S D10の南18m地点を東西に走る溝。巾20m、深さ0.3mで西方にうつるにつれて深くなる傾向にある。埋土は黄褐色土混りの黒色土。S D14、S D15が直交するが、新旧関係は認められない。

SD13（第39図） S D12の南7～9mのところに東西に走る溝。巾0.7m、深さ0.4mで埋土は黄褐色土混りの黒色土。S D14・15と直交するが新旧関係は認められない。

SD14（第39図） S D12に直交し、S D13に直角に接続する溝。巾0.5m、深さ0.1mで、埋土は黄褐色土混りの黒色土。S D12、S D13との新旧関係は認められない。

SD15（第40図） 平行する S D12、S D13に直交する巾0.5m、深さ0.2mの溝。S D14とはほぼ平行関係にある。埋土は黄褐色土混りの黒色土で、S D12、S D13との新旧関係は認められない。

SD16～18（第40図） これら3条の溝は、いずれも調査区南部で検出された「L」字形の溝（巾0.5m、深さ0.2～0.5m。埋土は黄褐色土混りの黒色土）。これらは切



第9図 S B07、S B08 実測図（1：200）

合い関係にあって、SD 18→SD 17→SD 16の順で新しい。

SD18 (第40図) 調査区の南部を逆「L」字形に走る溝で、東西部はSD 17に重複し、これを壊している。巾0.5m、深さ0.1mで、埋土は黒(褐)色土。

SD20 (第40図) 調査区の南端を東西に走る巾0.5m、深さ0.1mの溝。SK 1137を壊している。

SD21 (第40図) SD 12およびSD 15の交点の一部を壊す位置にある溝(巾1.5m、深さ0.5m)。黄褐色土混りの黒色土の埋土は、層状堆積をなすが、検出部分が少なく、土坑の可能性もある。

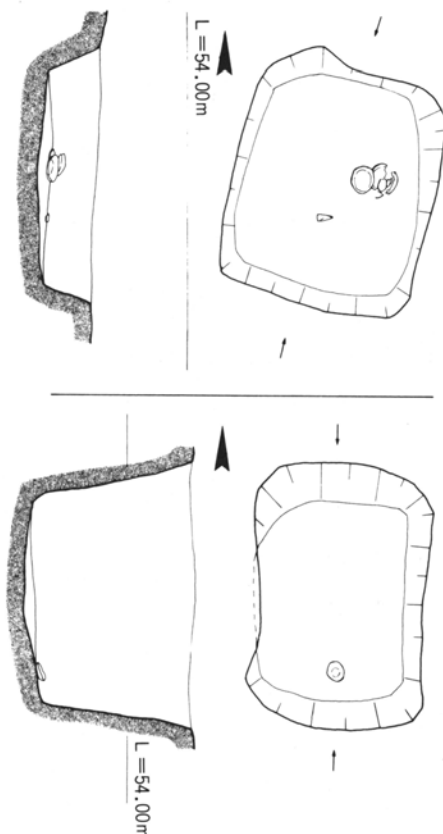
SD22 (第40図) SD 12およびSD 15の交点に位置し、SD 12・15により壊される溝。上記SD 21と同様、層状堆積をなすゆえに溝としたが、土坑の可能性もある。

井 戸

SE01 (第40図) SB 07の東に位置する。国道 151 号線バイパスに伴う用地買収直前まで開口していた井戸である。その位置関係および少なくとも明治時代には存していたという所伝から、当該期として扱った。買収後、埋め立てられており、重機による表土はぎの際、気付かずに上端部を壊してしまった。検出面の上端で径4.1mほどの掘形をもち、その中央に石組の円形井戸枠(径1.8m)が構築されている。石材は花崗岩および河原石が用いられている。井戸枠内は、竹筒をたて、山砂により埋め立てられていた。井戸枠内埋土を掘り下げる段階で、石組の裏の黄褐色粘土がいつしか流れ落ちて空洞化していることが判明したため、掘り下げおよび縦断面図の作成を取止めざるを得なかった。なお、調査終了時に重機による掘り下げ、たちわりを実施したところ、検出面より約5.0m下で湧水層に達し、石組の基部が存していた。長さ1.5mほどの松材を井桁状に組み、その上より石組みを行っていたことが判明した。埋土中からの遺物の出土は認められなかった。

土 坑

土坑としてここに一括されるもののなかには、その形状、埋土等から、ある程度の類別



第10図 SK 3012(上)、SK 3020(下) 実測図 1:00

ができた。

S K 2110、S K 2135、S K 2118、S K 2117、S K 2134は、S E 01の北および南側に位置する大形土坑。いずれも埋土は黒色土である。特にこれらが注意されたのは、基盤（黄褐色土および黄褐色粘質土の互層）の黄褐色粘土部分までを掘削し、砂混りの黄褐色土を掘削していない点である。一つの解釈として井戸組の裏込め用粘土の採掘跡の可能性を考えたい。ちなみにS K 2135は、S E 01と連続している。なお、これら土坑の底面には巾10cmほどの工具痕と考えられる凹凸が観察される。S K 3012とS K 3020は方形プランの土坑。S K 3012は、S D 15の西とS D 13の北で検出された南北3.0m、東西2.8m、深さ0.8mの方形土坑。埋土は黄褐色土混りの黒色土で、底面やや上で土師の皿が3点出土（うち2点は完形）。S K 3020は、S D 16とS D 18の間で検出された方形土坑（南北3.5m、東西2.3m、深さ1.3m）。埋土は黄褐色土混りの黒色土で、底面に接して土器の皿（1個体で完形）および貨銭「寛永通宝」が7枚出土。「墓」の可能性がある。S K 3167は、S D 07の埋土の上面で検出された径0.5m、深さ0.1mほどの土坑。この土坑の出土遺物は、S D 07の下限を知る手掛りとなるもの。S K 2136は、S B 07の柱掘形に壊される長径2.0mほどの不整形の土坑。S K 3007、S K 2109、S K 2092、S K 2141は、規模に大小はあるが、開口部径に比べ、底部が大きくなるいわゆる「袋状土坑」である。埋土は、黄褐色土混りの黒色土。このほか出土遺物等により、当該期に属する遺構としては、S K 3011、S K 3017がある。

以上の遺構を一覧表にまとめると第7表のとおりになる。

付記 今回の調査で、若干数ではあるが時期を特定し得ない縄紋土器、石器（打製石斧）および剥片の出土をみた（図版9）。本来、これをもって「縄紋時代」の項を設定すべきかも知れないが、いずれも上記の遺構の埋土乃至遺構検出時の出土であり、当該期の遺構が認められなかったことから、調査区の周辺において今後、縄紋時代の遺構が検出されることが予想されるものの、ここでは時期区分、段階設定からはずした。なお、石の剥片について、「先土器時代」の所産の可能性を指摘する意見もあり、いくつか基盤層に試掘坑を設けたが、遺物包含層等を認めるにはいたらなかった。

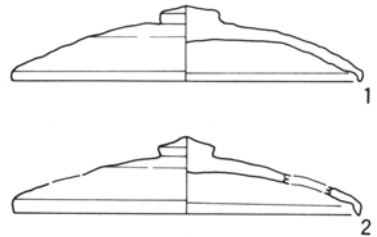
Ⅲ．遺物

今回の発掘調査により出土した遺物には、土器・陶磁器類、金属製品、石製品、ガラス製品がみられる。量的には土器・陶磁器類が圧倒的に多い。これらの遺物は、既述のように、(1)奈良時代、(2)鎌倉時代～室町時代、(3)江戸時代末期の3時期にまとめられる。以下、出土遺物について、各時期毎に遺構出土のものを中心に説明する。^(註1)

(1) 奈良時代の遺物

奈良時代の遺物は、竪穴住居跡SB01からまとまって出土したほか、若干数のものが包含層中から出土したにすぎない。

SB01出土遺物 (第11図) 須恵器の蓋(1、2)のほか、図示しかできないが須恵器の甕、および土師器の甕の胴部片(2個体分)がみられる。1、2は宝珠鈕の付くもので、頂部から縁部にかけてが、笠形のゆるやかな曲線をなし、縁端部はやや丸味をもって垂下する。須恵器の甕は外面に「平行叩き」調整痕のみられる胴部片。土師器甕の1つは、長胴形態で、口縁部が大きく外反し、端部がわずかに上方へつまみ



第11図 遺物実測図1 (1:4)

上げられている。胴部外面にはタテ方向のハケ調整が口縁部はヨコナデ調整である。器壁は赤褐を呈す。もう1個体は、前者に比べ厚手で、褐色を呈す胴部片である。1、2は8世紀代に位置づけられるものであり、須恵器・土師器甕も同時期と考える。

(2) 鎌倉～室町時代の遺物

記述の煩雑をさけるため、土器・陶磁器の種類と器種について、若干の分類と用語の整理をあらかじめ行っておく。

種類 種類としては、土器・陶器および中国製磁器がある。陶器について、次の二つに区分する。

灰釉系陶器：灰釉陶器の系譜をひき、灰釉を施さない陶器

施釉陶器：灰釉陶器の系譜上にあって、釉薬を施す陶器

器種 灰釉系陶器の器種の名称については、椀、皿、鉢、壺、甕等を用い、施釉陶器については、通例に従い「天目茶椀」、「四耳壺」等の名称を用いることとする。土器の器種名

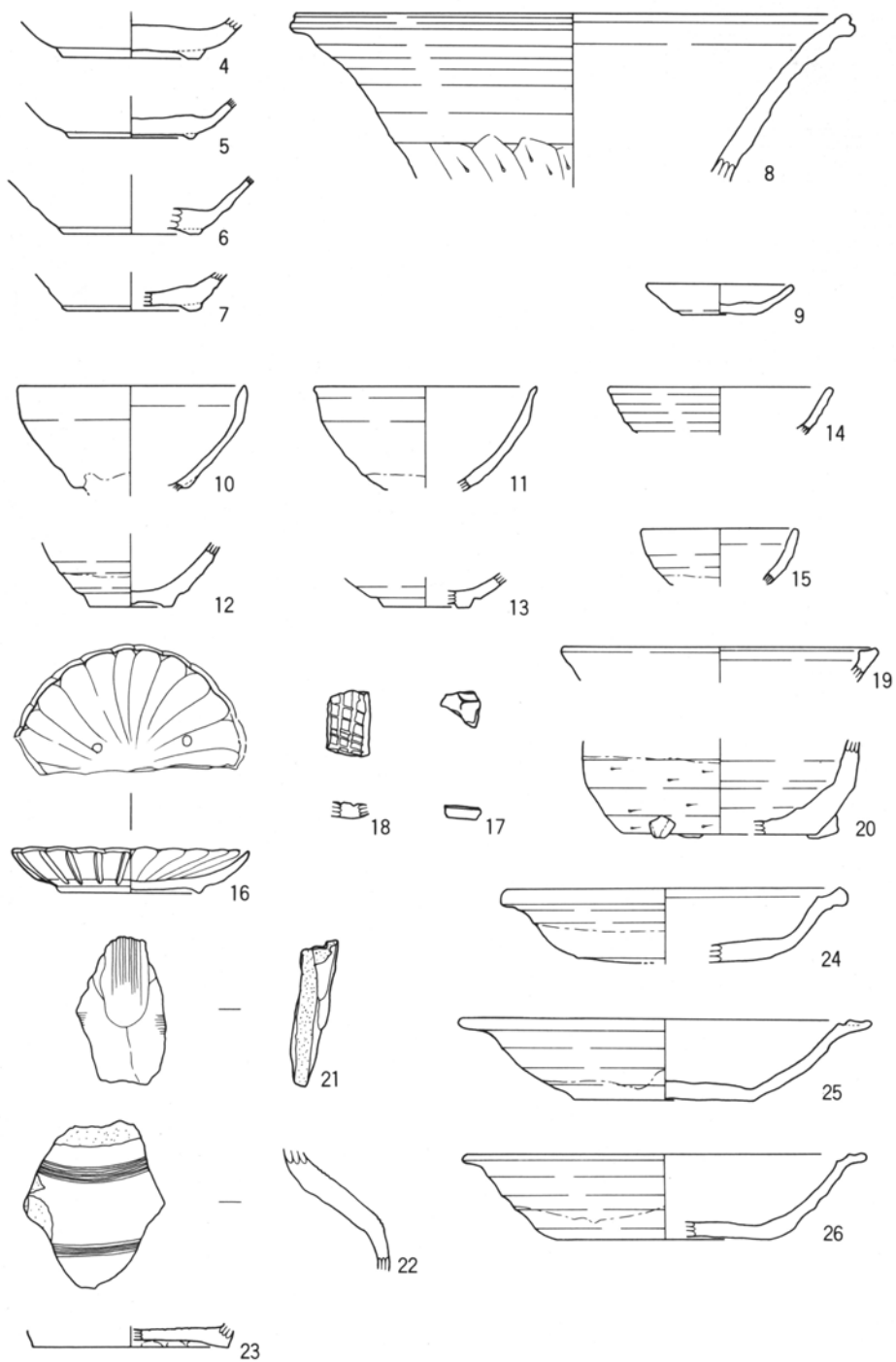
については従来から様々な名称が用いられてきているがここでは、後章（V-1）で表示する器の分類に基づくこととする。中国製磁器については、通例に従っておく。

SD01（第12～15図） 4～9および31～38は灰釉系陶器である。4～7は、碗の底部片であり、いずれも貼付高台で端部に靱痕がみられる。9は皿で、底外面に糸切痕がみられる。これら碗皿は、胎土、色調からみて渥美窯（愛知県・渥美半島）^{（註2）}産と考えられ、12世紀末～13世紀代に位置づけられる。8は鉢で、口縁部が丸味をもって肥厚し、端面に一条の沈線が入る。体部の外面はヨコナデ調整の後、タテ位のヘラケズリ調整が施されている。内面は磨滅し平滑となっている。胎土、色調等より渥美窯産とは考えられず、瀬戸窯（愛知県・瀬戸市）の可能性が高い。13世紀代に位置づけられる。31～35は、胎土、色調等から常滑窯産（愛知県・知多半島）と考えられるものである。31～33は鉢で、いずれも内面が磨滅している。31～32は、赤羽一郎氏の常滑窯編年第五期（15世紀後半～16世紀前半）に通有の形態のものである。33は、鉢の底部片で内面が磨滅している。34は、壺の口縁部片。赤羽編年第三期（13世紀後半～14世紀中葉）に通有の形態のもの。35は、甕の底部片で、時期は特定できない。

37～38は、胎土、色調から渥美窯産と考えられる壺、甕類である。37は壺の底部片で、時期は特定できない。38は甕の口縁部片で大きく外反し、端部が幾分肥厚する傾向にあることから12世紀末～13世紀前半代に位置づけられる。

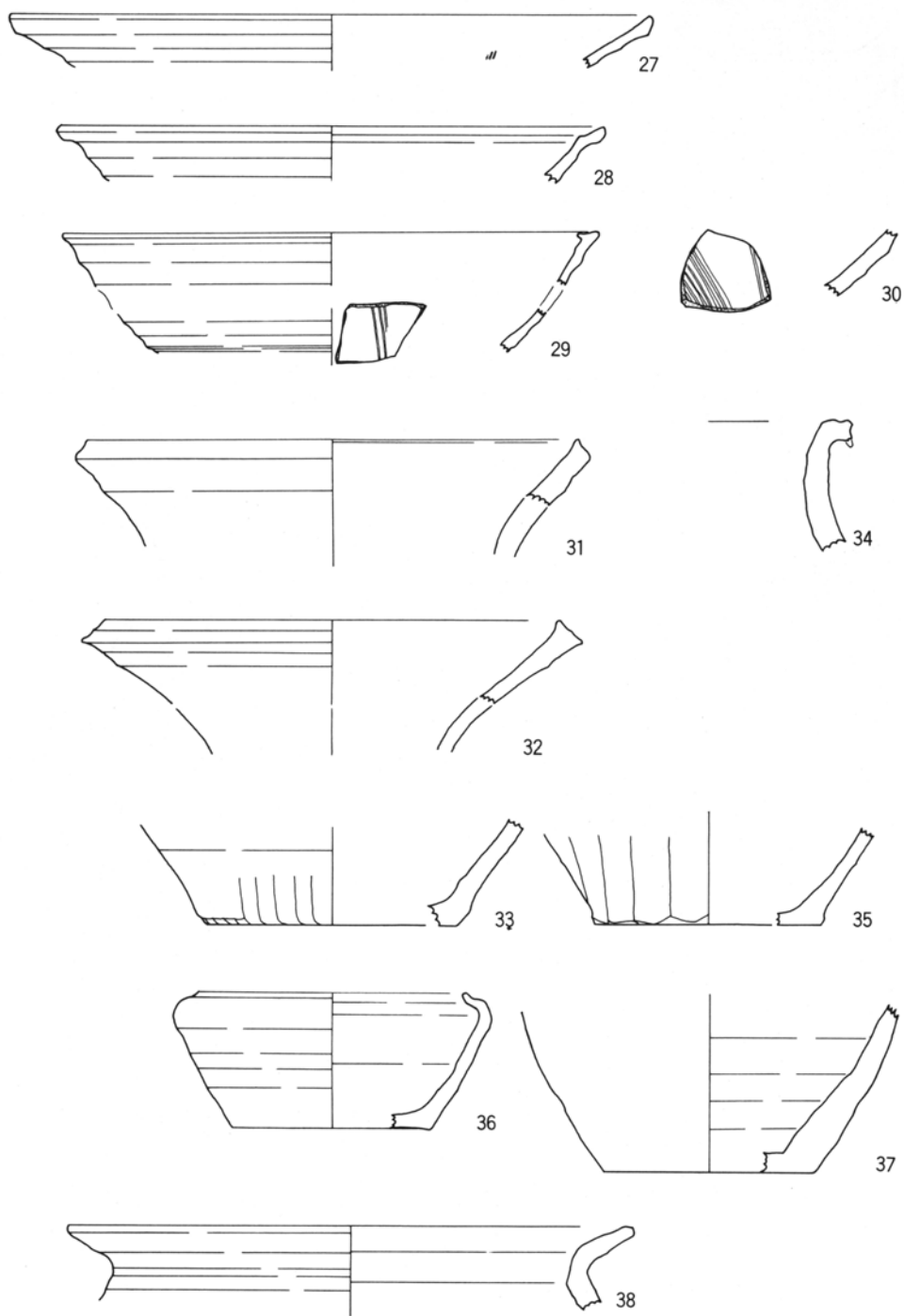
10～30は、施釉陶器。胎土、釉調等から14、15、16について美濃窯産（岐阜県東南部）の可能性があるほかは、瀬戸窯産と考えられるものである。10～12は天目茶碗。おおむね15世紀代に位置づけられる。13は灰釉平碗の底部片。14は長石釉の碗。外面のケズリ調整痕が顕著。15は、鉄釉の小碗。16は長石釉の皿（ヒダ皿）で、内、外面にトチンの痕が残る。16世紀後半代に位置づけられる。17は灰釉の小皿で、底内面に「印花文」がみられる。16世紀代。18は卸皿の底部片。19、20は灰釉香炉の破片。19については小鉢の可能性もある。21は灰釉の水注。把手の付根部位である。13世紀後半。22は灰釉四耳壺の肩部片、4条1単位の櫛描直線紋がめぐる。23は灰釉瓶子の底部片。24～26は灰釉盤で、25、26は縁端部を内面に折返し肥厚させている。24は14世紀代、25、26は15世紀代に位置づけられる。27～30は鉄釉の擂鉢。15世紀～16世紀初頭に位置づけられる。

39～70は、土器である。39～57は皿。39は底外面に回転糸切り痕がみられるものである。体部の形状がわからないので皿Xとしておく。40～44は皿A、45～46は皿D、47～57は皿Fである。皿A・皿Dはいずれも調整はa手法、皿Fはb手法。皿Fについては、器壁が薄手の47～53と厚手の54～57に分けられる。後者の54～57は、後述江戸時代末期の遺構で特徴的に出土するものである。58～64は土鍋Cである。比較的薄で口縁部が大きく外反す



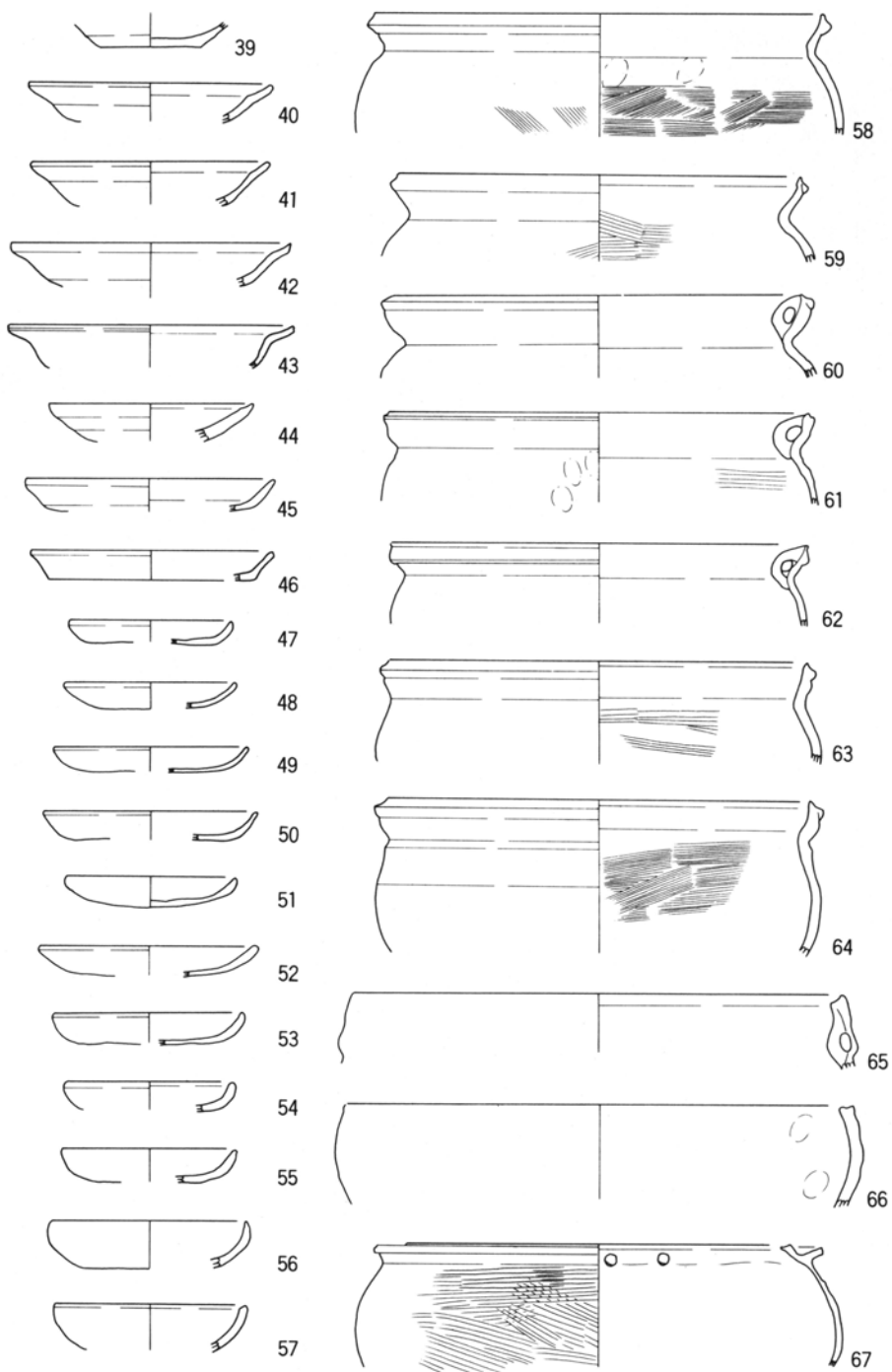
第12図 遺物実測図2 (1:4)

※ 3は欠番



第13図 遺物実測図3 (1:4)

(36は表採 常滑窯産)



第14図 遺物実測図4 (1:4)

る58～62と、比較的厚手で外反の度合の小さい63～64とに大別される。前者の一部（58、59、62）に胴部外面にハケ調整が認められる。65、66は土鍋Dの口縁部。67は土釜A。精緻な胎土で薄手。口縁部に2孔1単位の「吊り手」のためと考えられる穿孔（焼成前）がみられる。68は、土鍋Bないし土釜Bの口縁部片。69、70は土釜Bの胴部片。69は薄手で、鐳より下半にハケ調整痕がみられる。70は、厚手で、鐳は欠落し、接着痕を残している。土器の編年観については、後章で一括する。

SD02（第15図） 71～74および79は灰釉系陶器。71～73は灰釉系陶器碗。74は同皿である。ともに12世紀末～13世紀代に位置づけられる。79は、灰釉系陶器の甕。常滑窯産、時期は特定できない。75～78は施釉陶器。いずれも胎土、釉調から瀬戸窯産と考えられる。75は灰釉皿（稜皿か）。76は14世紀代に位置づけられるものと考えられる。

80～90は土器。85～90は皿で、85、86は皿C、87は皿Bでともに調整はa手法、88～90は皿Fでb手法。89は扁平小皿Eとすべきかも知れない。90は皿Eで調整はa手法。80～82は、土鍋C。81は胴部外面のハケ調整が一部口縁部におよんでいる。82は口縁部から胴部の上位にかけてナデ調整が施されており、胴部外面のハケ調整痕が消されている。80は、外面ナデ調整。83～84は土鍋D。83は、胴部から口縁にかけて幾分内変している。ともに外面はナデ調整。

SD03（第16図） 91は施釉陶器の播鉢、瀬戸窯産。92は灰釉系陶器の鉢で、内面は磨減している。常滑窯産。ともに時期は特定できない。

SD04（第16図） 93は土器で皿A。調整はa手法。

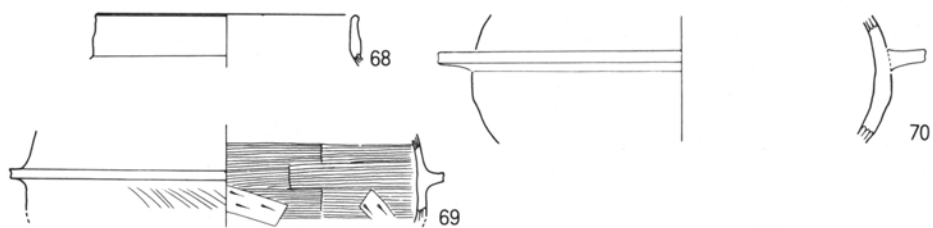
SD05（第16図） 94、95とも土器。94は、土鍋Aの口縁部片。口縁端部を内面に折返している。胎土は精緻。95は皿Aで調整はa手法。

SK1003（第16図） 96は施釉陶器播鉢。瀬戸窯産、時期は特定できない。92～97は土器。97は土鍋Aの口縁部片。精緻な胎土で薄手、98は、吊手として「耳」の部分で火除けのため履いが付いている。おそらくは土鍋B。99は皿Dでb手法。100～103は土鍋Cの口縁部片。

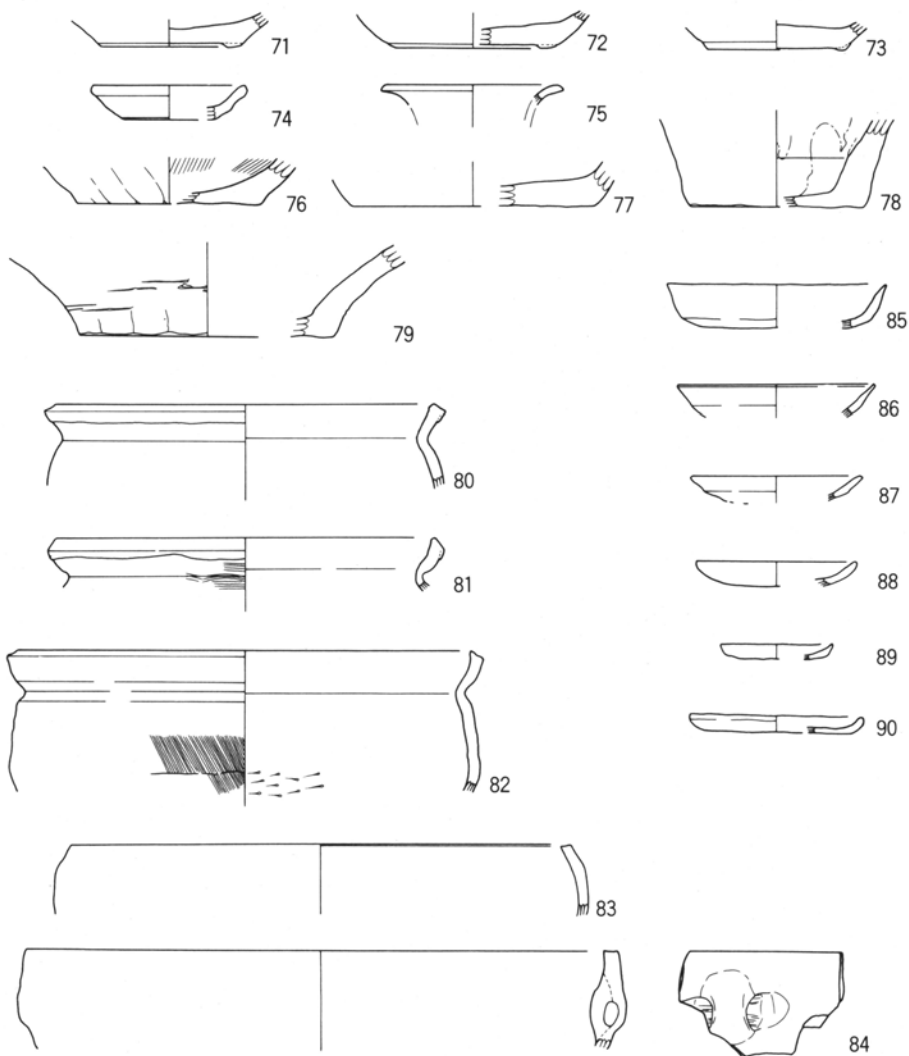
SK1004（第16図） 104は施釉陶器の灰釉皿耳壺。「耳」の内面はほとんど体部に密着しており「吊手」のための機能を有しない。胎土、釉調等より瀬戸窯産と考えられ、15世紀代～16世紀初頭に位置づけられる。105は、灰釉系陶器の皿で、小型かつ扁平で、例をみない形態のものである。産地、年代とも特定できない。106～107は土器。106～109は皿A、ただし109については体部がほとんど直線的で皿Cの形態に近い。いずれも調整はa手法。110～112は皿Fで、いずれも調整はb手法。113は土鍋Cの口縁部片。胴部の上位にハケ調整痕がのこる。

このほかに鉄製品石製品（第30図）もみられる。339は鉄製の刀子で、全長17cm、刀身長

S D01

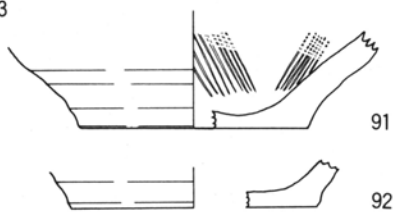


S D02



第15図 遺物実測図5 (1:4)

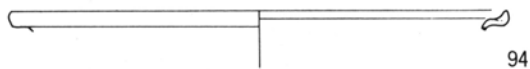
S D03



S D04



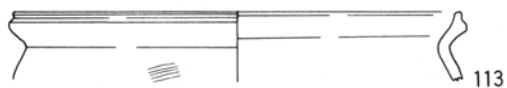
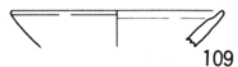
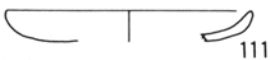
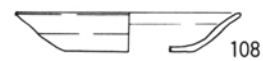
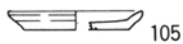
S D05



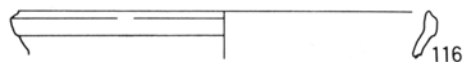
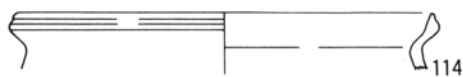
S K1003



S K1004

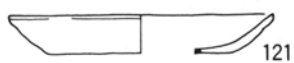
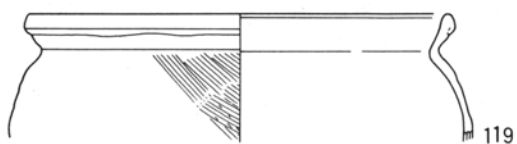
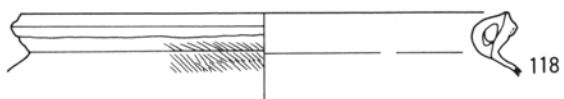


S K1005



第16図 遺物実測図6 (1:4)

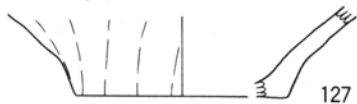
S K 1005



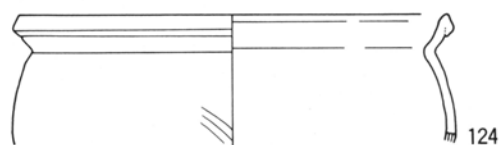
S K 1009



S K 1020



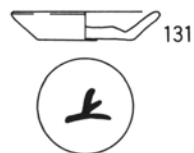
S K 1008



S K 1051



S K 1060



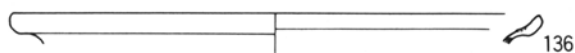
S K 1040



S K 1089



S K 1097



S K 1098



第17図 遺物実測図7 (1:4)

12cmのものである。342は石臼の残欠（復元径30cm）である。花嵐岩製であるが被熱し赤色を呈している。なお、このSK1004の出土ではないが、土坑東側の凹地（SX01）より鉄鏝（?340）が1点出土している。

SK1005（第16・17図） 114～123は土器。114～119は土鍋C。118、119は胴部外面のハケ調整が口縁部との境にまでみられる。120～121は皿Aで調整はa手法。ただし、口縁端のヨコナデの部位は巾狭である。122～123は皿Fで調整はb手法。このほか図示できないが、施釉陶器の灰釉平碗の口縁部片がみられた。瀬戸窯産、時期は特定できない。および灰釉陶器の甕、常滑窯産で、赤羽編年第V期（15世紀後半～16世紀前半）に通有の形態の口縁部片がみられる。

SK1008（第17図） 124は土鍋C。胴部外面の上部はナデ調整が行われ、ハケ調整痕が消されている。125は土鍋A。精緻な胎土で薄手。

SK1009（第17図） 126は土釜Bの胴部片。下胴部にヘラ削り調整がみられる。

SK1020（第17図） 127は灰釉系陶器の甕。胎土、色調等より常滑窯産と考えられる。時期等については特定できない。

SK1040（第17図） 128は土鍋Dの口縁部片。比較的厚手である。129は土鍋Cの口縁部片。

SK1051（第17図） 130は土器の皿F。器高は高く、口縁端部が幾分肥厚している。内面のみナデ調整を加え、外面は不調整のままのb手法。

SK1060（第17図） 131は灰釉系陶器の皿。体部は外反傾向にある。回転糸切り痕がわずかに看取される底外面に「上」の墨書がある。胎土、色調等より渥美窯産と考えられる。13世紀代に位置づけられる。

SK1089（第17図） 132は施釉陶器の灰釉皿（稜皿）。瀬戸窯ないし美濃産と考えられ、16世紀代に位置づけられるものである。

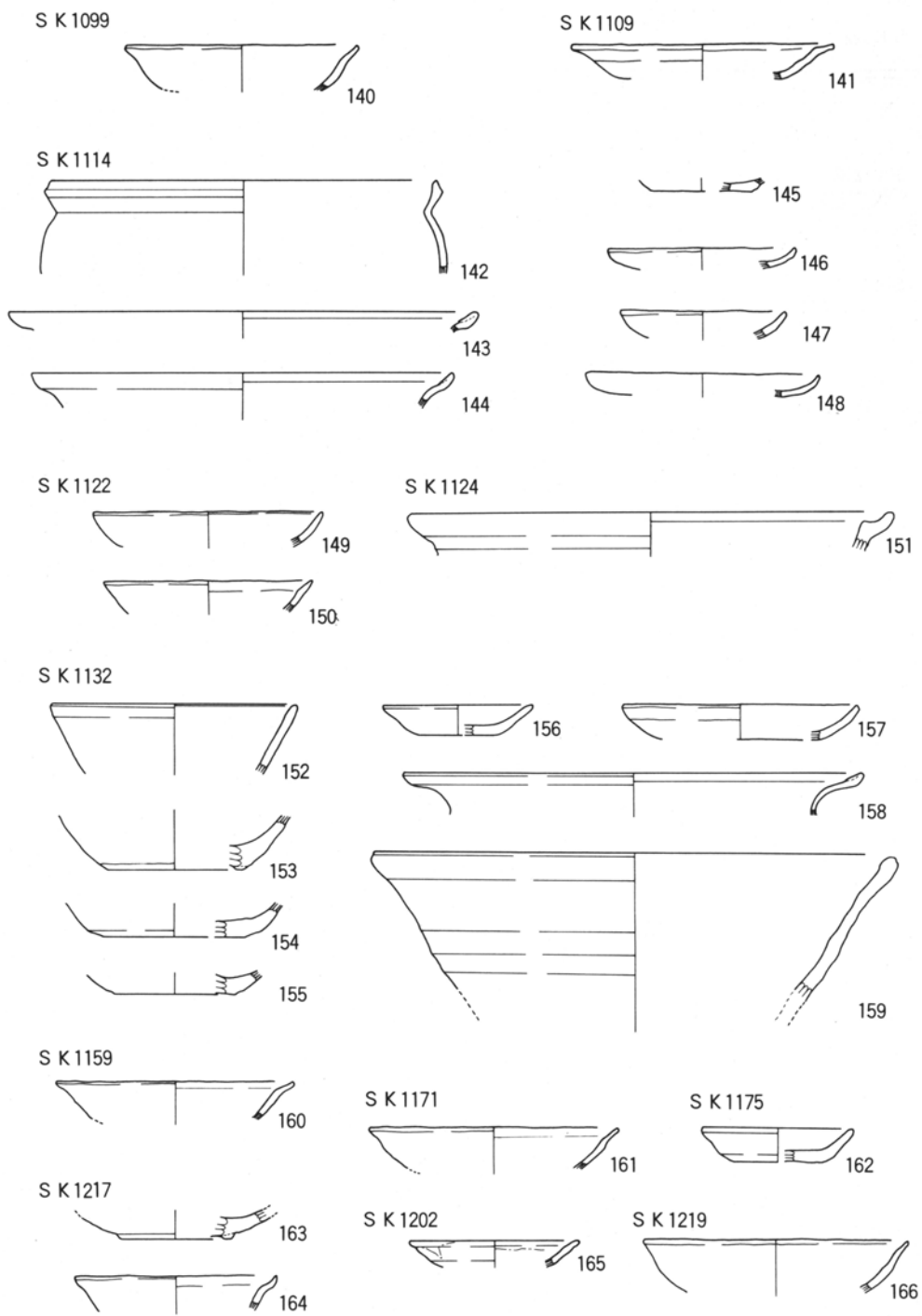
SK1097（第17図） 133～135は灰釉系陶器の碗。渥美窯産で、13世紀代に位置づけられる。136は、土鍋Aの口縁部片。

SK1098（第17図） 137、138は土鍋A。比較的厚手である。139は灰釉系陶器の碗。SK1097出土のものに酷似する。

SK1099（第18図） 140は土器の皿Aで調整はa手法。深手である。

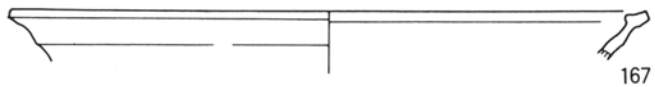
SK1109（第18図） 141は土器の皿Aで調整はa手法。

SK1114（第18図） 142～148は土器。142は土鍋Cで、胴部外面はナデ調整。143、144は土鍋Aの口縁部片。145は、底外面に回転糸切り痕のみられる皿X。147は皿A。146、148は皿Fで、調整はb手法。341（第30図）は、鉄釘（?）の残欠。



第18図 遺物実測図8 (1:4)

S K 1229



167

S K 1232



168

S K 1240



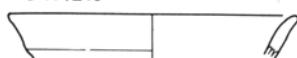
169

S K 1259



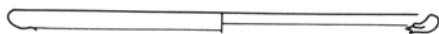
170

S K 1249



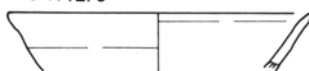
171

S K 1277

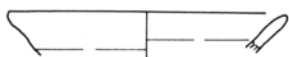


172

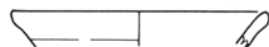
S K 1278



174

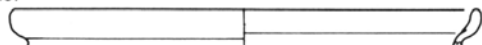


173



175

S K 1287



176

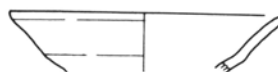
S K 1349



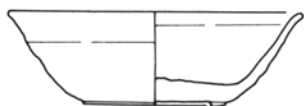
177



178

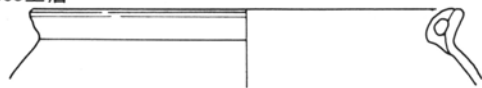


179



180

S K 1368上層

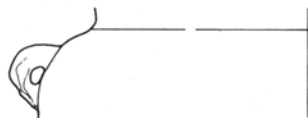


181



182

S K 1439



183

第19図 遺物実測図9 (1:4)

SK1122 (第18図) 149、150は土器で、149は皿F、150は皿C。151は灰釉系陶器の鉢。口縁部が外方に突出し、端面に凹みをもつ。胎土、色調等から瀬戸窯と考えられる。14世紀代に位置づけられる。

SK1132 (第18図) 152～151および154は灰釉系陶器。152～150は椀で、154、155は高台が欠落している。156は皿。159は鉢で、口縁部が幾分丸味をもって肥厚している。これらは、いずれも13世紀代位置づけられるもので、産地は、159が若干異なる胎土の感を有するほかは、渥美窯産と考えられる。157、158は土器、159は皿Fで、調整手法はa手法。胎土は精良で緻密。158は土鍋Aの口縁部片。

SK1159 (第18図) 160は土器の皿Aで調整はa手法。

SK1171 (第18図) 161は土器の皿Aで調整はa手法。

SK1175 (第18図) 162は灰釉系陶器の皿。胎土、色調からみて、渥美窯産で、13世紀代に位置づけられる。

SK1217 (第18図) 163は灰釉系陶器の椀。渥美窯産と考えられ、12世紀末～13世紀前半に位置づけられる。164は土器の皿A。

SK1202 (第18図) 165は施釉陶器の灰釉小皿。瀬戸窯ないし美濃窯産と考えられるもので、時期は特定できない。

SK1219 (第18図) 166は土器の皿A。

SK1229 (第19図) 167は施釉陶器の鉄釉播鉢。瀬戸窯産と考えられるが、時期については特定できない。(15世紀代?)。なお、このSK1229からは図示できないが、ほかに灰釉系陶器椀(渥美窯、13世紀代)が出土している。

SK1232 (第19図) 168は土鍋A。精緻な胎土で薄手。

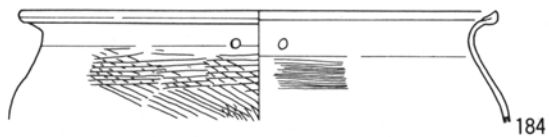
SK1240 (第19図) 169は土鍋A。精緻な胎土で薄手。口縁部は、受け口状の内弯傾向を呈す。

SK1249 (第19図) 171は灰釉系陶器の椀。渥美窯産と考えられる。時期は特定できないが、形態的には13世紀代のものと類似する。

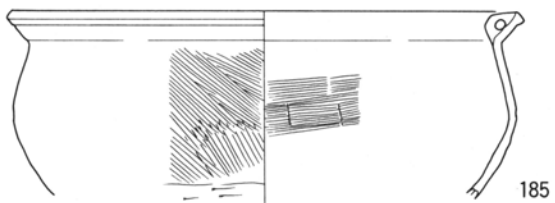
SK1259 (第19図) 170は施釉陶器の灰釉盤で、瀬戸窯産、15世紀末葉に位置づけられる。

SK1263 (第20図) 184～187・191は土器。184は土鍋A。185～187は土鍋Cで、185に比べ186・187は器壁が薄く、精緻である184は土鍋A、の代表例、同じく185は土鍋Cの代表例である(後述)。191は皿で、調整は内、外面とも指圧痕が顕著で、ナデ調整がみられないc手法。188・190は施釉陶器。188は鉄釉の播鉢。190はいわゆる鉛釉小皿。ともに15世紀代末葉～16世紀代前半に位置づけられる。189は灰釉系陶器の椀であるが、混入の可

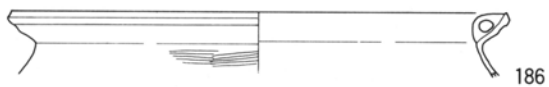
S K 1263



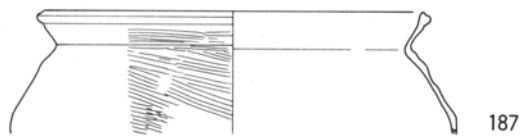
184



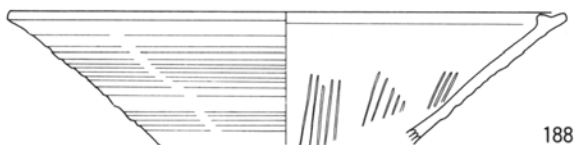
185



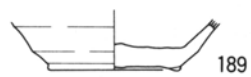
186



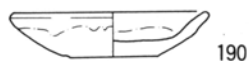
187



188



189



190

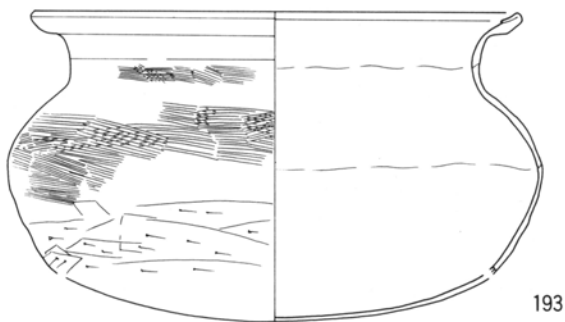


191



192

S K 1368下層



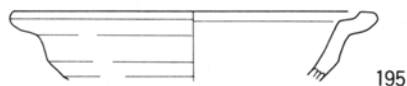
193

S K 2105



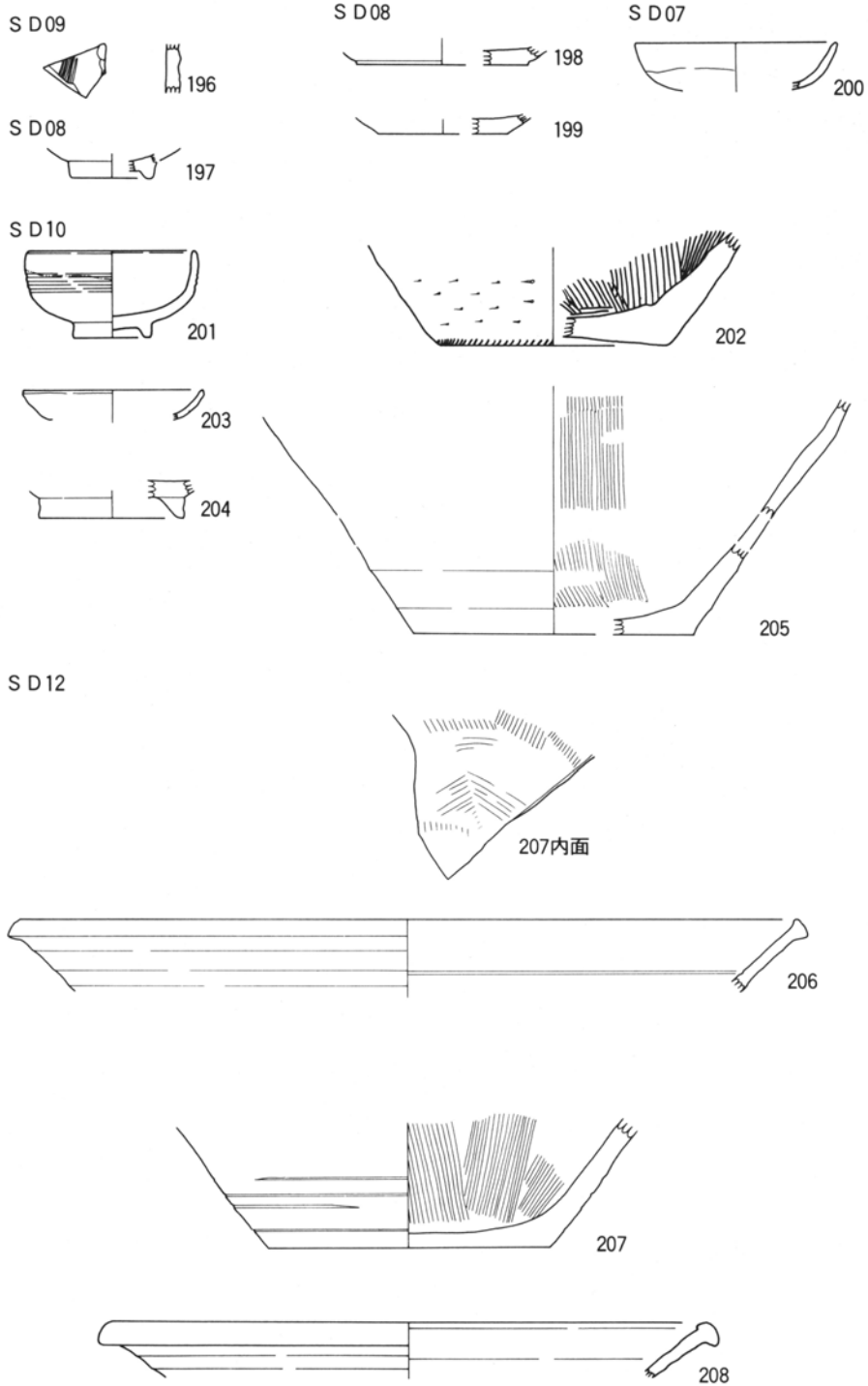
194

S K 2137



195

第20図 遺物実測図10 (1:4)



第21図 遺物実測図11 (1:4)

能性がある。192は土器と同じ質の「玉」。

SK1277 (第19図) 172は、土鍋Aの口縁部片。173は灰釉系陶器の椀。

SK1278 (第19図) 174、175は灰釉系陶器の椀。渥美窯産と考えられるもので、形態等は、SK349出土のものに類似する。

SK1287 (第19図) 176は土鍋Aの口縁部片。

SK1349 (第19図) 179～180は灰釉系陶器の椀。180は口径に対し、底径が巾広、体部は直線的な立ち上がりで、口縁部が幾分外反する。高台は、粗雑な貼付高台で、端面に靱痕がつく。底外面には回転系切り痕がのこる。これらは、渥美窯産と考えられ、13世紀代に位置づけられるものである。

SK1368 (第19・20図) この土坑の埋土は、上・下層に分けられる(別の土坑の可能性が大)。上層から出土した181は土鍋Cであるが、口縁部の外反が弱く、直立ぎみである。182は器。皿Fであるが、口縁部が肥厚している。調整はb手法。下層から出土した193は、土鍋Aで、胴部はハケ調整の後、下半にはヘラ削り調整、上部はナデ調整－口頸部のヨコナデの際におよんだ可能性大－が施されている。直立したのち大きく外反し口縁端部を折返す口縁部は、ヨコナデ調整である。内面については、下胴部にケズリ調整が部分的に認められるほかはナデ調整である。

SK2105 (第20図) 194は灰釉系陶器の椀。渥美窯産で、13世紀代に位置づけられる。

SK2137 (第20図) 195は施釉陶器の灰釉折縁盤(深皿)。瀬戸窯産と考えられ、14世紀代に位置づけられるものである。

SD07 (第21図) 200は土器の皿Cで、調整はa手法。194は底外面に回転系切り痕がのこる皿X。

SD08 (第21図) 198、199は土器底外面に回転系切り痕ののこる皿X。197はSD08とSD09との合流部で出土した施釉陶器、灰釉椀の底部片で時期は特定できない。

SD09 (第21図) 196は施釉陶器の播鉢。瀬戸窯産と考えられるが、時期については特定できない。

(3) 江戸時代末期の出土遺物

ここで江戸時代末期とする遺物は、基本的に19世紀代に位置づけられる土器。陶磁器類およびこれらと伴出した金属製品、ガラス製品を対象とする。

記述の煩雑をさけるため、土器・陶磁器の種類と器種について若干の整理を行っておく。

種類 種類については、土器、陶器、磁器、瓦質土器、および「陶胎染付」とか「半陶半磁器」とかよばれる一群のものが存す。この一群についてあまり適切な名称とはいえないがここ

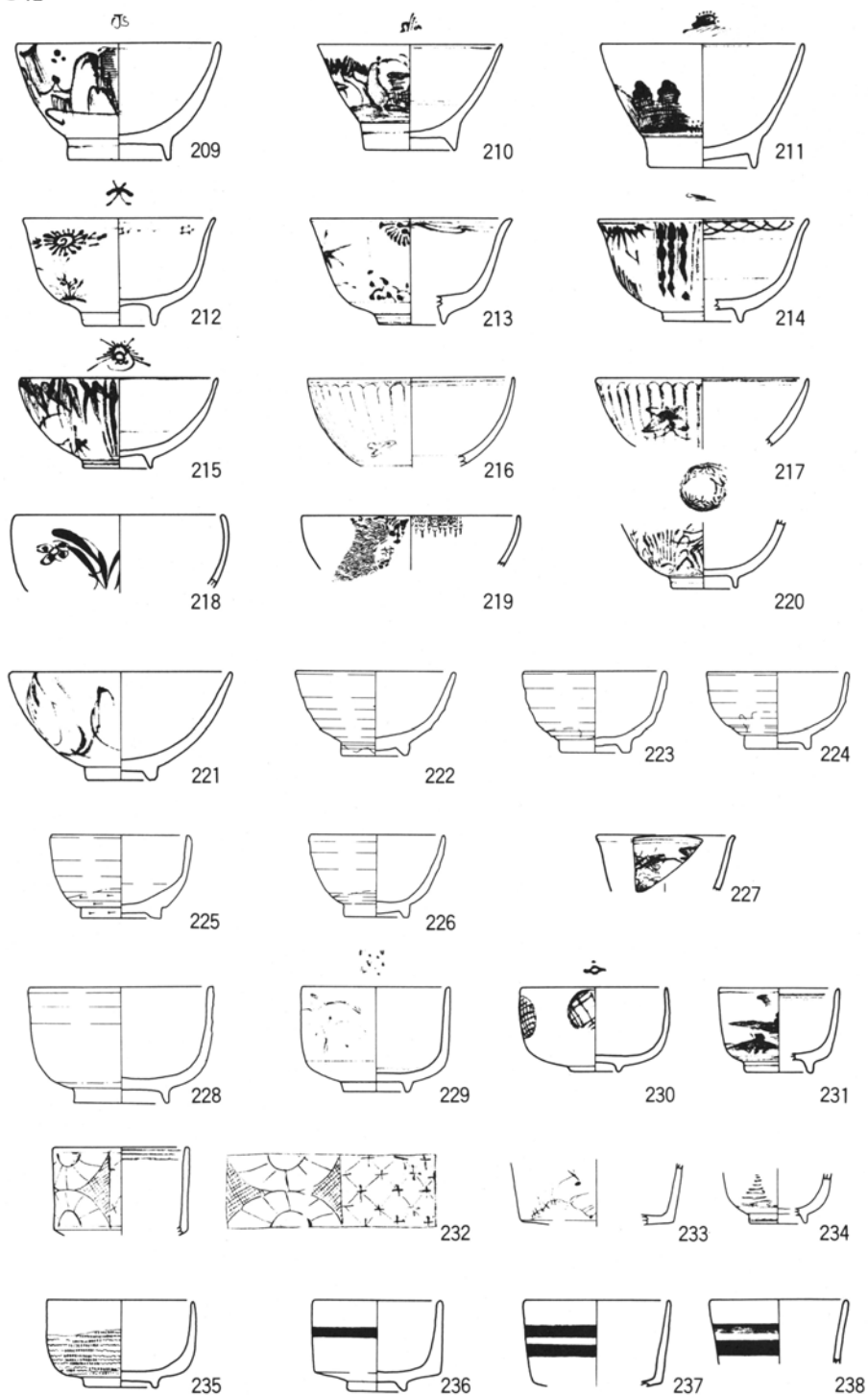
では「半陶半磁器」の呼称を用いることとする。また陶器については、上述の「中世陶器」と異なり、無釉陶器と施釉陶器を含める。

器種 土器についての器種の分類は、後章（V－1）に示し、陶器、磁器、「半陶半磁器」についても基本的に第31図のように分類する。

SD10（第21図） 201は、陶器の碗F。「腰鏝」とよばれる灰釉と鉄釉の掛け分けが特徴的である。202、205は鉄釉の播鉢。202の外表面は、横位のケズリ調整がみられる。203は、土器の皿Fで、調整はb手法。

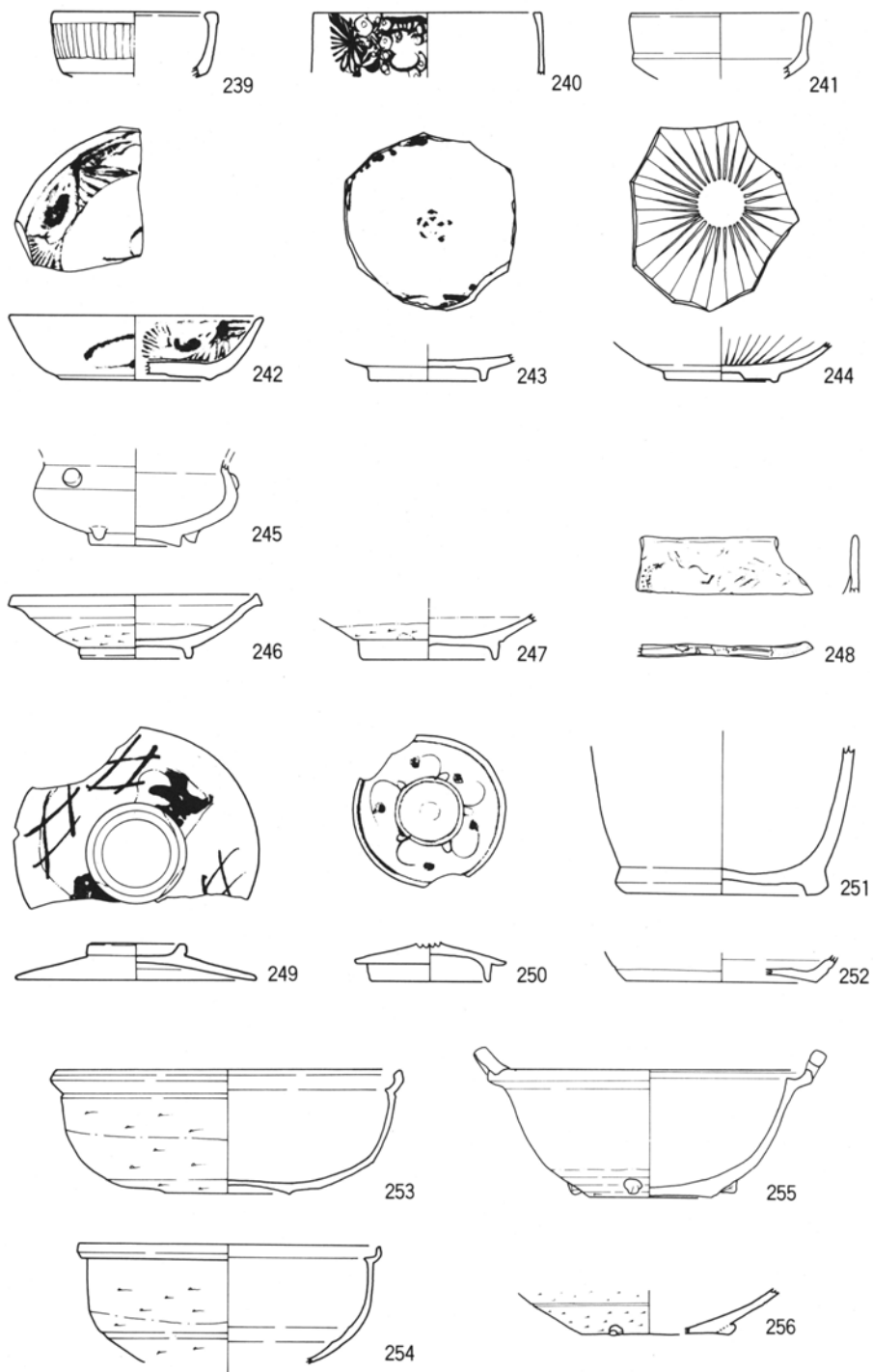
SD12（第21～26図） 209～210は磁器碗A。211は「半陶半磁器」の碗A。染付紋様は、いずれも筆絵によるものである。212～214は磁器碗Bで、染付紋様は、いずれも筆絵による。212～213は削り高台。215～220は磁器の碗D。215～218、220の染付紋様は筆絵によるもので、219は摺絵によるもの。220は焼成不良のためか釉調が安定していない。221は陶器の碗B、体部外面の染付紋様は筆絵によるもの。222～226は陶器の碗C。体部のケズリ調整痕が顕著で内外に緑褐色の灰釉が施される。227は磁器の碗E。外面の染付紋様は筆絵によるもので、きわめて精緻に描かれている。228は陶器の碗Hで染付紋様はみられない。229は磁器碗L。230は磁器碗K。231は磁器碗J。232、233は磁器碗I。234は磁器碗J。これら229～234の染付紋様は筆絵によるもの。235～241は陶器の碗。235は陶器碗E。体部から高台にかけて薄い鉄釉（鉛釉）が、口縁部から内面にかけて鉄釉が施されている。236～238は、陶器碗Dで、体部外面の中位に1～2条の鉄釉による横線がめぐる。239は磁器碗Mで、口縁端は内面に肥厚し、体部外面にタテ位の刻みによる直線紋がめぐる。香炉として用いられた可能性がある。240は口縁部が内側に肥厚する筒形のもので、体部外面に赤、青、白、茶（黒）色を用いた色絵が描かれる。色絵の上に透明釉が施されあるいは、磁器を意図したものか。241は陶器碗I。腰部に段を有する形態のもので内外面に灰釉が施される。242は「半陶半磁器」の皿Aで、陶器の胎土に、筆絵による染付紋様を描き、透明釉をかけたもの。底い削り出し高台が付く。深手で鉢とすべきか。243は「半陶磁器」の皿B。貼付高台。244は、磁器の皿C。白色胎土にごく薄い透明釉（白色釉か）が施されている。高台は削り出しによるいわゆる蛇目高台、内面を刻線による「花柄(?)」で飾る。245は陶器の香炉。底部に「三足」が存すが、その接地は底部外面により上位にあり、その機能をはたしていない。肩上部に円形の浮文が三足と対応する位置に三箇所みられる。体部外面および頸内部にあざやかな「緑色」釉が施される。246～247は陶器の皿A。248は、陶器の「ビンダライ」で外面の「白濁色」釉の上に鉄釉で紋様を描いている。249は陶器の蓋B。頂部より縁部にかけて直線的な曲線を描き端部は丸くおさめる。頂部に輪高台状の鈕がつく。外表面に色絵（赤、黄、茶色）が描かれる。250は陶器蓋A。縁部内面

SD12



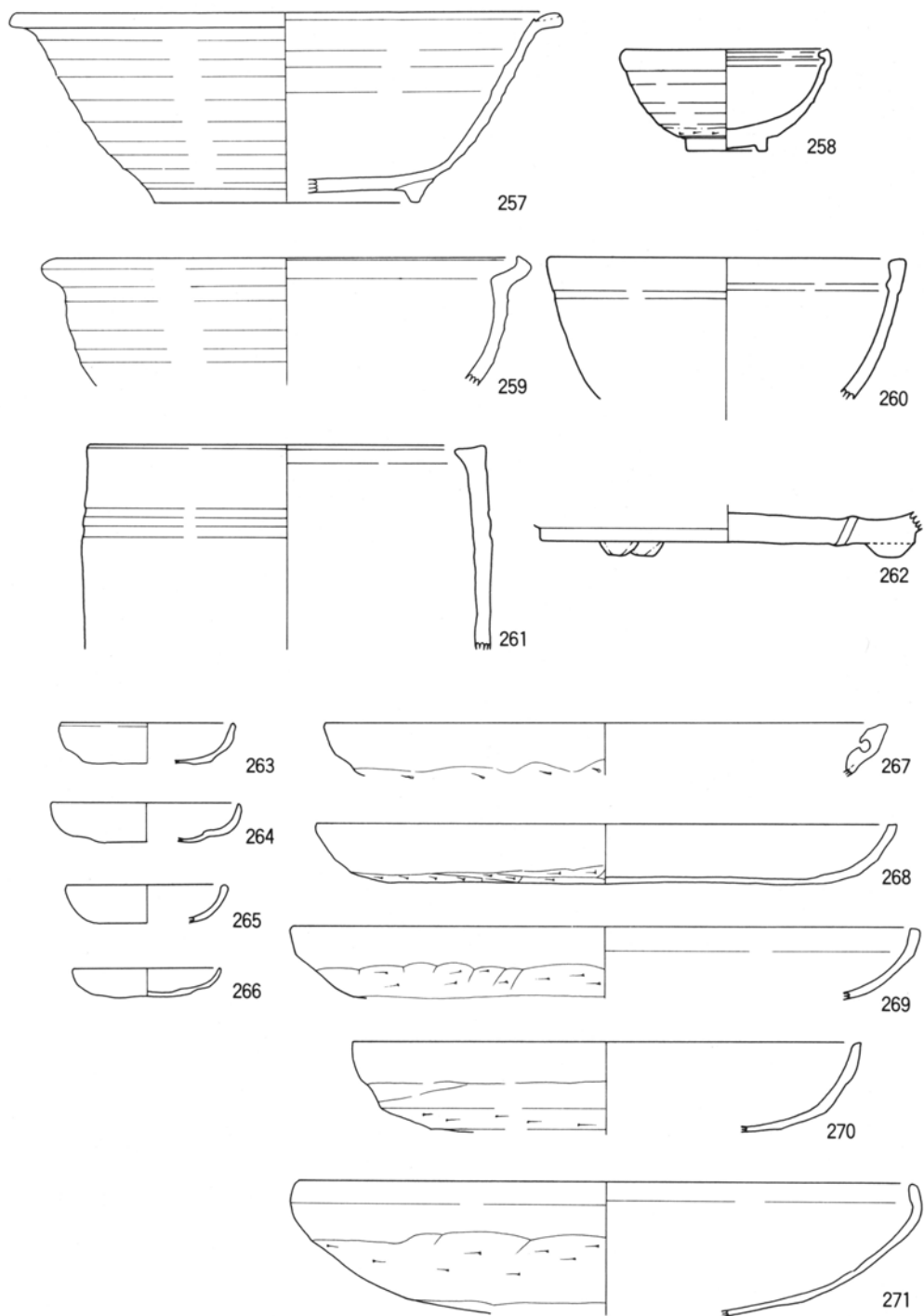
第22図 遺物実測図12 (1:4)

S D12



第23図 遺物実測図13 (1:4)

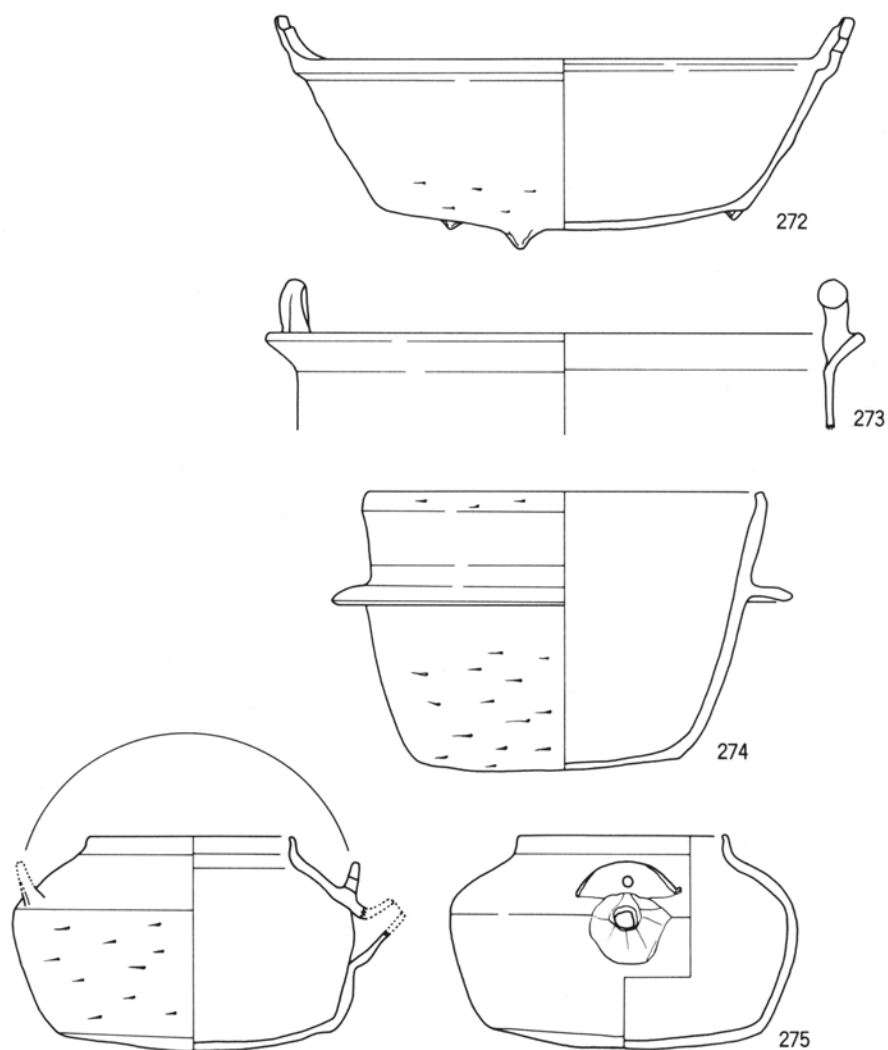
S D12



第24図 遺物実測図14 (1:4)

にかえりつく。外表面に色絵（青、赤色）が描かれる。251、252は陶器の壺類の底部片で、251は外側に張り出す付高台のもので外面に灰釉が施されている。252は外面に鉄釉が施されるもの。255は、陶器の鍋Aで口縁に吊り手がつく。内外面とも鉄釉が施されている。底部近くに「三足」がみられるがその機能をはたしていない。253～254は、陶器の鍋C。陶器としては、胎土は危弱、内外面に薄い「柿色」の釉が施されるもので287とともに、あきらかにほかの陶器とは様相を異にする。287の底内面に「碧海東端朋珍焼□□亭」と記された

S D12

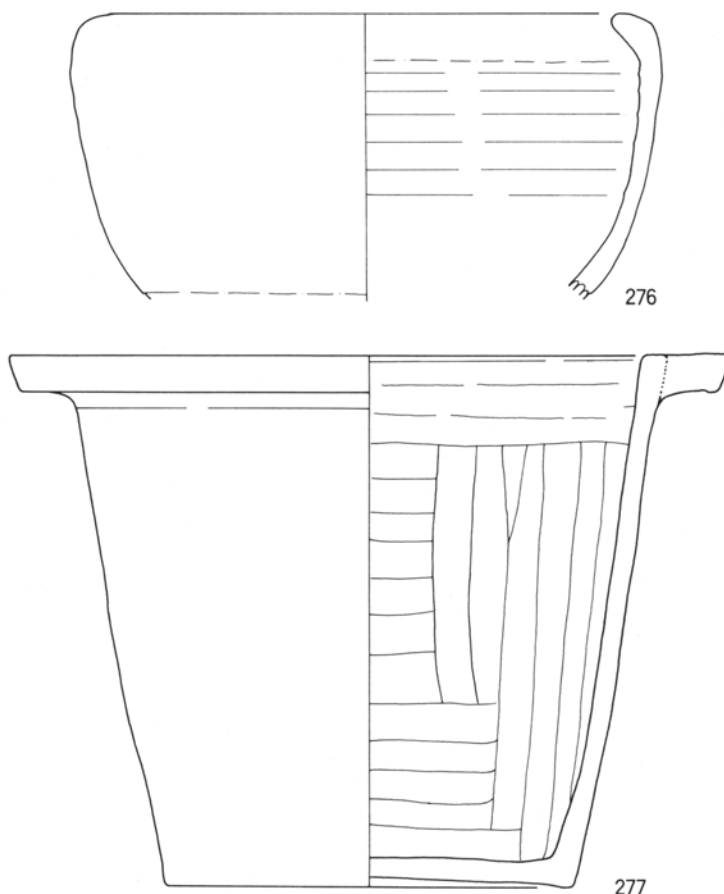


第25図 遺物実測図15（1：4）

刻印がみられることから、旧碧海郡東端村、現在の安城市東端町の「^{ボウチン}朋珍焼」と考えられる。251は、胎土の状況については248～249と類似するが釉調を異にする陶器の鍋。上半を欠くため器形を特定し難い。257は灰釉の陶器鉢D。258は陶器鉢A。口縁端の内側に突帯がめぐる。体部外面のケズリ調整痕が顕著。内外に灰釉が施される。259は、陶器鉢C。鉄釉が施される。260は、陶器の鉢B。口縁部内面に突帯がめぐり、外面に一条の沈線がめぐる。内外面に灰釉。276は鉄釉の火鉢。262は、個体は異なるが他例から陶器火鉢の底部片と考えられるもので底外面に三足がつき、現存部で1個所穿孔されている。

206～208は、陶器の播鉢。ともに口縁端部が丸く肥厚している。277は、無釉陶器鉢Bで、焼成は悪い。内面にナデ痕が顕著にみられる。口縁端部外面に突帯がめぐる。261は、陶器の甕で、内外面に鉄釉が施される。口縁部の内面が幾分突出し、胴部外面に2条の沈

SD12



第26図 遺物実測図16 (1:4)

線がめぐる。263～266は土器の皿F。調整手法はb手法。器壁が厚い。267～271は土鍋E。267と268はE₁。底が平らで、器高が低く皿形の形態。底外面をヘラ削り調整し、体部および内面はナデ調整である。267は、吊り手としての「耳」が存している。269～271はE₂。底部が丸味をもち、器高が高く深手。胴部はナデ調整後、下胴部をヘラ削り調整を施している。内面はナデ調整 270は、いわゆるハケ目が部分的で、口縁部はヨコナデ調整を施している。口縁部を丸く仕上げるもの(271)と面をもたせるもの(269、270)の2通りがみられる。吊り手のための「耳」は遺存しない。272～275は、瓦質土器。272は鍋で、口縁部の造作は、陶器の体類と同じである。吊り手のための「耳」は口縁部に設けられている。また底部に「三足」がみられる。273も鍋で外反する口縁部に吊り手のための「耳」が設けられている。274は、いわゆる羽釜形態のもの。口縁部外面および下胴部にヘラケズリ調整がみられる。275は、いわゆる「土瓶」。肩部以下をヘラケズリ調整している。吊り手は鉄製で、肩部に付着している錆の痕跡から「耳」との装飾部分に銅線が用いられていたことがうかがわれる。

SD14 (第27図) 278～284は磁器で、いずれも染付文様は「筆絵」によっている。278は、磁器碗A。279は磁器碗C。280は磁器碗Dの底部片。281は磁器碗F。282は磁器碗H。283は、磁器碗Gで、2度焼きしており、2度目に染付文様を描いているが、透明釉をかけていない。284は、上半を欠くが、壺乃至鉢と考えられるもの。285～289および291、294は、施釉の陶器。285は、陶器碗D。286は、陶器碗Gで、内外面に鉄釉を施した後に「緑褐色」の釉をかけている。287は陶器碗K。上述のように、253、254と同じ胎土、釉調のもので、内底面に「碧海東端 朋珍焼 □□亭」と記した刻印がみられる。288は、陶器の壺で、鉄釉(茶色)の上に白濁色の釉が掛けてある。289は、陶器の甕の底部。内外面に鉄釉が施されている。上半を欠くが、おそらくは261に類似した形態のものであろう。291は、白濁色の釉がかかる陶器碗L。294は、陶器の擂鉢の口縁部片。鉄釉がかかる。290、293は無釉の陶器。290は鉢A。292は甕B。ともに常滑窯産と考えられる。292、295～298は土器。292は土器の皿Fで調整手法はb手法。295～298は土鍋Eである。295、296はE₂、深手で底部は丸味をもつ。297、298はE₁、浅く平坦な底部である。ともに内外をナデ調整(ただし外面に指圧痕が顕著)し外面については、下胴部～底外面にかけてナデ調整後にヘラ削りを施している。また口縁部をヨコナデ調整し、端部を丸く仕上げている。なお295、296の「耳」は遺存しないがこれはSD12においても深手のものに「耳」が遺存しなかったことを加味するならば、深手のものに「耳」が存しなかった可能性が生じてくる。この点については後述する。297、298の耳についてみると耳の下端が底面近く(297)から底面(298)におよんでいる。このほか、焼物としては図示し得なかったが、瓦片がま

まみられる。いずれもいわゆる「棧瓦葺」のものである。ガラス製品、金属製品もみられる。343はガラスの小瓶である。青紺色を呈すガラスの胎に気泡がまばらにふくまれる。底外面に「封」の字が浮彫されている。金属製品としては図示し得なかったが、青銅製の「髪飾」が1点みられる。これは長さ10cm幅1.0cmほどの細長の枝状のもので、下半を二又に分ちてその先端を尖らせるといった簡素なものである。

SD13 (第28図) 298は、陶器の碗Hの口縁部片。299～302は土器の皿Fで調整はb手法。

SD15 (第28図) 313は、土器の皿Fで調整はb手法。314は土釜Bの「耳」。

SD21 (第28図) 306は磁器碗Iで、染付紋様は「筆絵」による。307は陶器碗Dで胴部の中位に一条の線(鉄釉)がめぐる。308は、陶器卸皿で、四角形の体部に把手のつく形態のものである。309は陶器蓋Aで、外表面にコバルト色の釉。303は陶器播鉢の口縁部片。鉄釉が施されている。312は無釉の陶器甕Aで、その特徴的な胎土、色調から常滑窯産と考えられる。304は土器の皿Fで調整はb手法。305、310、311は土鍋E。305は深手のものでE₂、比較的厚手。310、311は底部が平坦な浅い皿形のものでE₁、外面はナデ調整の後底外面をヘラケズリ調整しており、内面はナデ調整(口縁部近くに一部ハケ目が看取される)で口縁部をヨコナデ調整。

SD22 (第29図) 315は、陶器碗Gで、内外面に鉄釉を施す。体部外面のケズリ調整痕が顕著。316は陶器碗Aで、内外面に鉄釉を施す。口縁端部が丸くくびれる。317は陶器皿Bで、口縁部に灰釉を施す。318は陶器壺類の口縁部と考えられるもので器種を特定できない。319は陶器蓋Cで、薄い鉄釉が施されている。320は、陶器のビンダライで灰釉が施されている。321は、陶器碗J。322、323は土器の皿Fで、調整はb手法。

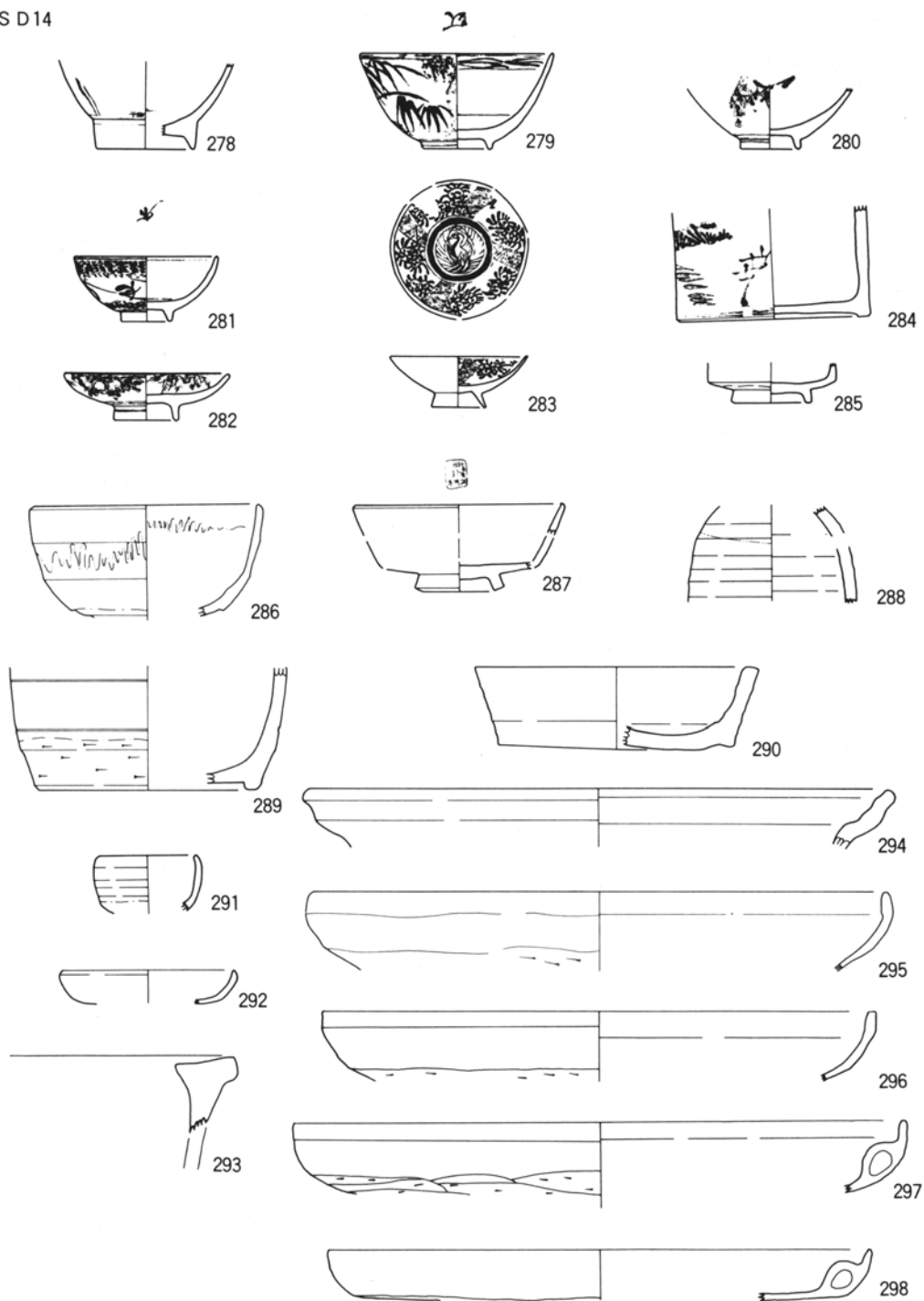
SK3011 (第29図) 324は土器の皿Fで調整はb手法。325は陶器播鉢の口縁部片。

SK3012 (第29図) 328～330は完形の土器の皿Dで、口径、器高ともほぼ同一。

SK3017 (第29図) 326は鉄釉四耳壺の肩部、時期を特定できないが、16世紀代までさかのぼる可能性もある。

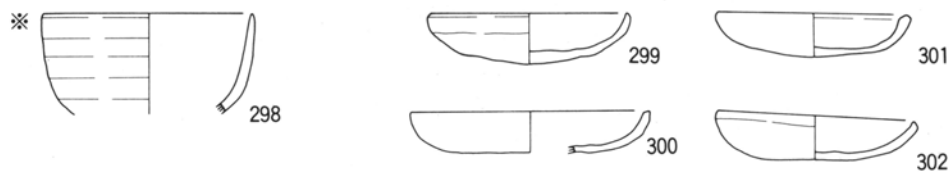
SK3020 (第29図) 327は、完形の土器の皿Fで、調整はb手法。また図示し得ないが「寛永通宝」が7枚出土している。これらは付着しており、個々の観察はなし得ないが、かろうじて分離し得たものよりすれば、所謂「古寛永」・「新寛永」をふくんでいる。これにより、すくなくともこと遺構の上限を「新寛永」の鑄造がはじまった17世紀末におくことが出来る。が下限年次については特定し得ない。ここでは取りあえず江戸時代末期の項にふくめたが、18世紀代にさかのぼる可能性もある。

S D 14

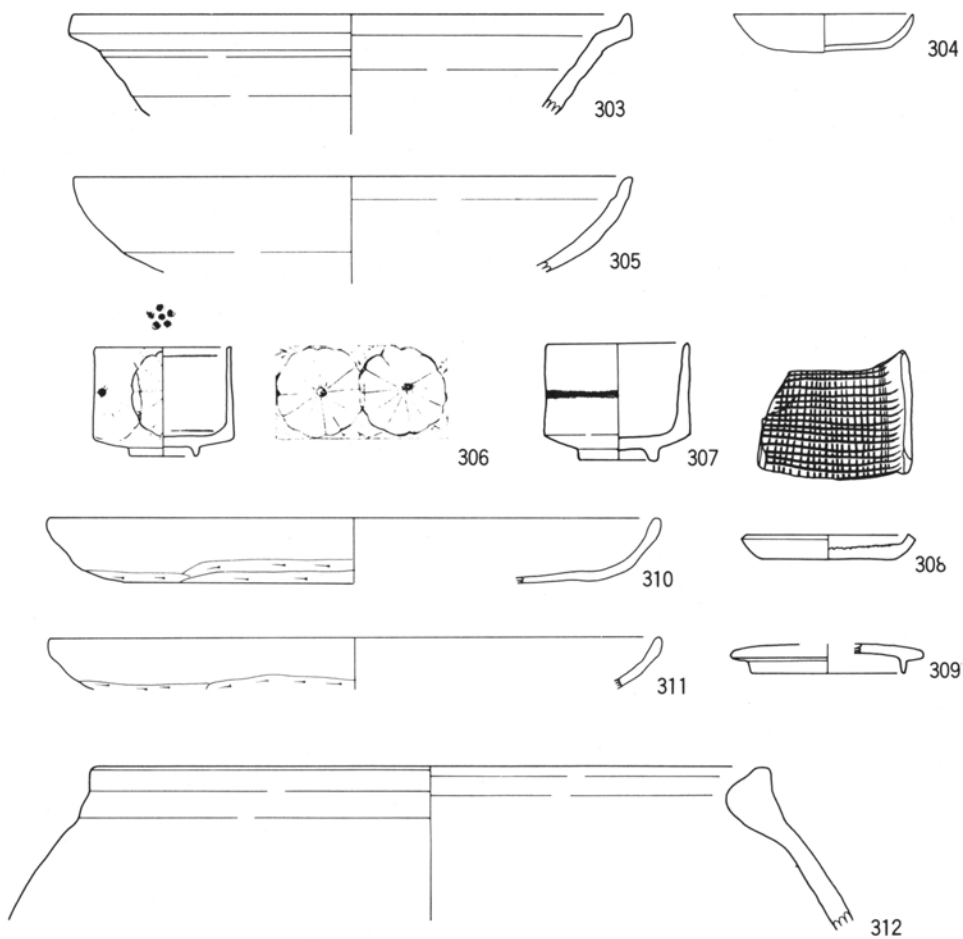


第27図 遺物実測図17 (1 : 4)

S D13



S D21



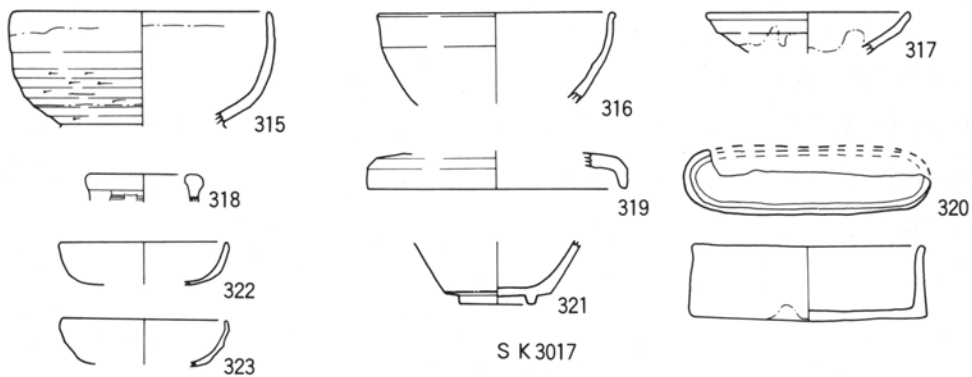
S D15



第28図 遺物実測図18 (1 : 4)

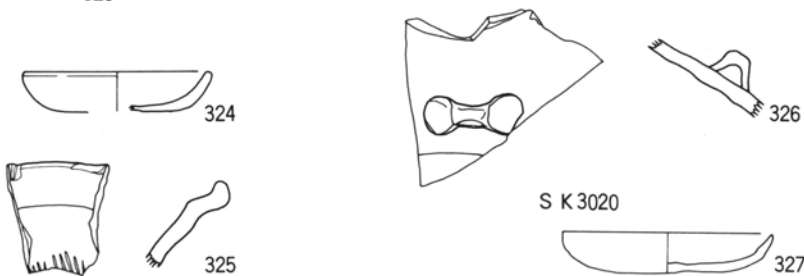
※ 298番が重複する。遺構の違いで区別されたい。

S D22



S K 3017

S K 3011

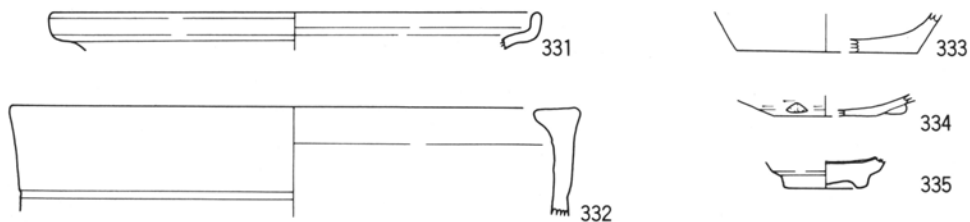


S K 3020

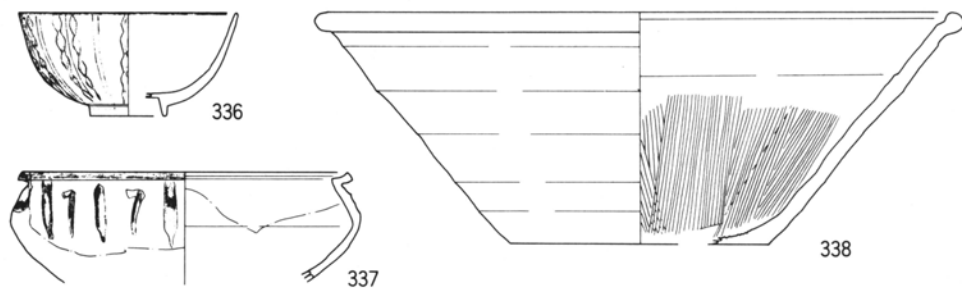
S K 3012



S K 3167



S K 2136



第29図 遺物実測図19 (1 : 4)

SK3167 (第29図) 331は陶器播鉢あるいは鍋類の口縁部片。332は陶器甕で口縁部内端が突出している。内外面に鉄釉。333は陶器の鉢類の底部か。内外面に鉄釉。334は陶器の底部片。335は陶器碗Aの底部片と考えられるもので内面に鉄釉。

SK2136 (第29図) 336は磁器碗Dで青(藍)、緑色を用い「筆絵」で紋様を描く。337は陶器鍋Bで、体部上半に「白色」の釉を下地に「茶・緑色」の釉で紋様を描いている。338は陶器の播鉢で、内外面に薄い鉄釉を施している。底部が極めて薄い。

〔註〕

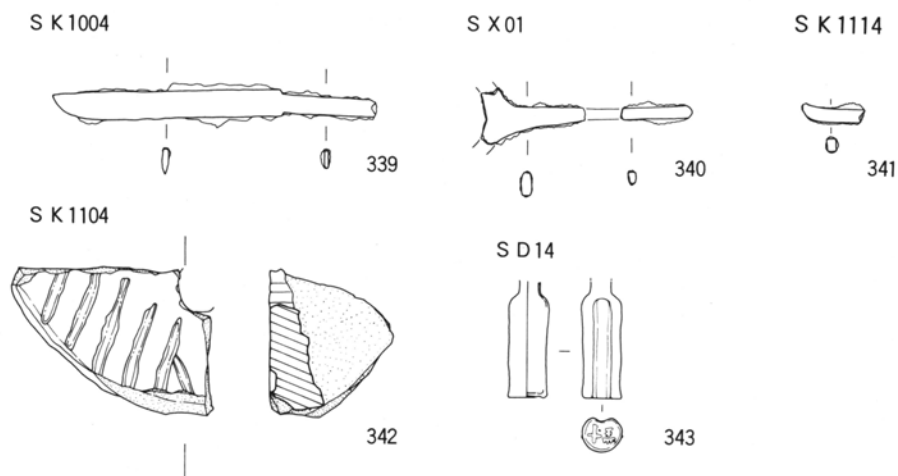
(1) 出土遺物の編年観は、おおむね下記の文献に依拠する。

檜崎彰一 1983 「猿投窯の編年について」(『愛知県古窯跡群分布調査報告(Ⅲ)』愛知県教育委員会)

檜崎彰一ほか 1977 『世界陶磁全集 3 日本中世』小学館

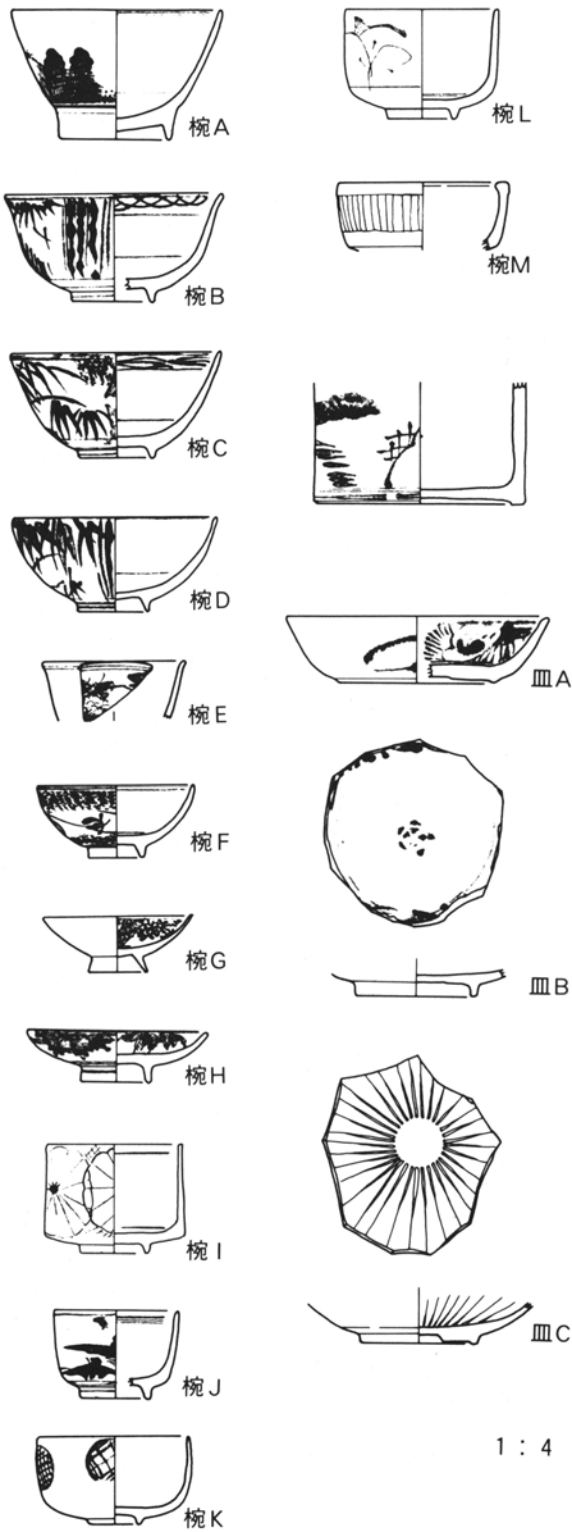
藤沢良祐 1987 「本業焼の研究(1)」(『瀬戸市歴史民俗資料館 研究紀要Ⅵ』同資料館)

(2) 本書で「渥美窯産」とするものは所謂「湖西古窯址群」産の可能性もある。

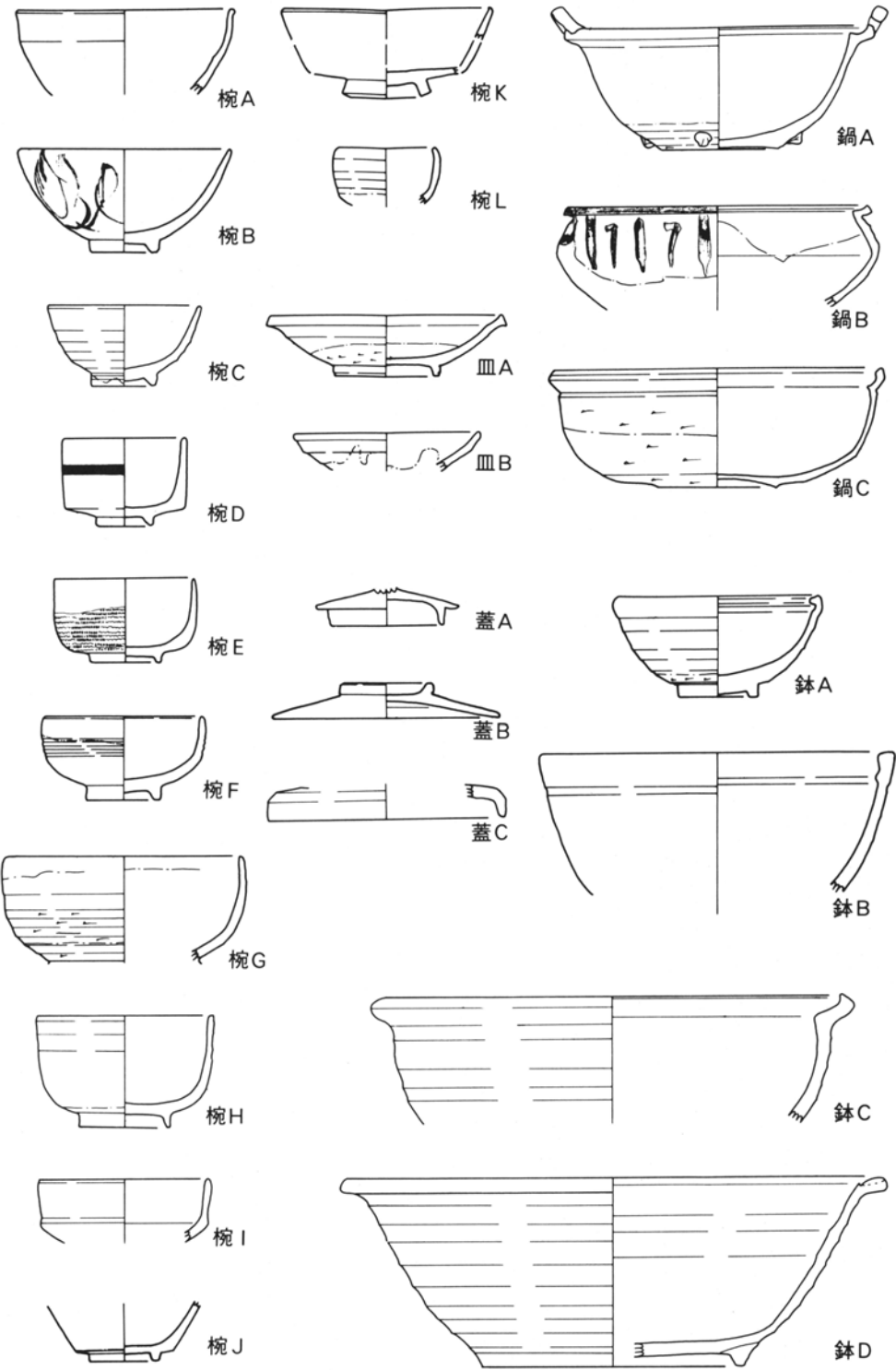


第30図 遺物実測図20 (1:4)

磁器 (あるいは「半陶半磁器」) の分類



陶器の分類



第31図 磁器・陶器類の分類

IV. 自然科学的分析

「中世土器」の胎土分析(重鉍物)

今回の発掘調査に関連して、土器の胎土分析(重鉍物)をパリノ・サーヴェイ株式会社に依頼して実施した。以下はその分析報告である。

課題と試料

課題 分析にあたっては、杉山遺跡出土の「中世土器」(一部江戸時代末期のものをふくめる)を主たる分析対象とし、器種と胎土の関係を明らかにし、土器の製作、「流通」等を考える上での資料づくりをすることを分析の第1課題・目標とした。なお、当センターでは、すでに土田遺跡(西春日井郡清洲町)、大淵・阿弥陀寺遺跡(海部郡甚目寺町)出土の「中世土器」について同様の分析を行なっている。^{註1)}

試料 試料は杉山遺跡より出土した土器の計37点である。試料の番号、器種・時代・表面の状態等については第3表に示す。

分析方法

分析方法については次のとおりである。土器片約10gを鉄乳鉢にて粉碎、水を加え超音波洗浄装置により分散、#250の分析篩を用いて水洗、粒径1/16mm以下の粒子を除去する。乾燥の後篩別し、得られた1/4~1/8mmの粒子をテトラプロモエタン(比重約2.96)により重液分離、重鉍物のプレパラート作製、偏光顕微鏡下にて同定した。

不透明鉍物については、斜め上方からの落射光下で黒色金属光沢を呈するものをAとし、それ以外をBとした。表中の「その他」は、変質等で同定不能の粒子である。

分析結果及び考察

分析結果 分析の結果、得られた重鉍物の組成は第4表に示すとおりである。全試料37点のうち、同定粒数がプレパラート全面でも100個を越えたものは11点にすぎない。そこでここでは、同定粒数50個以上の試料からその胎土の特徴を表すものとしてグラフに示した。

試料のグループ分け 分析結果をもとに、その重鉍物組成における共通する特徴をとらえ、試料を次の3つのグループと5点の単独グループに分けた。

I グループ (No.1・2・7・23・24・25・28・29)

緑色の黒雲母が非常に多く、他にジルコン・角閃石・両輝石を少量含む。

Ⅱ グループ (No.6・8・13・19・20・22・33・37)

不透明鉱物Bを特に多く含む。次に黒雲母が多く、他にジルコン・ザクロ石・角閃石・両輝石・電気石などを含む。

Ⅲ グループ (No.38・39)

赤褐色の黒雲母が多く、次に不透明鉱物Bが多い。他にジルコン・ザクロ石・電気石などを少量含む。試料No.39は黒雲母より不透明鉱物の方が多いが、黒雲母の中でも赤褐色の方が多く、輝石を微量しか含まず、角閃石を全く含まないことなどからⅡグループよりもⅢグループに入れる方が適当と考えた。

単独グループ

- No.4 不透明鉱物Bが非常に多いが、黒雲母がほとんど含まれないことでⅡグループとは区別した。また、方解石が1個認められた(表中ではその他に入る)。
- No.30 同定粒数90個でも角閃石・ジルコン・ザクロ石が全く含まれないことで他のグループと区別した。
- No.51 電気石の量比が他の試料に比べて特に多い。ただし、同定粒数が51個と少ないので、あるいは黒雲母の多いⅠグループに入る可能性もある。
- No.52 単斜輝石・普通角閃石以外の角閃石・白雲母(表中の「その他」に入る)が比較的多く含まれ、今回の試料の中では特に変わった組成を示す。
- No.53 緑色の黒雲母が多いが、同定粒数252個でジルコン・ザクロ石がないことからⅠグループとは区別した。

土器の器種と胎土との関係 大淵・阿弥陀寺遺跡(前掲)の試料においては、器種と胎土との間に明瞭な対応関係が認められた。しかし今回の杉山遺跡の試料では同一グループ内に土鍋・釜・皿が混在し、明瞭な対応関係は認められない。

以下、器種毎に胎土の重鉱物組成についてみていく。

土鍋A (「伊勢型鍋」)

試料No.1～3は土鍋A₂、No.4は土鍋A₃である。土鍋A₂は不透明鉱物Bが非常に多いもの(3)と黒雲母が非常に多いもの(1、2)とがある。同A₃は、粒数が極端に少ない(図示の対象とならない)という特徴を有する。これは、土田遺跡、大淵・阿弥陀寺遺跡での分析結果と期を一にするものである。^{註2)}

土鍋C (「く字状口縁内耳鍋」)

いずれも第Ⅱグループに属する。

土鍋D

表3表 胎土分析試料一覧

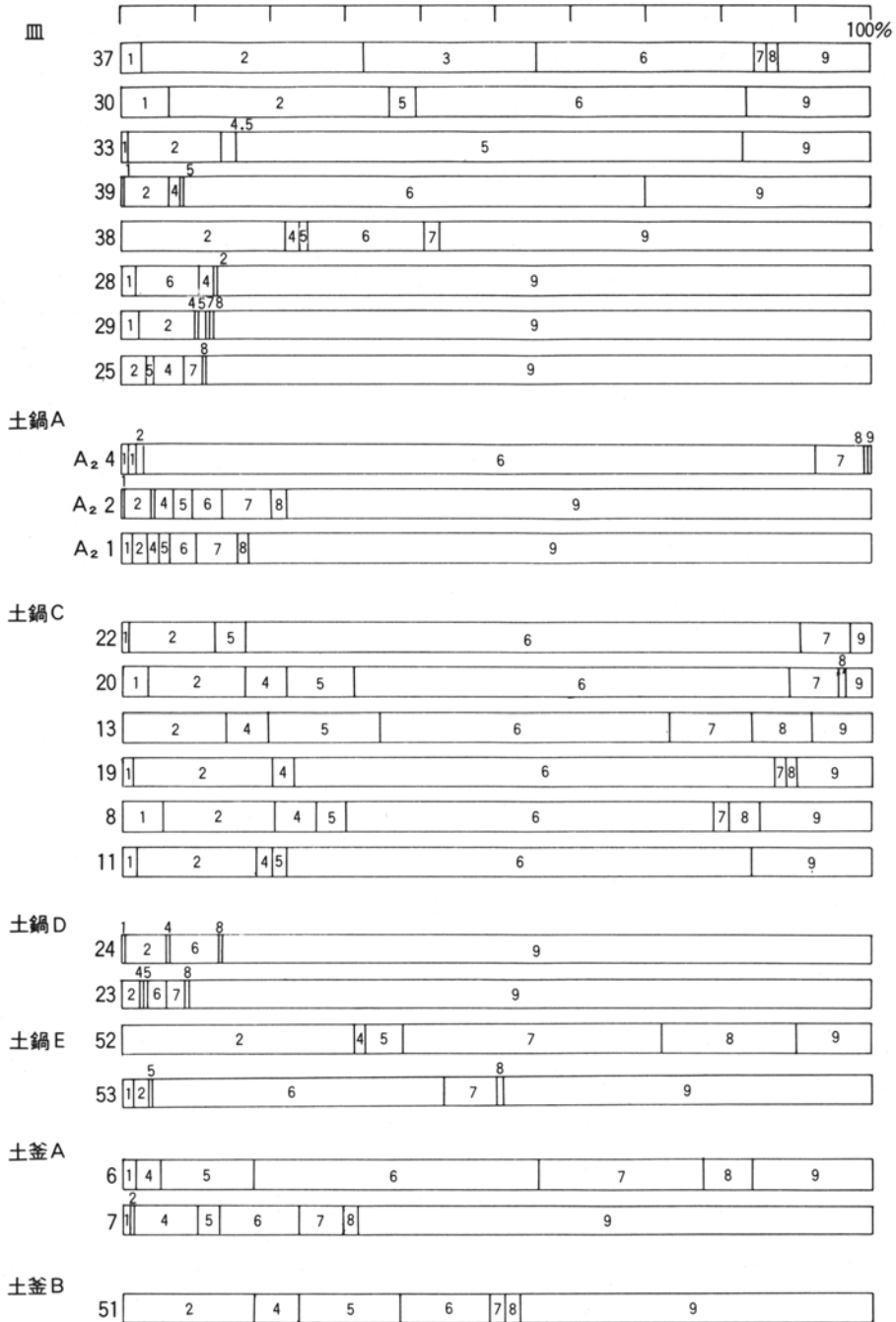
No.	土器 番号	Gr遺構	遺物	時期	表面の色(表・裏)	表面の質感	備 考
1	138	Ⅲ SS61 SK98 ウ-11	土鍋A	13C	黒褐・にぶい赤褐	粗い	E-297 860807
2	193	Ⅲ SS61 SK368 ウ-3	〃	14C	黒褐・褐	〃	E-388 860901
3	—	Ⅲ SS61 SD02 (Tr07西) 第Ⅰ層 イ-2	〃	14C	浅黄橙・にぶい黄橙	ややきめ細か	E-193 860721
4	184	Ⅲ SS61 SK263 オ-4 南比ベルト	〃	15C	灰褐・黒褐	きめ細か	E-373 860829
5	67	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~03間 第3層	土釜A	15C	〃 〃	やや粗い	E-187 860729
6	—	Ⅲ SS61 SD01 Tr08~03間 第3層	〃	14C	にぶい黄橙・灰褐	ややきめ細か	E-194 860730
7	—	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~03 第3層	〃	14C	浅黄橙・同	〃	E-133 860729
8	185	Ⅲ SS61 SK263 オ-4 (A)	土鍋C	16C	にぶい褐・黒褐	粗い	E-371 860811
9	—	Ⅲ SS61 SK263 オ-4	〃	16C	浅黄橙・同	ややきめ細か	E-364 860811
10	186	Ⅲ SS61 SK263 オ-4 (A)	〃	16C	黒・にぶい褐	〃	E-367 860811
11	64	Ⅲ SS61 SD01 オ-3 第3層	〃	16C	黒褐・浅黄橙	〃	E-178 860805
12	—	Ⅲ SS61 SD01 Tr02ベルト 第6層	〃	16C	にぶい黄橙・にぶい橙	〃	E-176 860826
13	63	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~03間 第3層	〃	16C	浅黄橙・にぶい黄橙	〃	E-128 860729
15	—	Ⅲ SS61 SD01 イ-4・5 Tr01~02	〃	16C	にぶい黄橙・同	きめ細か	E- 28 860801
16	58	Ⅲ SS61 SD01 Tr01~02 第2層	〃	16C	にぶい黄橙・浅黄橙	ややきめ細か	E- 44 860718
17	—	Ⅲ SS61 Tr07	〃	16C	灰褐・にぶい橙	きめ細か	E-219 860728
18	59	Ⅲ SS61 SD01 Ⅲ SS61 SD01埋土	〃	16C	浅黄橙・にぶい黄橙	ややきめ細か	E- 17 860714
19	—	Ⅲ SS61 SK05 イ-8 南半	〃	16C	灰白・同	〃	E-262 860805
20	118	Ⅲ SS61 SK05 イ-8 南半	〃	16C	〃 〃	〃	E-255 860805
22	82	Ⅲ SS61 SD02 ウ-1 第Ⅰ層	〃	16C	灰褐・浅黄橙	〃	E-203 860728
23	84	Ⅲ SS61 SD02 (Tr07西) 第Ⅰ層 イ-2	土鍋D	16C	灰褐・にぶい橙	きめ細か	E-200 860729
24	83	Ⅲ SS61 SD02 Tr03~09間	〃	16C	〃 〃	〃	(攪乱?) E- 8 860716
25	191	Ⅲ SS61 SK263 オ-4 (D)	Ⅲ	16C	灰黄褐・同	粗い	E- 24 860811
26	108	Ⅲ SS61 SK04 イ・ウ-8 (北半)	〃	16Cカ	にぶい黄橙・同	きめ細かい	E-249 860803
27	55	Ⅲ SS61 SD01 埋土	〃	16Cカ	〃 〃	〃	E- 20 860714
28	—	Ⅲ SS61 SD01 埋土	〃	16Cカ	・ ・ にぶい橙	ややきめ細かい	E- 18 860714
29	—	Ⅲ SS61 SD01 Tr01~02間 第Ⅰ層	〃	16C	にぶい橙・同	きめ細かい	E- 36 860723
30	53	Ⅲ SS61 SD01 Tr01~02 第Ⅲ層 ウ-4・イ・4	〃	16C	灰白・同	〃	E- 76 860730
33	52	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~08間 第3層	〃	16C	浅黄橙・同	ややきめ細かい	E-132 860730
34	39	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~08 (SK?) ウ-3	〃	16C	にぶい橙・灰白	きめ細かい	E-145 860801
36	41	Ⅲ SS61 SD01 Tr02~08 第3層下 ウ-3	〃	16C	灰白・同	〃	E-151 860801
37	141	Ⅲ SS61 SK109 イ-9 第Ⅲ層下	〃	16C	浅黄橙・同	〃	E-301 860807
38	130	Ⅲ SS61 SK51 ウ-6	〃	16C	灰白・同	粗い	E-281 860806
39	112	Ⅲ SS61 SK04 イ・ウ-8 北半	〃	16C	〃 〃	やや粗い	E-241 860803
51	183	Ⅲ SS61 SK439 ウ-10 SK439	土釜B	16Cカ	灰白・にぶい黄橙	きめ細かい	E-392 860818
52	—	Ⅲ SS 61B 表採	土鍋E	19Cカ	灰褐・にぶい黄橙	〃	E-450 860930
53	—	Ⅲ SS61 北東壁トレンチ	土鍋E	19Cカ	褐・浅黄橙	〃	860707

No.14、21、31、32、35、40~50は欠番

第4表 胎土重鉍物組成

試料 番号	土器 番号	重鉍物組成														同定鉍物 粒数
		斜 方 輝 石	そ の 他	他 の 角 閃 石	ザ ク ロ 石	電 気 石	カン ラン 石	ジル コン	不透明 鉍物		角閃石		単 斜 輝 石	黒雲母		
									A	B	緑 色	褐 色		緑 色	赤 褐 色	
1	138	4	4					4	3	8	13		3	188	2	229
2	193	1	6				1	5	5	8	13		4	147	5	195
3	—	2	3					1	1	180	13		1	1		201
4	184	3	5			1		1	1	15	4			10		40
5	67	3	1				3	4		9	1	2	2	7	5	37
6	—	1						2	8	24	14		4	10		63
7	—	1	1					8	3	10	5		2	65		95
8	185	3	4		4			3	2	26	1		2	8		53
9	—	1			1			1		18	1			6		28
10	186	2	1		3	1				11			1	2		21
11	64	1	6		1	1		1	1	31				7	1	50
12	—	1			1	3			1	15	2					23
13	63		6		1	3		4	11	28	8		6	6		73
15	—	1	1				1	1	1	13	1					19
16	58		5		2			1	3	24	2		1	3		41
17	—	5	1		4			1	2	6	3			13		35
18	59	1	3		2	1		1	1	22	1			1	2	35
19	—	1	10		1	2		2		44		1	1	6	1	69
20	118	3	11		3			5	8	53	3	1	1	3		91
22	82	1	8		5	2			5	93	6	2		4		126
23	84		7		1			1	1	6	5	1	1	176	60	259
24	83	1	8		4			1		13			1	142	36	206
25	191		3		5	1		3	11		7		1	216	21	268
26	108		3		2		1	1	1	2				15	1	26
27	55		1		7			3		2				7		20
28	—	5	10		2	3				6	1			225	8	260
29	—	6	17		3	1		1	2		1		1	191	33	256
30	53	6	26						3	40				9	6	90
33	52	1	9		3	3		2		76				15	4	113
34	39	1	6		2		1	3	5	9	2		1	6	1	37
36	41		5						1					3	1	10
37	141	2	15	1	3	1			15	19			1	5	3	65
38	130		18		5	1		3	1	17	2			1	63	111
39	112	1	10		1	2		3	1	126				20	41	205
51	183		1		3	5		3	7	6	1		1	13	11	51
52	—		17	9	2			1	3		12		11	2	4	61
53	—	4	2	1		1			1	100	16	1	3	97	26	252
(第5表)		1	2				3	4	5	6	7		8	9		

第5表 胎土重鉱物組成 (グラフ)



(1～9の鉱物名は第5表下を参照)

No.23・24は第Ⅱグループに属し、No.53は単独グループである。No.53については単独グループであるが、緑色の黒雲母が多い点は第Ⅰグループに類似している。

土鍋E（「ハウロク・ホウラク」）

試料が2点と少ないが、それぞれ単独グループに属する。

土釜A

No.5・6・7がこれにあたる。No.6はⅡグループに、No.7はⅠグループに属し、No.5は粒数が極端に少ない。No.5に関する限り、大淵・阿弥陀寺遺跡出土例と形態、調整技法とも酷似しており、かつ重鉍物が極端に少ない点も一致する。

土釜B

試料が1点、単独グループである。内容的にはⅠグループに近い。

小皿

バラエティーに富んだ重鉍物組成を示し、細別の器種と胎土との関係も、明瞭な対応関係を示さない。

製作地等の問題 さらに考察すべき点も多いが、ここでは、こうした成果及び大淵・阿弥陀寺遺跡での分析結果をふまえ製作地の問題について土鍋Aに限り、若干の検討を加えてみたい。

既述のように、土鍋Aについては、尾張の大淵・阿弥陀寺遺跡、三河の杉山遺跡でそれぞれA₂～A₃がみられ、かつ胎土の重鉍物組成も一致をみた。換言すれば後章で考察するが土鍋A₂→A₃という形態・技法の変化のみならず、胎土の変化も一致をみるということである。このことは、この土鍋Aが少なくとも尾張～三河にかけての編年指標として極めて有用なことを示すとともに、これら土鍋Aが共通するある特定の産地から継年的に入手されていたことを示しているものとも解され注目されよう。今後、主として「陶器」の研究からすすめられてきた当該期の「流通」を考える上で重要な資料となるものとする。

以上、胎土分析の結果の報告及びそれについての若干の考察を行ってみた。まだまだ分析結果について考察すべき点も多いものとするが、いましばらくは、各地の遺跡での分析結果の蓄積をまちたい。

この章は、パリノ・サーヴェイ株式会社の依頼報告書を基に、編者（北村）が一部組替・加筆（主として考察部分）等を行ないまとめあげたものである。

〔註〕

註1）（財）愛知県埋蔵文化センター 1987 『土田遺跡』（愛知県埋蔵文化センター調査報告書 第2集）

同 上 1988 『大淵遺跡、阿弥陀寺遺跡』（同上 第4集）

註2） 註1）に同じ

V. 考 察

1. 杉山遺跡出土の「中世土器」について

今回の調査において、小片が多いくらいはあるが、いわゆる「中世土器」のまとまった出土をみた。ここでは、これらの土器の器種分類及びその編年的位置について考えてみることにする。なお、これら鎌倉～室町時代の土器との比較のため江戸時代末期(19世紀代)の土器も一部取り上げる。

(1) 器 種 の 分 類

器種としては、鍋、釜、皿があげられる。

(a) 鍋・釜類

従来、鍋・釜類の器種については様々な名称が与えられてきた。ここでは従来の見解をふまえて以下の分類を試みた。

まず鍋・釜については、鐳の有無により、鐳の無い土鍋と鐳を有する土釜とに分ける。さらにこれらを形態上の相違に基づいて、土鍋をA～E類に、土釜をA・B類に区分する。
(土鍋)

土鍋A類 (第32図)

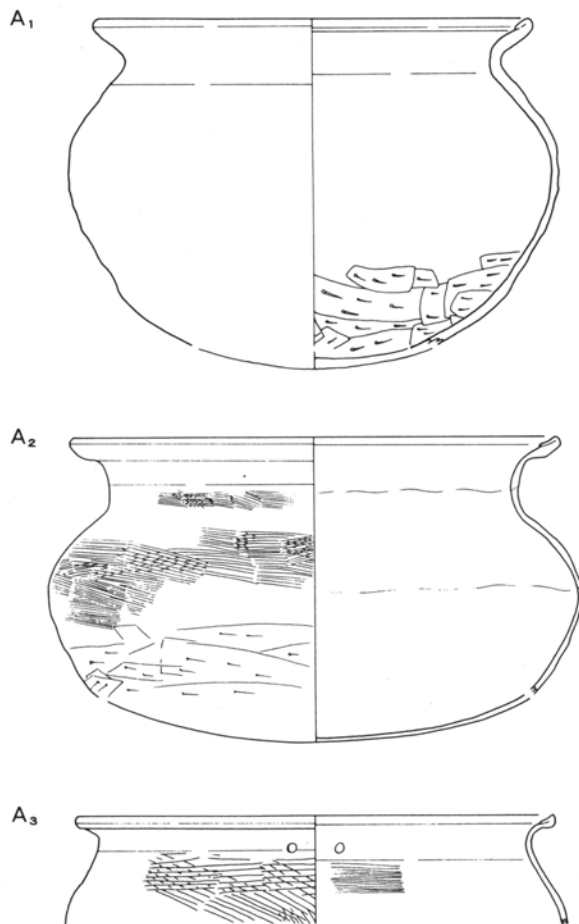
扁球形の胴部に、直立する短い頸部を有し、口縁部が大きく外反し口縁端部が折り返されるもの。従来「伊勢型鍋」と呼称されたものである。^{註1)} 胴部外面調整手法、胎土、形態等の相異によりこれらをさらに、A₁～A₃類に分ける。

A₁類 杉山遺跡では口縁部片がみられるのみであるので、地域を異にするが、西三河、^{註2)} 愛知県西尾市江原町・江原橋下遺跡出土品をもとに説明を加える。扁球形(球形に近い)の胴部に強く外反する口縁部がつく形態で、明確な頸部を有しない。口縁端部を短く折り返すが、折り返し部を扁平化する調整を行っていない。器壁は比較的厚手。胴部外面の調整は、ヨコナデ調整を施しているが、成形時の粘土積み上げ痕を十分に消し去るにいたっていない。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整で、胴部内面は底内面にヘラケズリ調整がみられるほかはヨコナデ調整を施す。

A₂類 杉山遺跡S K 1368下層出土のものを代表例とする。扁球形の胴部に直立する短い頸部がついたのちつよく外反する口縁部がつく形態。口縁端の折り返し部は、A₁類に比べ巾広で、強くナデられている。また胴部の最大径の部位は「く」字状に屈曲する。胎土は

A₁類にくらべ精良で、器壁は薄い。胴部の外面は、ナデ調整の後、上半をヨコ位を基調とするハケメ調整で、下半をヘラケズリ調整で仕上げている。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整で調整で、その際に胴部外面のハケ目を部分的に消している。胴部内面は丁寧なナデ調整であるが、底内面については欠失しており定かではない。

A₃類 胴部下半を欠くが、完存品をみないいまは、杉山遺跡S K 1263出土のものを代表例としておく。扁球形の胴部に、しまりの弱い直立する短い頸がついたのち大きく外反する口縁部がつく形態。口縁端の折り返しは、巾狭で折り返し後、強いヨコナデ調整が施され、口縁端部が全体として内弯する。胴部の外面は、荒いヨコおよびナナメのハケメ調整で仕上げられている。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整。胴部内面は丁寧なナデ調整及び板ナデ調整。A₃類は、ほとんどのものに吊り手をつけるための穿孔(焼成前)が口縁部になされている。



第32図 土 鍋 A 類

土鍋B類

扁球形の胴部に直立する口縁部がつき、肩部に吊り手のための「耳」がつく形態のもので、従来「双耳鍋」等と呼称されてきたものである。杉山遺跡では、この確実に土鍋Bに比定されるものはみられない。

土鍋C類 (第33図)

半球形の胴部に外反する口縁部がつき、口縁部内面に吊り手のための「耳」が一对存す形態。従来「内耳付甕形土器」などと呼称されるもの。杉山遺跡からこの類は多量に出土したが、その大多数は口縁部片で、その形態を十分に知り得るものは少ない。ここではC₁～C₃類に分ける。

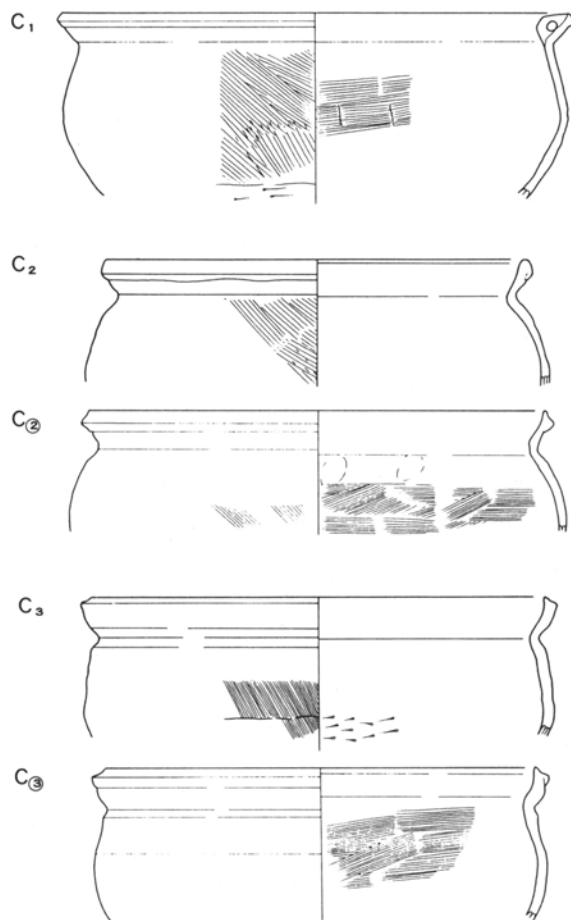
C₁類 杉山遺跡SK 1263出土例(185)に代表される。半球形の胴部に外反する口縁部がつくものであるが、口縁部と胴部の境より胴部最大径へいたる間は直線的で、胴部の最大径の部位が「く」字状に屈曲する形態をなす。胴部外面は下胴部をのぞきナナメのハケメ調整(部分に口縁部におよぶ)で下胴部にヘラケズリ調整が加えられる。口縁部は丁寧なヨコナデ調整(のち「耳」の装着)で、胴部内面は、ナデ調整(部分的にハケメ調整)。胎土は精良で、器壁は一部薄いものもみられるが概して厚手。なお、ハケ目は、一部に荒いハケ目(器壁の薄いものにみられる)もみられるが、多くは、細かな——通常の——ハケ目。

C₂類 杉山遺跡S D 01出土品(57)およびS K 1005出土品(113)を代表例とする。半球形の胴部に外反する口縁部がつくものであるが、胴部上半が丸味をもった曲線を描いて最大径にいたる点がC₁類と異なる。なお最大径の部位は「)」状を呈す。胴部外面の調整は、口縁部との境までハケメ調整を施すもの(113)と境付近をヨコナデによって消しているもの(57)とがある。前者をC₂類、後者をC_{2a}類として区別する。口縁部の内外面は丁寧なヨコナデ調整。胴部内面は、ナデ調整ないしハケメ調整。胎土は精良であるが器壁は比較的厚い。

C₃類 杉山遺跡SD 01(63)、SD 02(81)出土のものを代表例とする。半球状の胴部に幾分外反する口縁部がつくもので、口縁部と胴部との境は、あたかも凹線がめぐるが如き様相を呈し、口縁部と胴部が直線的な形態をなすもの。胴部外面の調整は、ナナメのハケメ調整後に上部をヨコナデ調整を加えるもの(81)と胴部全体をナデ調整で仕上げるもの(63)とがある。前者をC₃類、後者をC_{3a}類として区別する。口縁部内外面は丁寧なヨコナデ調整。胴部内面はナデ調整ないしハケメ調整。

土鍋D

半球形の形態——胴部と口縁部との区別がない。便宜的に上端部を口縁部とよぶ——で、内弯傾向にある口縁部内面に吊り手のための「耳」が一对つくものである。従来「内耳鍋」



第33図 土鍋 C 類

とよばれてきたもの。杉山遺跡での出土例は少ない。

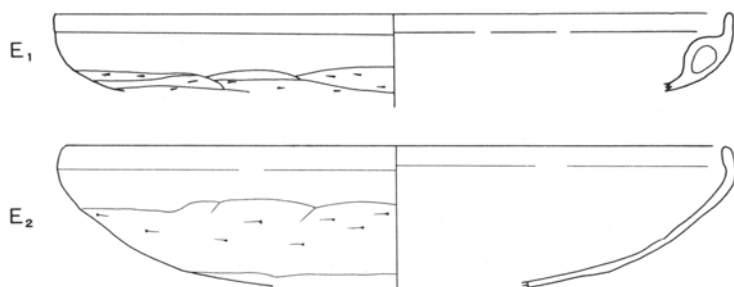
土鍋E (第34図)

あたかも、土鍋Dを扁平にした形態のもので、形態の相異にもとづきE₁、E₂に分ける。

E₁類 杉山遺跡のS D 12出土品(297)に代表される。底部が平坦な皿形のもの。「耳」は、口縁部から一部底部にかかる部位に装着されている。胴部外面および内面はナデ調整で、底外面がヘラケズリ調整。ただ、ナデ調整といっても内面と胴部外面とでは大きく異なる。すなわち、内面のナデ調整はきわめて平滑に施されているのに比べ、外面は指圧痕を十分に消すにいたっていないのである。この相違は成形方法に起因する可能性がある。

E₂類 杉山遺跡、S D 12出土品(266)に代表されるものである。E₁類に比べ、底部は丸く、深手の形態をなす。胴部下半にヘラケズリ調整が施されるほかはナデ調整(E₁類と同様のあり方を示す)である。なお、このE₂類で注意しておきたいのは、本類については大

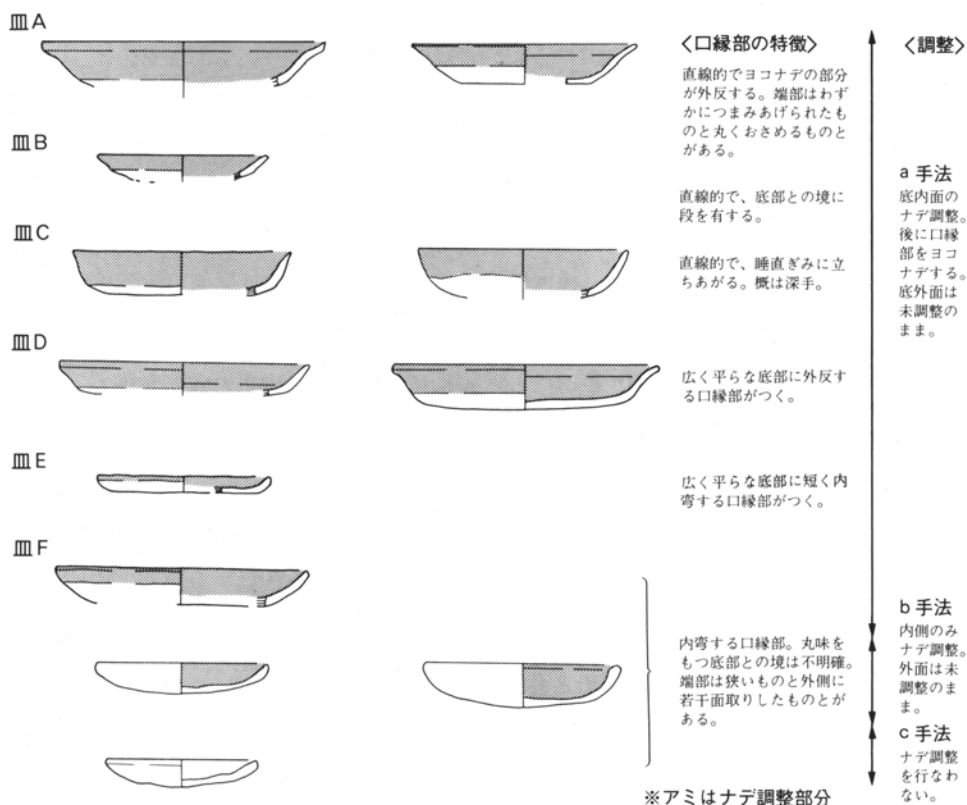
形の破片が多いのにもかかわらず「耳」の遺存例を見出し得ない。このことは、あるいは当初より「耳」を有しない可能性を示唆しているのかも知れない。今後の課題である。



第34図 土 鍋 E 類

(b) 皿 類 (第35図)

口縁部の形態の相異にもとづきA～F類に分ける。法量の面からの分類も可能かとも考えるが、破片資料がほとんどであり、かつ歪みが大きいことから正確を期せないため、今回はこの方法での分析を見合せた。



第35図 皿 類 (1:4)

(2) 土鍋の編年的位置

出土量の比較的豊富な土鍋 A・C・D・E について、その編年的位置を次に少し考えてみたい。

〈杉山遺跡出土例の検討〉

土鍋 A・C・D・E についてその出土状況について整理したのが第 6 表である。

表の示すところによれば、これら土鍋の伴出状況は、

第 6 表 土鍋の伴出関係

遺 構	土 鍋 A		土 鍋 C			土 鍋 D	土 鍋 E	
	A ₂	A ₃	C ₁	C ₂	C ₃		E ₁	E ₂
SK1097	○							
SK1098	○							
SK1132	○							
SK1277	○							
SK1287	○							
SK1368 (下)	○							
SK1240		○						
SK1003		○	←○→					
SK1008		○		○				
SK1114		○		○				
SK1263		○	○	○				
SK1004				○				
SK1005				○				
SK1368 (上)				○				
SD02					○	○		
SK1040			←○→			○		
SD21							○	(○)
SD12							○	○

という具合にまとめられる。これを共伴遺物との関係をふくめ整理すると――。

- ① 土鍋 A₂は、灰釉系陶器の椀(13世紀代)と共伴する。
- ② 土鍋 A₃は、土鍋 C_{1~2}と共伴する。とともに15世紀代に比定される施釉陶器と共伴する。
- ③ 以上の点から、土鍋 A₂は土鍋 A₃に先行する蓋然性が高い。
- ④ 形態・胴部調整手法が A₃よりも A₂に近い土鍋 A₁は土鍋 A₂に先行する可能性が高い。
- ⑤ 土鍋 C と D は共伴するとともに16世紀代に比定される施釉陶器と共伴する例がある。
ただし、土鍋 A₃と D との共伴例はみられない。
- ⑥ 土鍋 E_{1~2}は、19世紀代の陶磁器と共伴する。

といった点を指摘し得る。以上は、今回の杉山遺跡の発掘調査による所見である。遺物を出土した遺構の性格等、解決すべき問題が今後の課題として残るが、いままで述べてきたことより、器種の消長等をまとめれば、第 7 表のとおり整理される。

第7表 土鍋の消長

	12	13	14	15	16	17	18	19世紀
土 鍋 A							(未	
〃 C							検	
〃 D								
〃 E							出	

〈周辺遺跡での検討〉

上述の検討結果について、ここでは地域を異にする阿弥陀寺遺跡(海部郡甚目寺町)、土田遺跡(西春日井郡清洲町)、清洲城下町遺跡(同前)の出土例との比較検討を加えることにより若干の検証を試みる。

阿弥陀寺遺跡(愛知県海部郡甚目寺町)^{註3)}

IJA 61調査区のS D 03より、土鍋A₂が美濃窯「明和1」～「大畑大洞4号窯」併行(14世紀代)の灰釉系陶器碗と伴出している。この土鍋A₂は胎土、調整手法とも、杉山遺跡出土例(188)と酷似するものである。同じくIJA 60C調査区、S X 03(大型方形土坑)より、土鍋A₃が、美濃窯「大洞東1号窯」併行(14末～15世紀前葉)の灰釉系陶器碗・皿と併出している。この土鍋A₃は、杉山遺跡出土例(179)と胎土、調整手法は酷似するものの、口縁部の折り返し、胴部の形状は、杉山遺跡(188)、上記阿弥陀寺遺跡出土例のA₂と杉山遺跡出土(179)A₃との中間的形態をなしている。

以上、若干の相異は認められるものの、これよりすれば、阿弥陀寺遺跡においても土鍋A₂→土鍋A₃への年代による変化は、追認されたものといえよう。ただここで問題となるのは、杉山遺跡においては、土鍋A₂は、13世紀代に比定される灰釉系陶器碗と共伴しているという点である。これについては、土鍋A₂の時期幅が長いとみるか、あるいは、灰釉系陶器の美濃窯編年と渥美窯編年と間に年代的ズレがあるべきか、等々が考えられるが、いまは、今後の課題としておきたい。また、阿弥陀寺遺跡14世紀～15世紀前半代の遺構から土鍋C・D・E類の出土をみない点も注意しておきたい。

土田遺跡(愛知県西春日井郡清洲町)^{註4)}

赤塚次郎氏により、この土鍋A(「鍋A」一報告書)について詳細な検討が行なわれている。まず「口縁部の分類を基軸とし、計測値、胎土等の特色を加え」て、土鍋AをA～D類に分類し、技法の変化、共伴資料の検討をふまえ、「変化の3段階」を想定している。す

なわち、第1段階：肥厚口縁をもつB類の出現(下略) 第2段階：折返し口縁をもつD類の出現 第3段階：胎土変化と薄化をともなうE類の登場(下略) である。基本的には妥当な見解と考える。いまここで、この小稿で試みたいわば胴部の調整技法を基軸とした分類との対比を試みるならば、

(B) D類=A₁類 E類=A₂類となる。

このことからするならば、A₁類→A₂類への変化が土田遺跡において認められるものと言えよう。

なお、この土田遺跡からは、11～13世紀代に比定される遺物が多量に出土しているが、土鍋・土釜類としては、土鍋Aおよび若干の土釜Aが認められるにすぎない。

清洲城下町遺跡・朝日西遺跡(愛知県西春日井郡清洲町)^{註5)}

昭和59年度より、環状2号線(一般国道302号線)建設工事に伴う事前調査として、また昭和61年度より五条川河川改修に伴う事前調査として本埋蔵文化財センターが発掘調査を実施している。まだ正式報告書の作成をみないが、年報にその概略が示されている。なお朝日西遺跡は、調査の結果、清洲城・城下町の一角にあたり、清洲城下町遺跡と一連のものであることが判明している。

第36図は、15世紀末～17世紀前葉頭にその編年的位置がもとめられる施釉陶器と伴出した土鍋・土釜類を遺構毎にならべたものである。配列にあたっては、伴出の施釉陶器、遺構のあり方を考慮して行った。したがって、図中の個々についてそれを「型式」設定するにいたっていない点をあらかじめ断わっておきたい。

図の示すところによれば、

(i) IKJ 60F区SD 03の段階およびそれ以降には、上述へ阿弥陀寺遺跡(14～15世紀)でみられた土鍋A・土釜Aの出土は認められない。

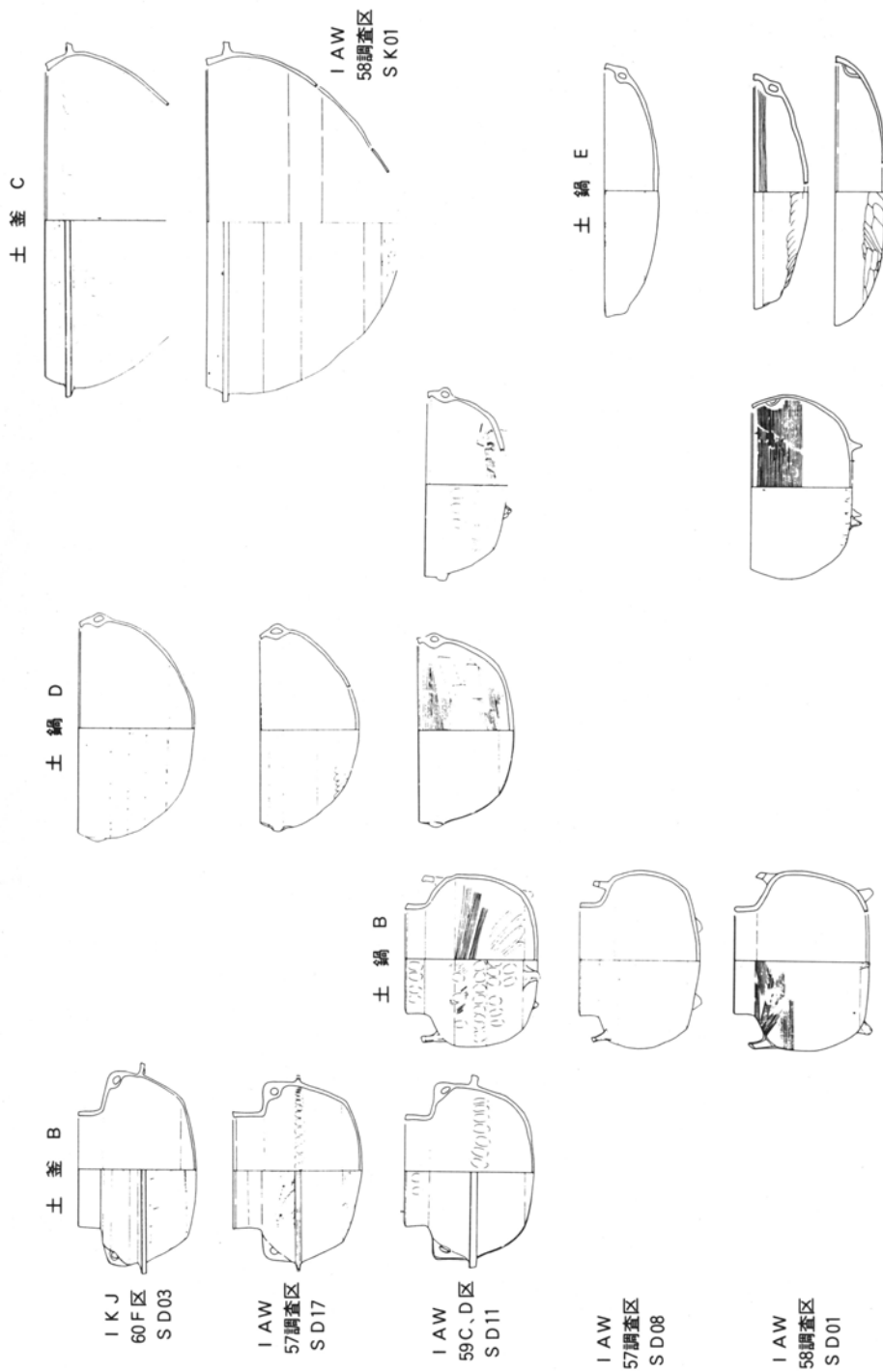
(ii) 土鍋Bは、土釜B、土鍋Cよりも後出で、土鍋Cはさらに後出的である。

等々を指摘し得る。殊に(i)は杉山遺跡での消長と期を一にするもので、この点を重視したい。しかしながら、器種の有無の問題は、多分に偶然によるところもあって、今後、修正を要する点も生じようが、おおむねの変遷はとらえられたものとする。

〈小 結〉

以上、阿弥陀寺遺跡、土田遺跡、清洲城下町遺跡における土鍋・土釜類のあり方と、今回調査した杉山遺跡の所見とを対比すると次のようにまとめられよう。

(1) 杉山遺跡と「清洲」周辺での土鍋・土釜類の消長は、これと土鍋Cを除き、おおむね一致する。



第36図 清洲城下遺跡(ⅠKJ)、朝日西遺跡(ⅠAW)出土の土鍋・土釜 (1/8遺構毎にならべたもので、編年図ではない。)

IAW 調査区 (財) 愛知県教育サービスセンター 1984 『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』

IAW 調査区 (財) 愛知県教育サービスセンター 1985 『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』

IAW 59C、D区 (財) 愛知県埋蔵文化財センター 1986 『年報昭和60年度』

IKJ 60F区 小沢一弘 1985 『遺物から見た城下町その1』(『埋蔵文化財愛知』No.2)

- (2) 殊に土鍋Aについて言えば、「清洲」周辺出土品と杉山遺跡出土品と酷似しており、——上述の胎土分析の結果を加味するならば——同一産地よりはこばれた可能性が高い点が指摘される。加えて、杉山遺跡で推察された $A_1 \rightarrow A_2 \rightarrow A_3$ 類という変遷が「清洲」周辺でも追認された。このことは、今後、県下における当該期の編年資料として有用なものであることを示しており注目される。
- (3) ただ、「清洲」周辺での所見では土鍋Aが12世紀代にさかのぼること、土鍋Dは、江戸時代にも存続すること、土鍋Eは、17世紀前葉にさかのぼること等が知られる。この点についてはいましばらく杉山遺跡周辺での調査の進展をまちたい。
- (4) 大きな相異点としては、土鍋Cが全くみられない点が注目される。この点については、従来より指摘されるところであり、今後の研究課題である。

(3) 皿類について

皿類について、既述の分類に基づき遺構毎に整理・検討を試みたが、遺構と器種とに明瞭な対応関係を認めることはできなかった。

ただその過程で注意された点を以下に箇条書きし、再考のための覚書きとしておきたい。

- (1) 概して、皿A・C・D・Fで調整がa手法のものは、相対的に古い時期（14～15世紀）の遺物に伴ない、皿Fで調整がb手法のものは、古・新（14～16世紀）をとわずに出土する。ただ皿F（b手法）の厚手で大ぶりのものは、19世紀代の遺構に伴う傾向が看取される。
- (2) こうした点から口縁部の外面をヨコナデする手法は、杉山遺跡に関する限りでは、わずかな例（SK3012・3020出土例）を除き、比較的古い手法とみなすことが出来る。
- (3) また、ここでは、土鍋・釜類と同じように周辺地域との比較を行ない得ないが、少なくとも、清洲城下町遺跡で16世紀代に盛行する薄手で底外面に回転糸切り痕を残すロクロ成・整形による皿は、杉山遺跡では認められない点を指摘し得る。今後の課題である。

以上、杉山遺跡出土の「中世土器」について、若干の考察を試みた。再々述べるように小さな破片資料が多く、遺構内における「伴出」・「共伴」関係について一抹の不安が存する点もふくめ、なお考察すべき点が多く厳格に言えば、それは一つの推論であって断定的な結論ではない点が多い。

〔註〕

- 1) 新田 洋 1985 「伊勢型鍋に関する若干の覚書」(『三重考古学研究』1)
ここでは、赤塚次郎氏が土田遺跡の調査報告書のなかで「鍋A」として捉えているのをうけ「土鍋A」の呼称を用いた。(註4の文献)
- 2) 西尾市立東部中学校所蔵 池本正明氏原図
- 3) (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987 「阿弥陀寺遺跡」(『年報 昭和61年度』)
- 4) (財)愛知県埋蔵文化財センター 1987 『土田遺跡』(愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第2集)
- 5) (財)愛知県教育サービスセンター 1984 「朝日西遺跡」(『環状2号線関係埋蔵文化財発掘調査年報Ⅱ』)
(財)愛知県教育サービスセンター 1984 「朝日西遺跡Ⅱ」(『埋蔵文化財発掘調査年報Ⅲ』)
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1986 「朝日西遺跡」「清洲城下町遺跡」(『年報 昭和60年度』)
遠藤才文・小沢一弘ほか 1986 「人・獣骨類の出土した大溝」(同上『年報 昭和60年度』)
小沢一弘 1985 「遺物から見た城下町 その1」(『埋蔵文化財愛知』No.2)
(財)愛知県埋蔵文化財センター 1987 「清洲城下町遺跡」(『年報 昭和61年度』)

2. 遺構の時期別変遷

ここでは、検出された遺構の時期別の組み合わせおよびその変遷について、復元的に整理し、遺跡の動向についてまとめておく。

時期区分

杉山遺跡の遺構は、既述のように、(1)奈良時代、(2)鎌倉～室町時代、(3)江戸時代(末期)の3時期にまとめられる。それぞれを杉山遺跡の第Ⅰ期、第Ⅱ期、第Ⅲ期とする。そして前節の遺物の検討結果および「Ⅲ. 遺構」の項で述べた埋土の相違(A群、B群)をふまえ、第Ⅱ期についてこれを第Ⅱ-a期(13～14世紀代、灰釉系陶器および土鍋A₁₋₂に代表されるA群の土坑)および第Ⅱ-b期(15～16世紀代、土鍋Cに代表される、B群の土坑)に分ける。この分期については、結果的に遺構配置の上での「画期」と対応する。

出土遺物が少ないくらいはあるが、上記の時期区分と検出遺構との対応を示したのが第7表である。そしてこれに基づき、各時期の遺構配置を示したのが第36図である。以下、この図表に基づき、第Ⅰ～Ⅲ期の変遷を復元的にたどってみることとする。

第Ⅰ期(奈良時代)

調査区のほぼ中央に、はじめて人為的所産である竪穴住居S B 01が掘削される。単独で一棟検出されたにとどまり、S B 01の性格等については、判然としない。集落の縁辺にあたるのであろうか。

第Ⅱ期(鎌倉～室町時代)

奈良時代に竪穴住居S B 01がみられた後、ふたたび人々の生活の痕跡が見い出されるのは鎌倉時代(13世紀)に入ってからである。

第Ⅱ-a期(13～14世紀代) 調査区の北半部に、掘立柱建物群(S B 02～05)および土坑が掘削され、北端部にS D 01、S D 02の平行する2条の溝が設けられる。この2条の溝の東延長上は、調査区東約50mほどのところに位置する杉山端城の南辺にあたる。杉山端城跡より、当該期の遺物が採集されることから、あるいは杉山端城の形成(厳密に言えば、当該期の遺構を壊して端城が造営されている可能性があるが、いまはこの2条の溝が以後今日まで連綿として続いている点を評価しておきたい)と何らかの関連があるのかも知れない。ともあれ、この時期、調査区の北部に掘立柱建物の「屋敷地」が形成されたことは明らかである。

第Ⅱ-b期(15～16世紀代) 調査区の北半部に溝(S D 01～S D 09、掘替え等をふくめる)により画された「屋敷地」の形成をみた時期。建物については、根石ないし礎石を有するS B 06が想定される。この溝により区画される点が第Ⅱ-a期と大きく異なるところであり、

第Ⅱ期を2時期に分ける「画期」とした根拠である。このいわば「区画溝」は、現在の地割と一致し、かつこの地割が杉山端城を中心とする方格地割の一角をなすこと、および出土遺物の示す年代が知られるところの杉山端城の年代の一端と一致することから、この第Ⅱ-b期の「屋敷地」の形成については、明らかに杉山端城の動向と強い何らかの関係があったものと推察される。

16世紀末ないし17世紀初頭の遺物がみられたあと江戸時代(末期)まで、遺物の空白期間があり、おそくとも17世紀初頭ごろにはこの「屋敷地」は廃絶したものと考えられる。

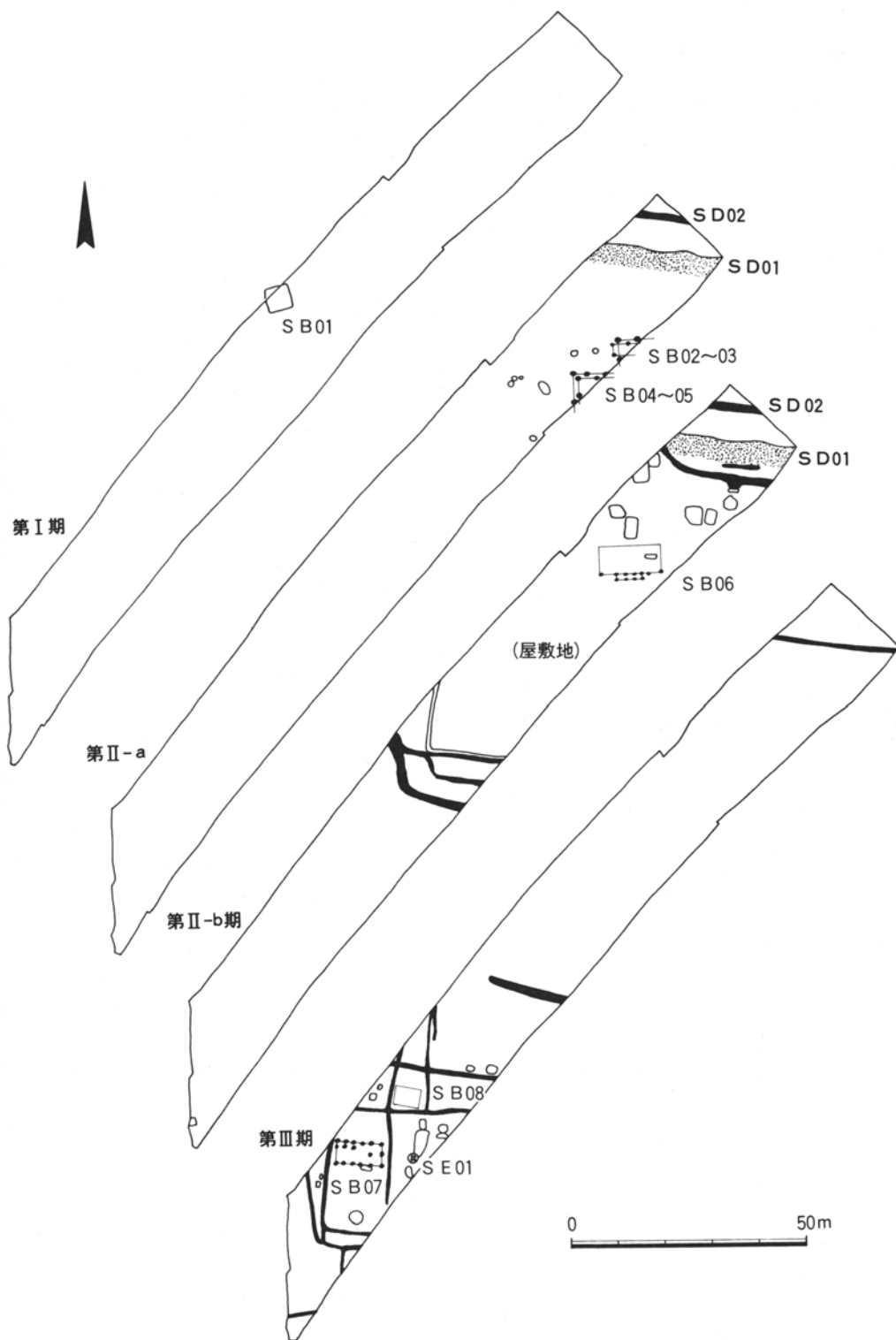
第Ⅲ期(江戸時代末期 19世紀前半代)

調査区の南半部に、小規模な溝で画された屋敷地の形成をみた時期。溝中の遺物はいずれも19世紀代前半代に比定されるものに限られ、20世紀代のものは、現耕作土中に認められるにすぎない。なお、調査前は、調査区中央部やや南寄りの地点が屋敷内の畑であったほかは、全て畑であったことから、比較的短期間でこの「屋敷地」は廃絶され、畑となったものと解される。また、井戸(S E 01)については、今回の調査の契機となった国道151号線バイパスとしての用地買収直前まで、畑のなかに「古井戸」として存していたとのことである。

以上、遺構の変遷について、第Ⅰ～第Ⅲ期に分けてまとめてみた。そして、特に杉山遺跡での一大画期として第Ⅱ期を強調しておきたい。それは、杉山端城の成立時期が判然としない現段階において、第Ⅱ-a期なのか第Ⅱ-b期なのか、にわかには決め難いが、すなくとも第Ⅱ-b期において、杉山端城を中心とする一種の「方格地割」の形成が考えられ、S D 01・07等にみられるようにその後の土地利用に少なからず影響を与えてきた、という点を評価してのことである。

第8表 遺構の時期別一覧

時代	遺構 時期区分	建物(SB) 井戸(SE)	溝(SD)	土 坑(SK)		
奈良時代	I 期	SB01				
鎌倉時代	II-a期	SB02	(SD01)	(土 坑 A 群)		
				SK1060	SK1368(上)	
				SK1175	SK1132	SK1053
		SB03	(SD02)	SK1238		SK1120
				SK1277		SK1177
				SK1287		SK1178
		SB04		SK1349		SK1229
				SK1097		SK1238
				SK1098		SK1369
		SB05		SK2005		SK1444
				SK2137		SK1502
	II-b期	SB06力		(土 坑 B 群)		
			SD01	SK1003	SK1009	
			SD02	SK1366	SK1040	SK1031
			SD04	SK1263	SK1041	SK1027
			SD05	SK1325	SK1089	SK1033
			SD06	SK1326	SK1368(下)	SK1080
			SD07	SK1202		SK1119
			SD08	SK1005		SK1139
			SD09	SK1004		SK1157
				SK1114		SK1206
江戸時代(末期)	III 期	SB07	SD10	SK2110	SK2141	
			SD11	SK2135		
			SD12	SK2118		
			SD13	SK2117		
			SD14	SK2134		
		SB08	SD15	SK3020		
			SD16	SK3167		
			SD17	SK2136		
			SD18	SK3007		SK3011
			SD19	SK2109		
		SE01	SD20	SK2092		SK3017
			SD21			



第37図 遺構の時期別変遷図

3. 結 語

今回の調査は、鎌倉～室町時代の遺跡としては新城市域における初めての発掘調査であった。調査に際しては、隣接する杉山端城との関連が注目されるところであり、また従来不明確であった当地方の鎌倉～室町期の土器・陶磁器の様相を知るための資料の検出が期待されるところであった。調査の結果、前節までに述べたような多くの成果を得ることができた。以下、調査の成果について、簡単なまとめを行い結語としたい。

今回の調査で検出した遺構は、第Ⅰ期 奈良時代、第Ⅱ期 鎌倉～室町時代、第Ⅲ期 江戸時代(末期)の3時期にまとめられる。第Ⅰ期については、竪穴住居跡1棟が検出されたにすぎないが、これにより周辺に奈良時代の集落跡が存することが明らかとなった。第Ⅱ期については、第Ⅱ-a期(13～14世紀代)および第Ⅱ-b期(15～16世紀代)に分けられる。殊に後者においては、溝で画された「屋敷地」が想定され、杉山端城の西南に位置した「屋敷地」であった可能性が高い。なお、第Ⅱ期の遺構は調査区の北半に集中しており、南半にほとんど遺構が認められないことは、あるいは当該地に杉山端城の「馬場」があったとする所伝と関連があるのかもしれない。第Ⅲ期の遺構は、逆に調査区の南半に集中し、これらは19世紀代前半代の「屋敷地」と考えられる。

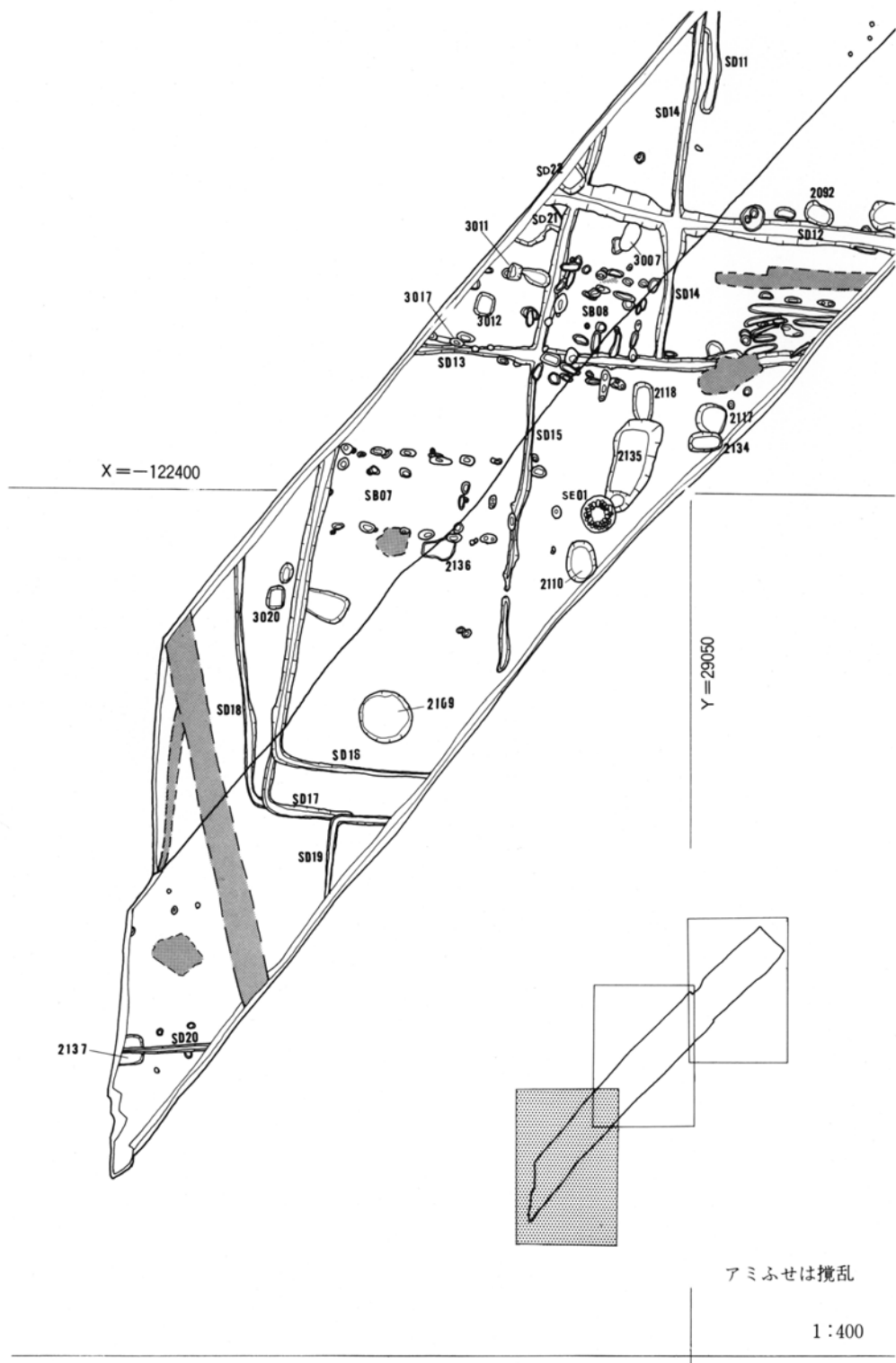
以上のように、杉山端城と関連する時期の遺構が検出され、城の周辺部の状況の一端を明らかにすることができたと考える。

出土遺物に関しても、当初の期待どおりに鎌倉～室町時代の多くの土器・陶磁器の出土があり、新城地方における当該期の様相についての知見を得ることができた。編年を組むにいたらなかったが、殊に土鍋A(「伊勢型鍋」)については、愛知県西部(尾張・海部郡甚目寺町～西春日井郡清洲町)出土のものとその形態および変遷が概ね期を一にしていることが明らかとなり、当該期の尾張～三河をむすぶ共通の編年資料として注目されるところとなった。また第Ⅲ期のSD14、SD12等から出土した土器・陶磁器類は、従来、不明であった新城地方における19世紀代の「一括資料」であり、当該期の様相を知る上で貴重な資料を得ることができたものとする。

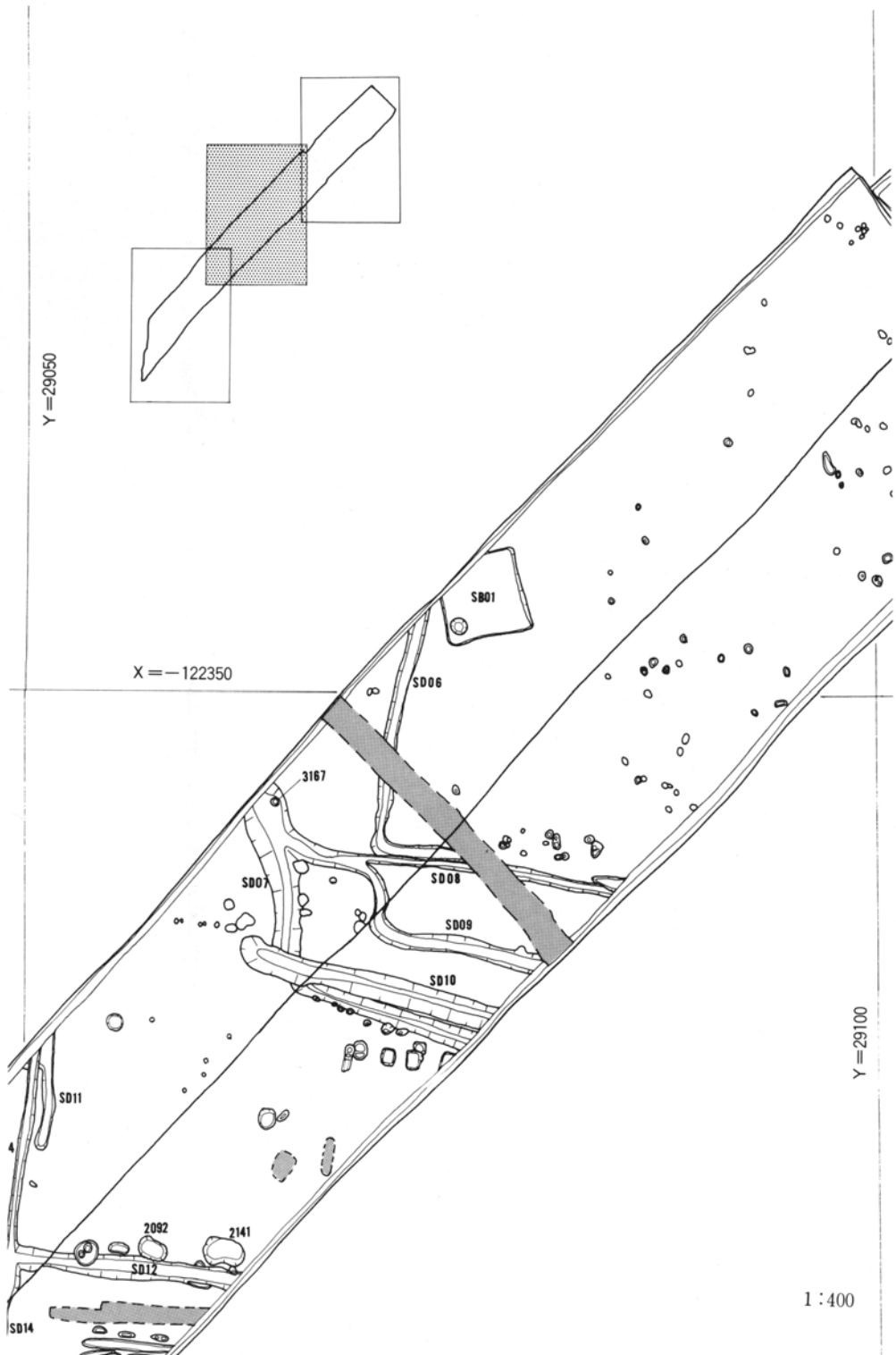
図 版

遺構実測図については、50分の1の原図を作成している。今回は紙幅等の都合で、400分の1で示した。標高等の詳細については当センターで保管する原図を御活用頂きたい。

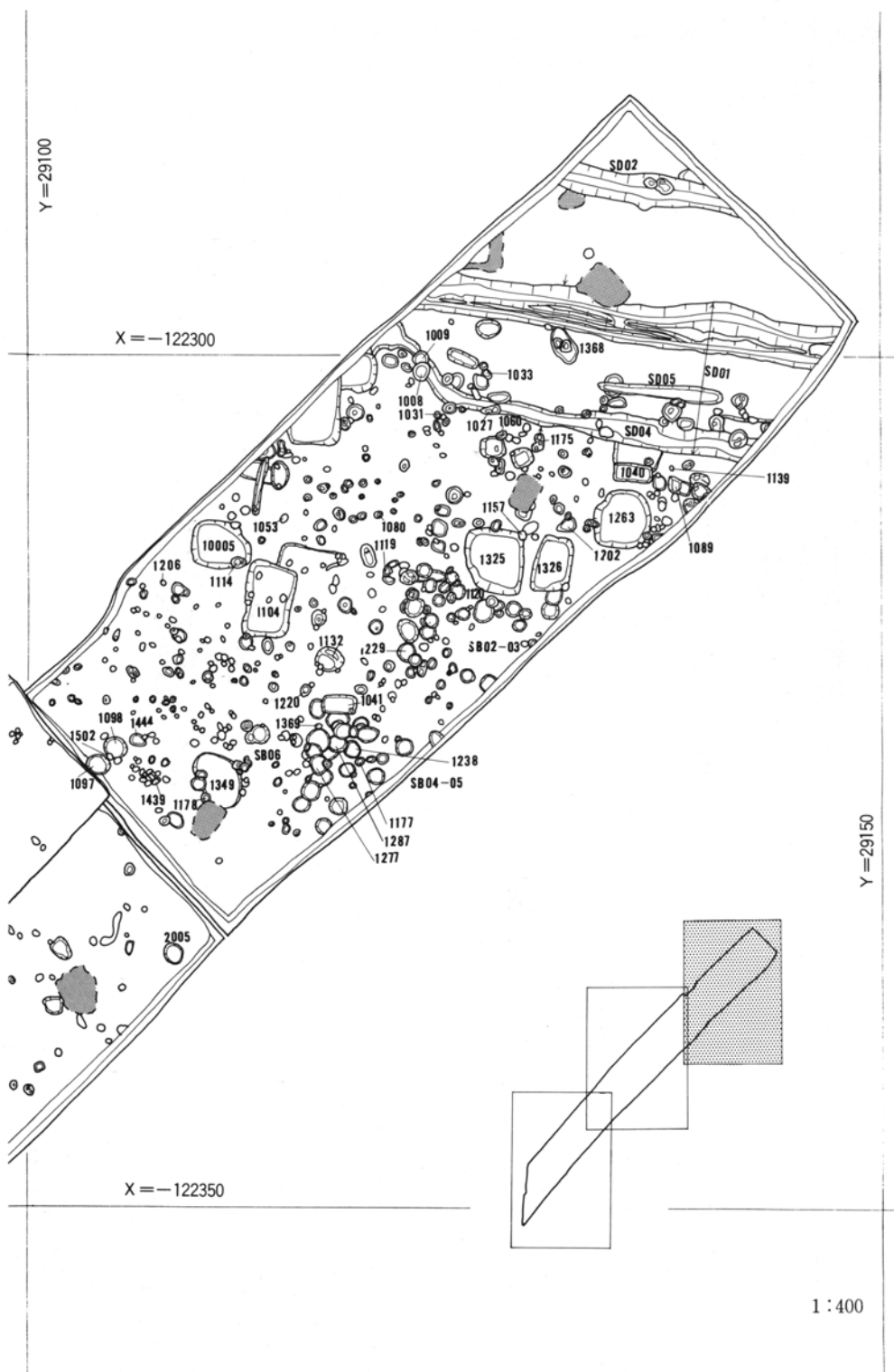
図版 1 遺構実測図 1



図版 2 遺構実測図 2



図版 3 遺構実測図 3



図版 4 61A区全景



左 北東より
下 南西より
(矢印は杉山端城)



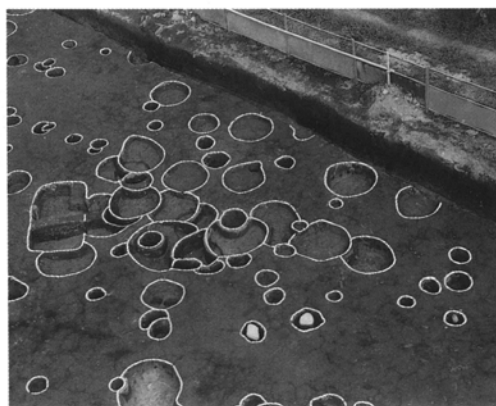
図版5 61A区遺構



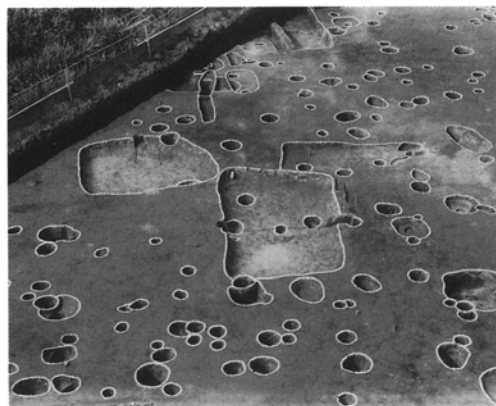
S D01 (東より)



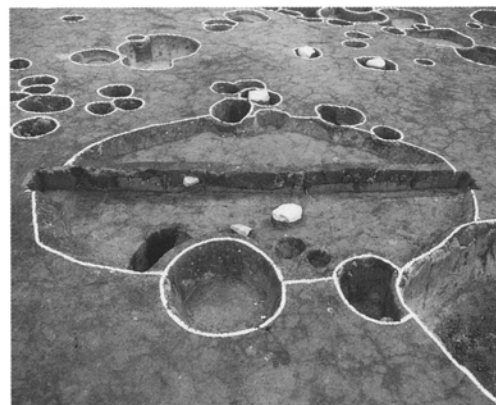
S D02(右)とS D01(左) (東より)



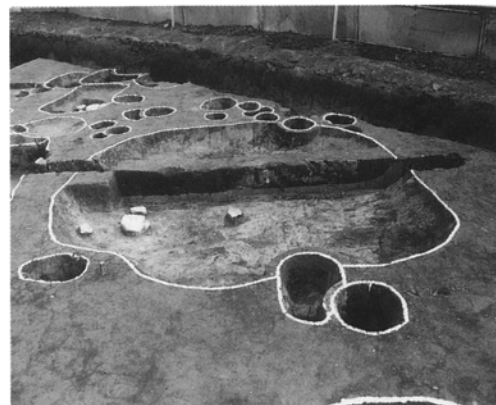
S B04・S B05 (西より)



S K1003 (南より)



S B06 (礎石・根石)



S K1263 (西より)

図版 6 61B区・62調査区全景



上 61B区 下 62調査区 (南西より)

図版7 61B区・62調査区遺構(1)



61B区南西部（北東より）



62調査区南西部（北東より）



61B区S D 09周辺（北より）



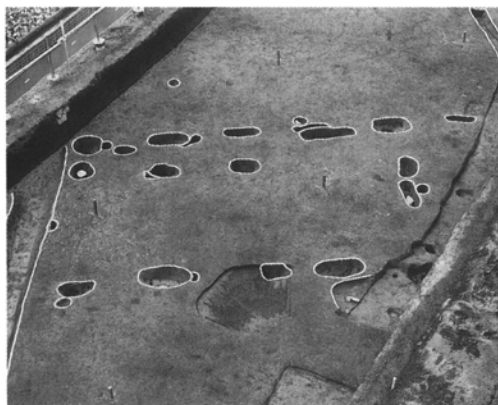
62調査区北東部（北東より）



61B区S E 01（北より）



62調査区S B 01（南より）



62調査区 S B 07 (南より)



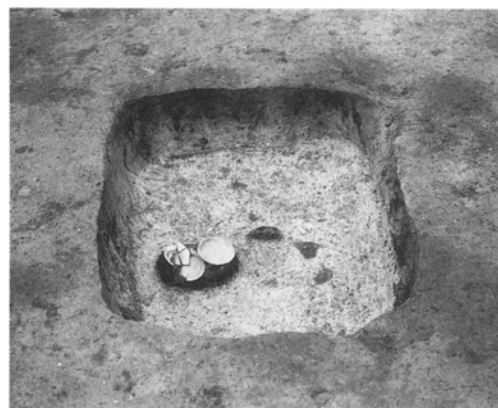
62調査区 S B 08 (南より)



61B区 S E 01断ち割り状況



62調査区 S D 12 (東西)・S D 14 (南北) (南より)

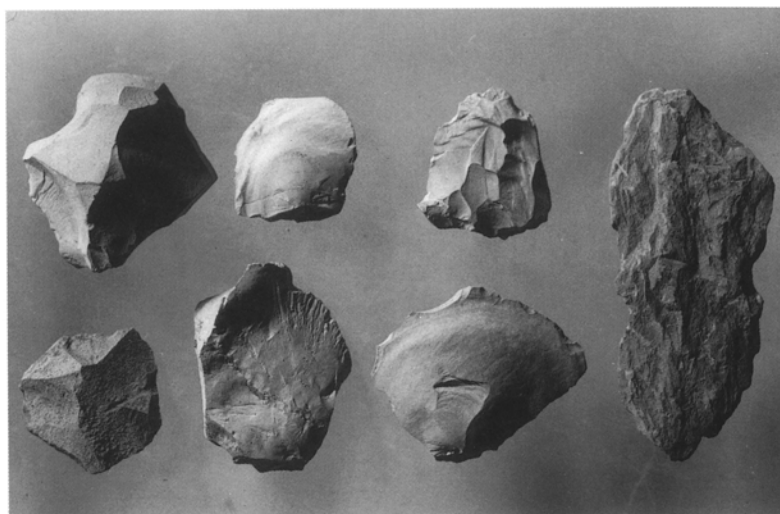


62調査区 S K 3012 (南より)



62調査区 S K 3020 (南より)

図版9 石器・縄紋土器



打製石斧（右端）と剥片（約1/3）



縄紋土器片（約2/3）

愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第5集

杉 山 遺 跡

1988年3月31日

編集発行 財団法人
愛知県埋蔵文化財センター
印刷 (株)刈谷高速印刷